佐賀市文化財調査報告書　第47集

千布二本黒木遺跡
（ちふにほんくろき）

平成５年３月

佐賀市教育委員会

発刊にあたって

金立南部地区における農業基盤整備事業は、平成2年に起工され、平成4年度で3年目をむかえます。すでに久富遺跡(平成2年度)、千布二本黒木遺跡（平成3年度)、友貞遺跡（平成4年度）の調査を行なっております。

本書は平成3年度に発掘調査を実施した千布二本黒木遺跡の発掘調査報告書であります。

今回の調査地点は狭小で、遺跡の全貌を明らかにするものではありませんが、弥生時代中期を中心とした集落跡と、中世から近世にかけての集落跡の存在を確認することができました。特に中世の掘立柱建物群は、狭小な調査区の中に密集して検出しており、当時の村落のありかたを考えるうえで大変貴重な資料になると思われます。

これらの資料は、佐賀市の歴史を考えるうえで貴重なものであり、この報告書が、郷土の歴史と文化財に対する認識と理解に少しでも役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しましてご協力いただきました佐賀県農林部、佐賀県教育委員会、並びに地元の方々に対しまして、心から厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

佐賀市教育委員会

教育長　野　口　　健

例　　言

1．本書は農業基盤整備事業に伴い、平成３年度に調査を実施した佐賀市金立町所在の千布二本黒木遺跡（１～５区）の発掘調査報告書である。

2．調査は佐賀県農林部の委託を受けて、佐賀市教育委員会が実施した。

3．調査地の所在および規模などは以下のとおり。

遺跡登録番号	2065･3083･4025･5045	遺跡略号	ＣＮＫ－１～５
調査地	佐賀市金立町大字千布字二本黒木	開発面積	260,000㎡
調査対象面積	2,100㎡	調査実施面積	2,100㎡
遺跡調査番号	9107	調査期間	平成３年７月25日～同年10月21日

4．発掘作業・整理作業・報告書作成の分担は以下のとおり。

表土除去	山豊建設株式会社
空中写真	有限会社　空中写真企画
遺構実測	有限会社　富士測量設計
個別遺構実測	友添丸子・原　京子・龍由美子・副島かすみ・西田　巌
遺構・遺物写真	西田
遺物復元	柴村悦子
遺物実測	貞包洋子・北村真弓美・西田
製図	北村真弓美・西田

5．調査･整理記録および出土遺物（Ⅰ種）は、佐賀市文化財資料館（佐賀市本庄町大字本庄1121）で一括保管している。また出土遺物（Ⅱ種）については佐賀市循誘収蔵庫で保管している。

6．本書の執筆はⅠ～Ⅺを西田　巌が、Ⅹを前田達男が分担した。また編集は西田がこれにあたった。

凡　　例

1．遺構については略記号を用いる。調査区ごとに連番号をつけ、番号の前に遺構分類番号をつけた。分類は以下のとおり。

SB:掘立柱建物	SD:溝	SE:井戸	SK:土壙	SX:不明遺構・その他	P:小穴・柱穴

2．原則として、遺構の測定値はm単位、遺物のそれはcm単位とした。

3．表示した方位はすべて座標北（G．N.）である。

4．遺物の実測図は基本的に、縄文・弥生土器及び土師器・陶磁器は断面白ヌキ、須恵器は断面黒塗り、瓦器は断面網かけで表現している。

本　文　目　次

Ⅰ．序　　説 …… 1
1．調査にいたる経過…… 1
2．調査の組織…… 1

Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 3
1．遺跡の位置…… 3
2．歴史的環境…… 3

Ⅲ．調査の概要 …… 7
1．調査の概要…… 7
2．調査成果の概要…… 7

Ⅳ．調査の記録　－１区－……11
1．弥生時代の遺構と遺物……11
(1) 土　　壙 ……11
2．古墳時代の遺構と遺物……13
(1) 溝 ……13

Ⅴ．調査の記録　－２区－……16
1．弥生時代の遺構と遺物……16
(1) 掘立柱建物 ……16
(2) 土　　壙 ……18
(3) 溝 ……19
(4) 不明遺構 ……28

Ⅵ．調査の記録　－３区－……34
1．中世以降の遺構と遺物……34
(1) 掘立柱建物 ……34
(2) 土　　壙 ……39

(3) 溝 ……39
(4) 不明遺構 ……41

Ⅶ. 調査の記録　－4区－……47
1．縄文時代の遺構と遺物……47
(1) 土　　壙 ……47
(2) その他の出土遺物 ……49
2．古墳時代の遺構と遺物……50
(1) 溝 ……50
(2) その他の出土遺物 ……52
3．平安時代の遺構と遺物……52
(1) 井　　戸 ……52
(2) その他の出土遺物 ……54
4．中世の遺構と遺物……55
(1) 掘立柱建物 ……55
(2) 井　　戸 ……68
(3) 土　　壙 ……71
(4) 溝 ……76
(5) 不明遺構 ……77
(6) その他の出土遺物 ……78

Ⅷ. 調査の記録　－5区－……82
1．弥生時代の遺構と遺物……82
(1) 河川跡 ……82
2．近の遺構と遺物……83
(1) 溝 ……83

Ⅸ. 小　　結 ……85

Ⅹ. 中世容器類の定量分析……89

挿　図　目　次

Fig. 1　千布二本黒木遺跡周辺主要遺跡分布図（1/30,000）…… 2
Fig. 2　千布二本黒木遺跡グリッド設定図（1/2,000）…… 6
Fig. 3　千布二本黒木遺跡１区遺構配置図（1/200）……10
Fig. 4　千布二本黒木遺跡１区基本層序（1/60）……11
Fig. 5　ＳＫ101・103土壙実測図（1/40）……12
Fig. 6　ＳＫ103出土遺物実測図（1/4）……12
Fig. 7　ＳＤ102溝及び土層断面実測図（1/100・1/40）……13
Fig. 8　ＳＤ102出土遺物実測図（1/4）……14
Fig. 9　千布二本黒木遺跡２区遺構配置図（1/200）……15
Fig.10　ＳＢ205掘立柱建物実測図（1/60）……16
Fig.11　ＳＢ206掘立柱建物実測図（1/60）……17
Fig.12　ＳＢ206出土遺物実測図（1/3）……18
Fig.13　ＳＫ208・210・212土壙実測図（1/40）……19
Fig.14　ＳＤ201溝及び土層断面実測図（1/100・1/40）……20
Fig.15　ＳＤ201出土遺物実測図①（1/4）……21
Fig.16　ＳＤ201出土遺物実測図②（1/4）……22
Fig.17　ＳＤ201出土遺物実測図③（1/4）……23
Fig.18　ＳＤ203溝及び土層断面実測図（1/100・1/40）……24
Fig.19　ＳＤ203出土遺物実測図①（1/4）……25
Fig.20　ＳＤ203出土遺物実測図②（1/4）……26
Fig.21　ＳＤ203出土遺物実測図③（1/4・1/3）……27
Fig.22　ＳＸ204不明遺構実測図（1/60）……28
Fig.23　ＳＸ204出土遺物実測図①（1/4）……29
Fig.24　ＳＸ204出土遺物実測図②（1/4・1/8）……30
Fig.25　ＳＸ204出土遺物実測図③（1/4）……31
Fig.26　ＳＸ204出土遺物実測図③（1/4）……32
Fig.27　千布二本黒木遺跡３区遺構配置図（1/200）……33
Fig.28　千布二本黒木遺跡３区基本層序（1/80）……34
Fig.29　ＳＢ301掘立柱建物実測図（1/80）……35

Fig.30　ＳＢ301出土遺物実測図（1/3・1/2）……36
Fig.31　ＳＢ302掘立柱建物実測図（1/80）……37
Fig.32　ＳＢ303・304・305掘立柱建物実測図（1/80）……38
Fig.33　ＳＢ305出土遺物実測図（1/3）……39
Fig.34　ＳＫ307土壙実測図（1/40）……39
Fig.35　ＳＤ306溝及び土層断面実測図（1/100・1/30）……40
Fig.36　ＳＤ306出土遺物実測図（1/3）……40
Fig.37　ＳＤ308・310溝及び土層断面実測図（1/100・1/30）……41
Fig.38　ＳＸ309出土遺物実測図（1/3）……42
Fig.39　ＳＸ311出土遺物実測図（1/3）……43
Fig.40　千布二本黒木遺跡４区遺構配置図（1/200）……45・46
Fig.41　ＳＫ411土壙実測図（1/40）……47
Fig.42　ＳＫ411出土遺物実測図（1/4・1/2）……48
Fig.43　ＳＫ439土壙実測図（1/40）……48
Fig.44　ＳＫ440・460土壙実測図（1/40）……49
Fig.45　小穴出土遺物実測図（1/3・1/2）……50
Fig.46　ＳＤ401溝及び土層断面（1/250・1/40）……51
Fig.47　ＳＤ401出土遺物実測図（1/4）……51
Fig.48　Ｐ4008小穴出土遺物実測図（1/4）……51
Fig.49　ＳＥ406・407井戸実測図（1/30）……52
Fig.50　ＳＥ415・416井戸実測図（1/30）……53
Fig.51　ＳＥ415・416出土遺物実測図（1/3）……53
Fig.52　Ｐ4126出土遺物実測図（1/3）……54
Fig.53　４区掘立柱建物群配置図（1/300）……54
Fig.54　ＳＢ443掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）……56
Fig.55　ＳＢ444掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）……57
Fig.56　ＳＢ445掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）……58
Fig.57　ＳＢ446掘立柱建物実測図（1/80）……59
Fig.58　ＳＢ447掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）……60
Fig.59　ＳＢ448・449掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）……61
Fig.60　ＳＢ450掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）……62
Fig.61　ＳＢ452・453掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）……64
Fig.62　ＳＢ454・455掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）……65

Fig.63　ＳＢ456掘立柱建物実測図（1/80）……66
Fig.64　ＳＢ457掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）……67
Fig.65　ＳＢ458掘立柱建物実測図（1/80）……68
Fig.66　ＳＥ404・412井戸実測図（1/40）……69
Fig.67　ＳＥ404・412出土遺物実測図（1/3）……69
Fig.68　ＳＥ413井戸実測図（1/40）……70
Fig.69　ＳＥ413出土遺物実測図（1/2）……71
Fig.70　ＳＥ427井戸実測図（1/40）……71
Fig.71　ＳＫ403土壙実測図（1/40）……72
Fig.72　ＳＫ403出土遺物実測図（1/4）……72
Fig.73　ＳＫ405・408・409土壙実測図（1/40）……73
Fig.74　ＳＫ410土壙実測図（1/40）……74
Fig.75　ＳＫ410出土遺物実測図（1/3）……74
Fig.76　ＳＫ422土壙実測図（1/40）……75
Fig.77　ＳＫ430・436土壙実測図（1/40）……75
Fig.78　ＳＤ414溝及び土層断面実測図（1/100・1/40）……76
Fig.79　ＳＤ433溝実測図（1/80）……77
Fig.80　ＳＸ438不明遺構実測図（1/30）……77
Fig.81　小穴出土遺物実測図（1/3）……78
Fig.82　表土下層出土遺物実測図（1/3・1/2）……80
Fig.83　千布二本黒木遺跡５区遺構配置図1/200）……81
Fig.84　ＳＸ503出土遺物実測図（1/4・1/2）……83
Fig.85　ＳＤ501溝実測図（1/80）……83
Fig.86　ＳＤ501出土遺物実測図（1/3・1/2）……84
Fig.87　千布二本黒木遺跡４区出土中世容器類の組成量……93

表　目　次

Tab. 1　千布二本黒木遺跡３・４区掘立柱建物一覧表……87
Tab. 2　ピット番号及び掘立柱建物柱穴番号対照表……88
Tab. 3　千布二本黒木遺跡４区出土中世容器類分類集計表……90
Tab. 4　千布二本黒木遺跡４区出土中世容器類分類集計表……91

Tab. 5　千布二本黒木遺跡４区出土中世容器類分類集計表 ……92
Tab. 6　容器類組成対照表 ……94

図　版　目　次

千布二本黒木遺跡周辺の景観
ＰＬ．１　(1) ＳＤ102溝（西から）　(2) １区調査区全景（南から）
(3) ２区調査区全景（東から）　(4) ＳＢ205　Ｐ３土層断面（東から）
(5) ＳＤ201溝（北から）　(6) ＳＸ204不明遺構周辺（北から）
ＰＬ．２　ＳＢ206掘立柱建物、ＳＤ201溝、ＳＤ203溝出土遺物
ＰＬ．３　ＳＤ203溝、ＳＸ204不明遺構出土遺物
ＰＬ．４　(1) ３区調査区全景　(2) ３区掘立柱建物群
(3) ３区調査区全景（北から）
ＰＬ．５　(1) ＳＢ302　Ｐ６土層断面（東から）　(2) ＳＤ308・310溝（東から）
ＳＢ301掘立柱建物、ＳＢ305掘立柱建物、ＳＤ306溝、ＳＸ309不明遺構出土遺物
ＰＬ．６　(1) ４区調査区全景
ＰＬ．７　(1) ４区掘立柱建物群①　(2) ４区掘立柱建物群②
(3) ＳＢ444掘立柱建物周辺（南から）　(4) ＳＢ454掘立柱建物周辺（西から）
(5) ＳＢ455掘立柱建物周辺（南西から）　(6) ＳＢ447掘立柱建物周辺（北西から）
ＰＬ．８　(1) ＳＫ460土壙（北西から）　(2) ＳＫ411土壙（北から）
(3) ＳＤ401溝（北東から）　(4) ＳＥ406・407井戸（南から）
(5) ＳＥ404井戸（北から）　(6) ＳＥ412井戸（東から）
(7) ＳＥ413土層断面（北から）　(8) ＳＥ413井戸（北西から）
ＰＬ．９　(1) ＳＥ427井戸（東から）　(2) ＳＫ403土壙（南から）
(3) ＳＫ404遺物出土状況（東から）　(4) ＳＫ422土壙（南から）
(5) ＳＤ414溝（北から）　(6) ＳＸ438不明遺構（西から）
ＰＬ．10　ＳＫ411土壙、Ｐ4244小穴、Ｐ4028小穴、Ｐ4003・4071・4236小穴、ＳＫ403土壙、Ｐ4106小穴、ＳＢ444掘立柱建物、Ｐ4106小穴、表土下層出土遺物
ＰＬ．11　(1) ５区調査区全景（南から）　(2) ＳＤ501溝（東から）
ＳＤ501出土遺物

Ⅰ．序　　説

1．調査にいたる経過

平成３年度の金立南部地区における農業基盤整備事業は26haという広範囲でその施工計画がなされた。これに伴い、平成２年度11月に当該地区の埋蔵文化財確認調査を実施した。調査は掘削を免れない水路予定地や高畑を中心に、任意に試掘坑を設けて行なった。試掘坑の掘削は、機械力及び人力によって行なった。調査の結果、削平を免れた高畑を中心に、4,000㎡に及ぶ遺跡の存在が確認された。この調査結果をもとに佐賀県農林部、佐賀県文化財課、佐賀市土地改良課、佐賀市教育委員会の四者で埋蔵文化財の保護に関する協議を実施した。その結果、水路建設により掘削を受ける部分と、工事の切り土により削平を受ける高畑部分2,100㎡について発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

発掘調査は平成３年７月25日から開始し、同年10月21日にすべての現場作業を終了した。また整理作業及び調査報告書作成は、平成４年４月から平成５年３月にかけて佐賀市文化財資料館で行なった。

真夏の猛暑のなかで常に苦労を共にした地元作業員の方々や、調査に際し便宜をはかって下さった地元の方々、並びに関係者各位に心からお礼申しあげたい。

2．調　査　の　組　織

調査主体　佐賀市教育委員会

事務局　佐賀市教育委員会　文化課

文化課長	中野和彦	
文化係長	野口義通（庶務担当）	
事務吏員	甲木亮一（庶務担当　平成３年度）	
	増田耕輔（庶務担当　平成４年度）	
文化財係長	福田義彦	
事務吏員	木島慎治（確認調査担当）	
	西田　巌（本調査・報告書担当）	

発掘作業員　広瀬八重子・広瀬幸子・後藤美智江・村川キクエ・生田美代子・福田妙子・武富サチコ・大林里子・江下生子・宮崎久枝・平方スミ子・友添丸子・原　京子・龍由美子・副島かすみ

調査協力　佐賀県教育委員会・佐賀県農林部・中部農林事務所・佐賀市土地改良課・金立土地改良区・地元各位

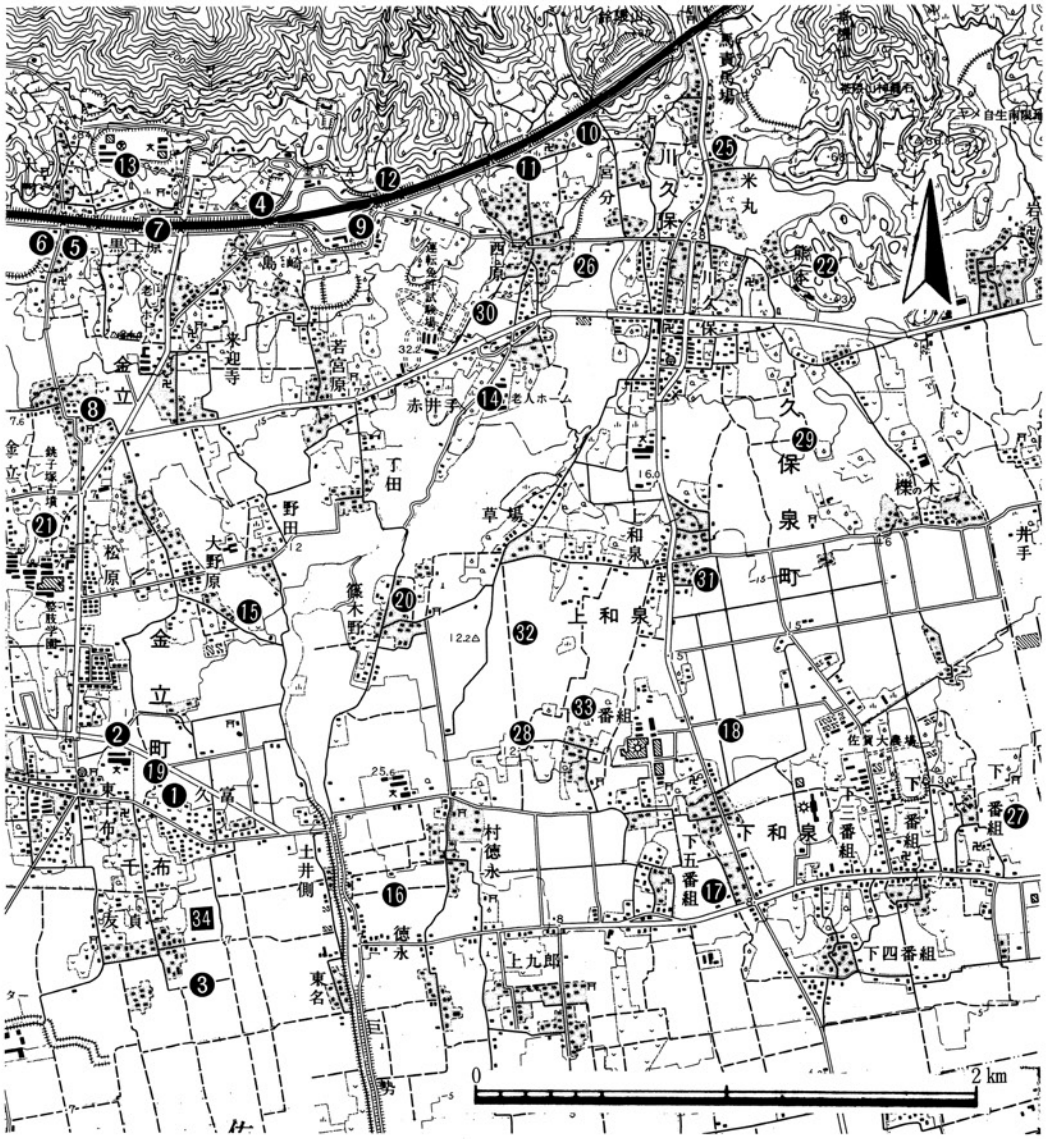


Fig. 1　千布二本黒木遺跡周辺主要遺跡分布図（1/30,000）

①久富遺跡１区　②東千布遺跡　③友貞遺跡　④金立開拓遺跡　⑤大門遺跡　⑥大門西遺跡
⑦六本黒木遺跡　⑧来迎寺遺跡　⑨藤附遺跡　⑩鈴隈遺跡　⑪西原遺跡　⑫丸山遺跡
⑬黒土原遺跡　⑭琵琶原遺跡　⑮大野原遺跡　⑯村徳永遺跡　⑰立野遺跡　⑱泉三本栗遺跡
⑲久富遺跡０区　⑳篠木野遺跡　㉑銚子塚古墳　㉒熊本山古墳　㉕関行丸古墳　㉖御手水遺跡
㉗本村遺跡　㉘古村遺跡　㉙東高田遺跡　㉚大日遺跡　㉛上和泉遺跡　㉜徳永遺跡
㉝古陣館跡　**㉞千布二本黒木遺跡**　　分布図番号は＜註＞の番号に同じ

II．遺跡の位置と環境

1．遺 跡 の 位 置

佐賀市は、佐賀県の東南部に広がる佐賀平野のほぼ中央に位置し、東は神埼郡神埼町・同郡千代田町・佐賀郡諸富町、西は佐賀郡大和町・小城郡三日月町、北は佐賀郡大和町、南は佐賀郡東与賀町・同郡川副町と接している。佐賀市域は南北に長く、北は脊振山系から南は有明海沿岸にまでおよんでいる。

佐賀市金立町は、北は脊振山系にかかり、南は沖積平野の北部にあたる。東には巨勢川が南北にその流路をとり、西は佐賀郡大和町に接する。遺跡が所在する千布は、ちょうど町の東西を横断する県道小城・北茂安線と、南北を縦断する県道佐賀・川久保・鳥栖線が交差するあたりにある。周辺は農業が盛んで、大部分が田・畑等の農地として利用されている。

千布二本黒木遺跡は、佐賀市金立町大字千布字二本黒木に所在し、地形的には沖積地との境に近い複合扇状地の先端部分に立地している。周辺は水田化が進んでおり、開墾により湮滅した遺構が数多くあると思われる。今回調査した地点も削平を免れた高畑部分が中心で、その標高は5.2～6.2mを測る。また周辺には古墳初頭の集落の一部が調査された久富遺跡[1]、弥生中期の甕棺墓群である東千布遺跡[2]、中世の屋敷地の一部が調査された友貞遺跡[3]などが存在する。

2．歴 史 的 環 境

佐賀市内には数多くの遺跡が存在するが、その大部分が脊振山麓部一帯及びそこから南へ広がる平野部に集中する。

旧石器時代では、断片的な資料が得られているのみで、その概要は明らかではない。

縄文時代の遺跡は、金立町では金立開拓遺跡[4]（早・前期、後期）、大門遺跡[5]（前期、後・晩期）、大門西遺跡[6]（後期）、六本黒木遺跡[7]（前期、後・晩期）、来迎寺遺跡[8]（中期・後期）の調査が行なわれている。特に金立開拓遺跡では、後期の竪穴住居・土器埋納遺構が検出されている。隣接する久保泉町では藤附A遺跡[9]（後期）、鈴隈遺跡[10]・西原遺跡[11]（晩期）の調査が行なわれ、各時期の土器とともに大量の石器が出土している。また丸山遺跡[12]、黒土原遺跡[13]では、支石墓、甕棺墓等が検出されており、当時の墓地の様相を窺い知ることができる。

弥生時代に入ると、それまで山麓部中心であった遺跡の分布も、稲作の浸透とともに急速に平野部に広がる。集落遺跡としては、琵琶原遺跡[14]（後期～終末）、大野原遺跡[15]（後期～終末）、村徳永遺跡[16]（中期～後期）、立野遺跡[17]（中期～後期）、泉三本栗遺跡[18]（前期～中期）、久富遺跡[19]（中期）等がある。特に琵琶原遺跡、大野原遺跡では後期～古墳初頭にかけての竪穴住居が数多く検出され、村徳永遺跡では後期の掘立柱建物が100棟以上も検出されており、当該期における拠

点的な集落であった可能性が高い。また周辺では埋葬遺跡の調査は以外に少なく、前期～中期の甕棺墓群である東千布遺跡、中期の甕棺墓群の一部が調査された篠木野遺跡[20]がある程度である。今回調査した千布二本黒木遺跡は東千布遺跡に近接し、確認した中期の集落は甕棺墓群とほぼ同時期であるため、この墓地群との関連が十分考えられる。

古墳時代になると4世紀代に築かれた銚子塚[21]（前方後円墳）をはじめとして、脊振山南麓に数多くの古墳が築造される。5世紀代には船型石棺を出土した熊本山古墳[22]、横口式の装飾家形石棺を有する西隈古墳[23]（分布図外）、竪穴石室・船型石棺直葬・初期横穴石室等の多様な埋葬主体をもつ丸山古墳群[24]が築かれる。6世紀代には初期横穴石室を有する関行丸古墳[25]（前方後円墳）が築かれ、それ以後は、後期群集墳が主流を占めるようになる。こういった埋葬遺構の調査例に比べ集落跡の調査例は格段に少なかったが、近年増加しつつある。琵琶原遺跡・大野原遺跡・久富遺跡・御手水遺跡[26]では4世紀代の集落、村徳永遺跡K地区・本村遺跡[27]では5世紀代の集落、古村遺跡[28]・東高田遺跡[29]・御手水遺跡では6世紀～7世紀代の集落が確認されている。

奈良・平安時代には大和町久池井に国府が置かれたこともあり、政治的な様相を帯びてくる。東高田遺跡・大野原遺跡では古代官道と考えられる遺構を検出している。琵琶原遺跡では、底部に「稲主」とヘラ描きされた須恵器坏が出土し、古村遺跡では緑釉陶器が出土している。また大日遺跡[30]・東高田遺跡・御手水遺跡では、通常の集落形態とは異なった、竪穴住居を伴ず掘立柱建物群のみで構成された集落を確認している。その他、上和泉遺跡[31]や泉三本栗遺跡では、平安時代前半の良好な一括資料も出土している。

中世については近年調査例が増加し、その様相が明らかにされつつある。立野遺跡・村徳永遺跡・本村遺跡・徳永遺跡[32]等で調査が行なわれている。特に、本村遺跡では一辺40～70mの方形区画溝を伴う居館跡が、徳永遺跡では一辺100～130mの規模を有する方形区画溝を伴う居館跡が検出されている。その他、古陣館跡[33]は未調査ではあるが、ほぼ1町(108m)×2町(216m)の長方形の掘とそれに伴う土塁が現状で確認できる。今後の調査例の増加と、文献資料からのアプローチにより、中世村落のありかたが明らかにされていくものと期待される。

＜註＞

1）木島慎治『久富遺跡(1区)』佐賀市文化財調査報告書第39集　佐賀市教育委員会　1992
2）福田義彦『東千布遺跡』佐賀市文化財調査報告書第15集　佐賀市教育委員会　1985
3）平成4年度佐賀市教育委員会調査実施
4）蒲原宏行ほか『金立開拓遺跡』佐賀県文化財調査報告書第77集　佐賀県教育委員会 1984
5）木下之治『大門遺跡－第1次調査－』佐賀市文化財調査報告書第8集　佐賀市教育委員会　1972
　木下之治『大門遺跡－第2次調査－』佐賀市文化財調査報告書第9集　佐賀市教育委員会　1973
6）高瀬哲郎ほか『大門西遺跡』佐賀県文化財調査報告書第51集　佐賀県教育委員会 1980
7）6)に同じ

8）加藤元信『来迎寺遺跡』佐賀市文化財調査報告書第27集　佐賀市教育委員会　1990
9）高瀬哲郎ほか『香田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第57集　佐賀県教育委員会 1981
10）蒲原宏行「鈴隈遺跡」『九州横断道関係埋蔵文化財発掘調査概報第５集』佐賀県教育委員会　1978
11）東中川忠美ほか『西原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第66集　佐賀県教育委員会 1983
12）東中川忠美ほか『久保泉丸山遺跡』佐賀県文化財調査報告書第84集　佐賀県教育委員会　1986
13）福田義彦『黒土原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第19集　佐賀市教育委員会　1987
14）福田義彦『琵琶原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第13集　佐賀市教育委員会　1981
15）西田　巌『大野原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第48集　佐賀市教育委員会　1993
16）木島慎治『村徳永遺跡-A・B地区-』佐賀市文化財調査報告書第26集　佐賀市教育委員会 1989
福田義彦『立野遺跡・村徳永遺跡(C地区)』佐賀市文化財調査報告書第26集　佐賀市教育委員会 1989
木島慎治ほか『南宿遺跡・本村遺跡・阿高遺跡・牟田寄遺跡・村徳永遺跡(D地区)・古村遺跡』佐賀市文化財調査報告書第28集　佐賀市教育委員会　1990
木島慎治『村徳永遺跡-E・F・G・H地区-』佐賀市文化財調査報告書第32集　佐賀市教育委員会 1990
前田達男『村徳永遺跡-J地区-』佐賀市文化財調査報告書第34集　佐賀市教育委員会　1991
前田達男『村徳永遺跡(K地区)・篠木野遺跡(1区)』佐賀市文化財調査報告書第37集　佐賀市教育委員会　1991
西田　巌『村徳永遺跡-L地区-』佐賀市文化財調査報告書第42集　佐賀市教育委員会　1992
17）福田義彦『立野遺跡・村徳永遺跡(C地区)』佐賀市文化財調査報告書第26集　佐賀市教育委員会 1989
18）福田義彦『泉三本栗遺跡』佐賀市文化財調査報告書第18集　佐賀市教育委員会　1987
19）福田義彦「久富遺跡」『東千布遺跡』佐賀市文化財調査報告書第15集　佐賀市教育委員会　1985
20）角信一郎『篠木野遺跡・琵琶原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第45集　佐賀市教育委員会　1993
21）木下之治編『銚子塚』佐賀市教育委員会　1976
22）木下之治・小田富士雄「熊本山船型石棺墓」『帯隈山神籠石とその周辺』佐賀県文化財調査報告書第16集　佐賀県教育委員会 1967
23）佐賀市教育委員会編『西隈古墳』　1975
24）12)に同じ
25）渡辺正気『佐賀市関行丸古墳』佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第七輯　佐賀県教育委員会 1958
26）平成４年度佐賀市教育委員会調査実施
27）前田達男『本村遺跡』佐賀市文化財調査報告書第29集　佐賀市教育委員会　1990
徳永貞紹『本村遺跡』佐賀県文化財調査報告書第102集　佐賀県教育委員会　1991
28）木島慎治ほか『南宿遺跡・本村遺跡・阿高遺跡・牟田寄遺跡・村徳永遺跡・古村遺跡』佐賀市文化財調査報告書第28集　佐賀市教育委員会　1990
29）西田　巌編『原ノ町遺跡・東高田遺跡・櫟木遺跡・北宿遺跡・南宿遺跡』佐賀市文化財調査報告書第38集　佐賀市教育委員会　1992
30）木島慎治『大日遺跡』佐賀市文化財調査報告書第25集　佐賀市教育委員会　1989
31）福田義彦『上和泉遺跡』佐賀市文化財調査報告書第20・21集　佐賀市教育委員会　1988
32）平成３年度～佐賀市教育委員会調査実施
33）佐賀市久保泉町大字上和泉所在（久保泉工業団地予定地内）

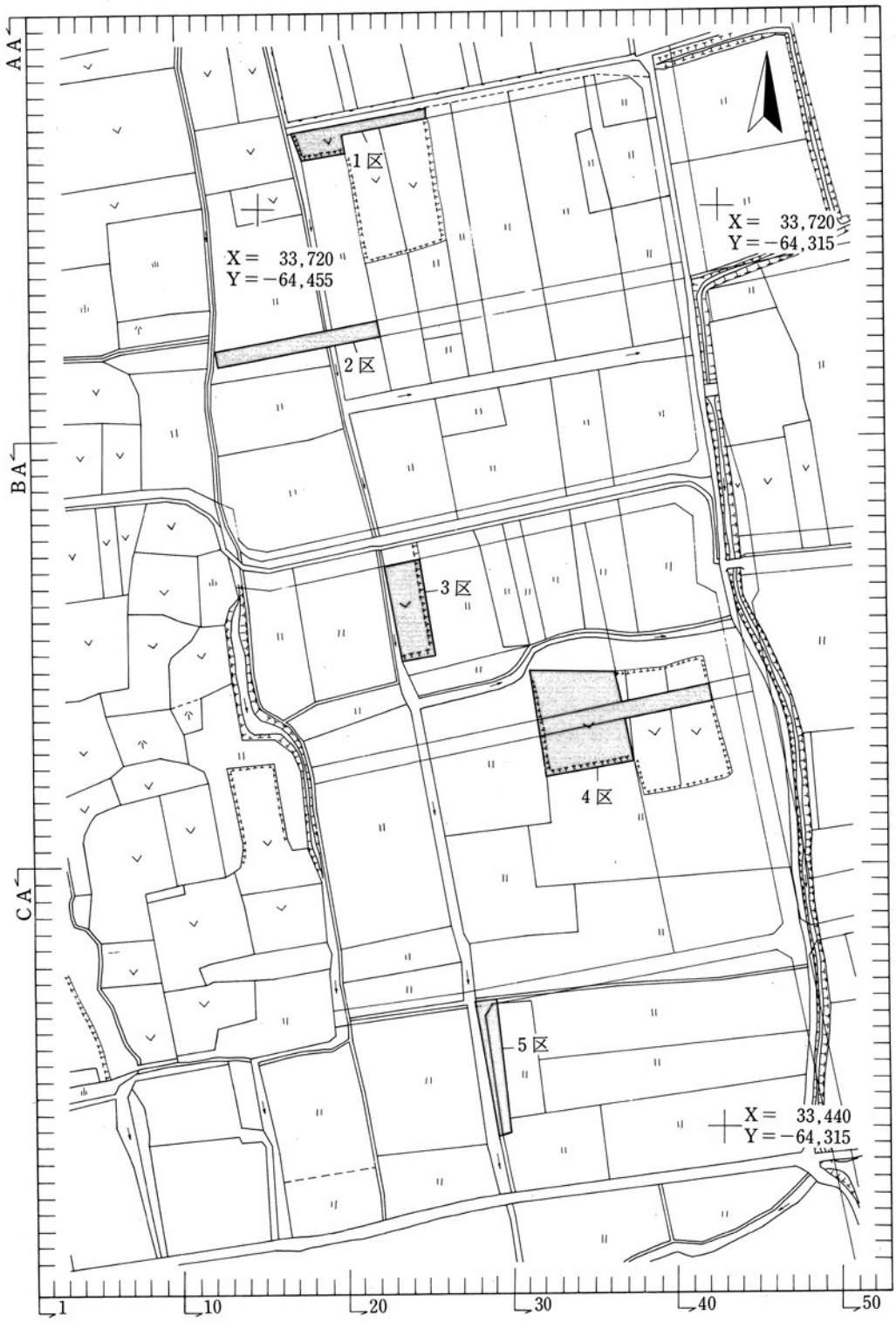


Fig. 2　千布二本黒木遺跡グリッド設定図（1/2,000）

Ⅲ．調 査 の 概 要

1．調 査 の 概 要

調査は掘削機による表土除去作業から開始した。表土は20～80cm程度で、基盤は淡黄褐色の砂質土もしくはやや粘性のある土であった。

表土除去後、国土座標を基準に５m方眼のグリッドを設定し、人力による掘削及び記録作業に入った。このグリッドは調査の基本となるもので、1/100の遺構配置図•1/20の全体平面図を作成する際の基準とした。グリッドには国土座標X＝33K780、Y＝－64K525の交点を始点とし、東に１、２、３…、南にＡＡ、ＡＢ、ＡＣ…と名称を与え、それぞれ１グリッドをＡＡ-１、ＡＡ-２と表示することにした。(Fig.２参照)

調査地は狭小な５地区に分かれており、便宜的に、北から順に１区、２区、３区、４区、５区と呼称することにした。遺構番号は重複を避けるため１区を100番台、２区を200番台、３区を300番台、４区を400番台、５区を500番台とした。１、２、５区は支線水路予定地、３、４区は切り土により削平を受ける高畑部分で、上記グリッドのＡＧ～ＣＱ-12～42グリッドにあたる。全体的に開墾等の削平を受ており、遺構の残存状態は良好とはいえなかった。

2．調査成果の概要

１～５区まで調査区が分割されているため、以下各調査区ごとにその概要を述べる。

１区　高畑部分にあたり、60～80cmの耕作土及び盛り土直下に淡黄褐色砂質土の基盤面が存在する。遺構は暗褐色～黒褐色で検出され、検出面の標高は6.3m前後であった。検出面はほぼ平坦であったが、東側は谷地形になると思われ黒褐色の遺物包含層が堆積していた。調査区の半分程度はカクランで削られており、湮滅した遺構が数多くあるものと考えられる。今回は弥生時代の遺構を中心に検出した。以下、時代別にその概要を述べる。

弥生時代の遺構には土壙２基、小穴多数がある。中でもＳＫ103は弥生中期の土器が比較的まとまって出土している。ただ遺構の大部分がカクランで削られているため全貌が知り得ないのが惜しまれる。また小穴の中には、巨勢川の対岸にある村徳永遺跡で確認した掘立柱建物の柱穴に類似したものが含まれいた。調査区が狭小なためその配置は明らかでないが、周辺に掘立柱建物が存在していることは十分考えられる。

古墳時代の遺構としては溝１条を検出しているが、遺物の量が少ないため確実にこの時期になるのか断定はできない。

２区　水田下にあり、厚さ20cm程度の耕作土直下に基盤面が存在し、それは淡黄褐色の砂質

土もしくはやや粘性のある土であった。遺構は基本的に黒褐色で検出され、検出面の標高は6.0m前後であった。1区同様カクランが多く、そのため湮滅した遺構も数多くあるものと思われる。検出した遺構は掘立柱建物2棟、土壙5基、溝4条、不明遺構1基で、そのほとんどが弥生時代中期の所産であった。

掘立柱建物は1×1間の規模で2棟検出している。他にも柱穴と考えられるピットを検出しているが、調査区外にでるため明確に建物として認定できなかった。土壙は全体に遺物量が少なく、一括資料を得られたものはない。またSK212は遺物が皆無であったが、遺構の形状及び埋土の状態等より縄文時代まで遡る可能性がある。溝は4条検出しているが、内1条は近世の可能性がある。特にSD201・203は幅3.0m前後と比較的大型の溝で、さらに大量の弥生土器が出土していることから集落を区画するような溝（環濠）になる可能性がある。遺構の大部分が調査区外にあると思われるSX204は、現況ではどのような遺構になるか判断がつきかねるが、比較的大量の弥生土器が出土している。

3区　高畑部分にあたり表土は耕作土も含め70cm程度であった。基盤面は淡黄褐色の砂質土で、遺構は暗灰褐色及び黒褐色で検出した。検出面の標高は5.6m前後であった。検出した遺構は中世～近世にかけての掘立柱建物5棟、土壙1基、溝3条、不明遺構2基で、この他ピット多数であった。

掘立柱建物の中でも遺構全体を検出できたのはSB301・302の2棟で、立て替えが行なわれたものと考えられる。この2棟の建物は柱穴掘方も比較的大型でしっかりとしており、当該期の掘立柱建物の構造を知る上で貴重な資料である。また3条の溝はいずれも建物群と平行して走っているため、集落を区画する溝になる可能性は高い。遺物は土師器、瓦器の他、陶磁器類が出土している。

4区　高畑部分にあたり表土は耕作土も含め80cm程度であった。基盤面は淡黄褐色土の砂質土で、遺構は暗灰褐色及び黒褐色で検出した。検出面の標高は5.6～5.7mであった。検出した遺構は掘立柱建物19棟、井戸8基、土壙26基、溝4条、不明遺構2基、この他無数のピットがあり、現在確認できている掘立柱建物よりさらに増える可能性がある。縄文時代～中世にかけての所産である。また調査区の東側部分は（SD433より以東）は、基盤が褐色の砂層に変わり遺構を確認していない。以下、時代別にその特徴を述べる。

縄文時代の遺構は土壙のみを確認している。遺物を伴うものはSK411のみで、他は遺物が皆無であった。ただ周辺より縄文早期の土器が出土しており、埋土の状態からも考えて同時期の所産である可能性がある。

古墳時代の遺構は溝を1条確認しているのみである。遺存状態も不良で、かなり削平を受けているものと考えられる。また小穴より布留甕の破片が出土している。周辺には同時期の集落の存在が考えられるが、SD401以外には遺構が確認できていないため不明である。

平安時代の遺構は井戸を５基確認しているのみであるが、中世とした掘立柱建物の中にもこの時期まで遡るものが含まれている可能性がある。遺物は少なく土師器の坏・椀類が少量出土したのみである。

中世の遺構は掘立柱建物が中心で、可能性があるものも含め19棟を確認している。３×２間もしくは３×１間を基本としており、中にはＳＢ444（４×２間）のように床面積が45.6m²と大型の建物も含まれていた。また狭小な調査区の中に密集して検出しており、少なくとも２～３回程度の立て替えが行なわれたことが考えられる。井戸は４基あるが、いずれも出土遺物が少なかった。中でもＳＥ413では井戸枠を比較的良好な形で検出しており、当該期の井戸の構造を知る上で貴重である。検出できた溝のうち、ＳＤ414・433は掘立柱建物群とほぼ平行して走っており、これらの建物群を区画する溝になる可能性が高い。また不明遺構としたものの中にはＳＸ438のように炉跡の可能性があるものがあり、当時の食・住の関係を考える上で興味深い。検出した遺構の数の割には遺物が少なく、縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁等が出土している。

５区　水田下にありおよそ20cmの耕作土直下に黄褐色土の基盤面が存在する。遺構は基本的に暗灰褐色及び黒褐色で検出され、検出面の標高は5.2～5.3mであった。検出した遺構は弥生時代の河川跡と近世の溝１条及び小穴多数であった。遺物は弥生土器、石器、磁器、陶器が出土している。

以上概略を簡単に述べた。いずれも狭小な調査区のため遺跡の全貌を明らかにするものではなかったが、弥生時代中期を中心とした集落跡と中世から近世にかけての集落跡の存在を確認することができた。特に３・４区で検出した中世を中心とした集落は狭小な調査区にもかかわらず多数の掘立柱建物を確認しており、この地に当時の屋敷地が存在していたことが十分考えられる。

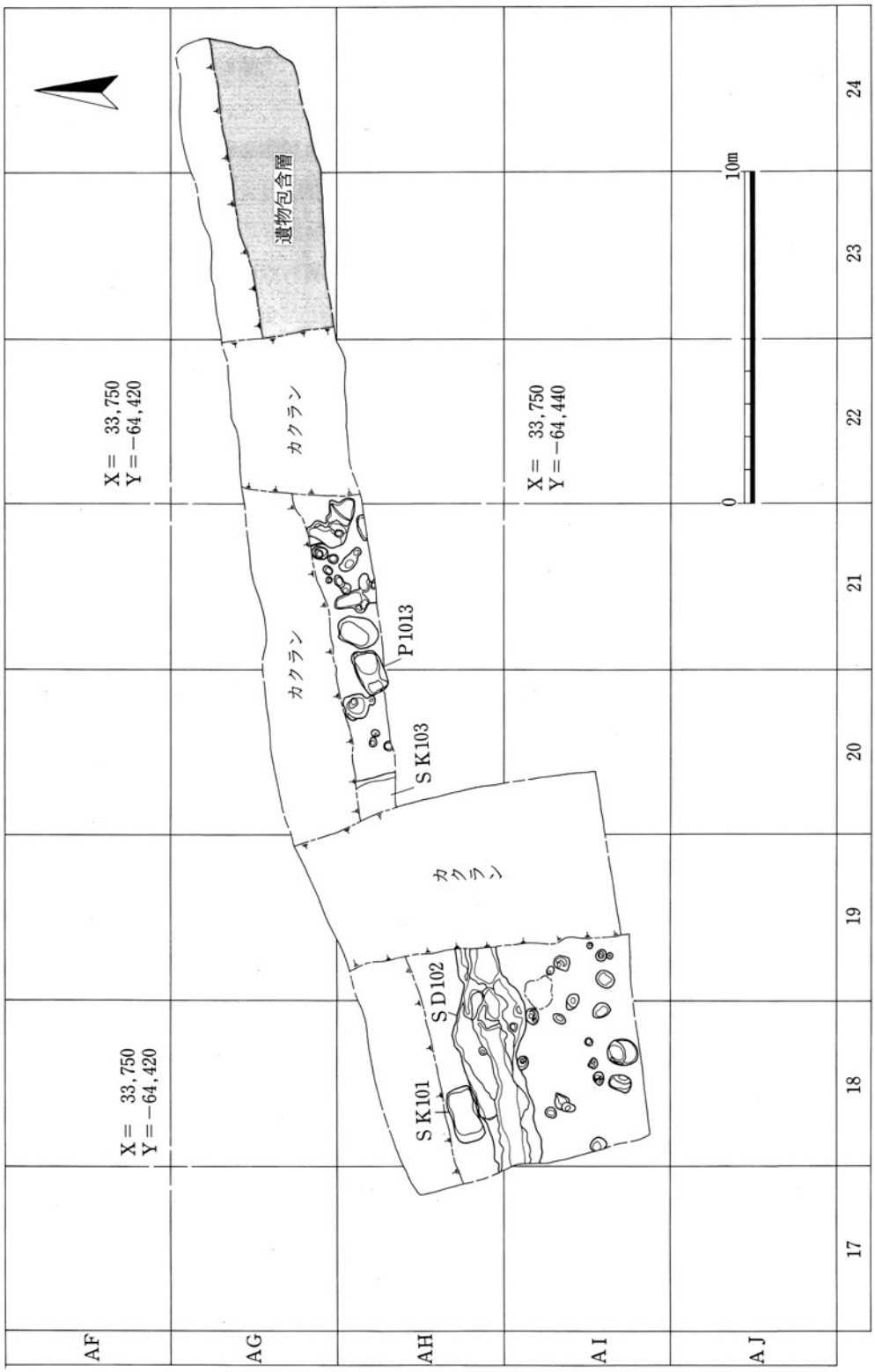


Fig. 3　千布二本黒木遺跡1区遺構配置図（1/200）

Ⅳ．調査の記録　－１区－

１区は高畑にあたり、基本層序はFig．4に示したとおりで、１層は厚さ約20～50cmの現耕作土、その下に厚さ10～30cmの地山土が混入した褐色の盛土が存在する。その直下に淡黄褐色の基盤面を検出している。

調査区の半分程度はカクランで削られていたため検出できた遺構はわずかであった。検出した遺構は弥生時代の土壙２基、古墳時代の溝１条、小穴多数であった。小穴のなかにはＰ1013のように、村徳永遺跡で検出した掘立柱建物の柱穴に類似したものも含まれていた。調査区の東側は谷地形になるものと思われ、黒褐色土の遺物包含層が堆積していた。

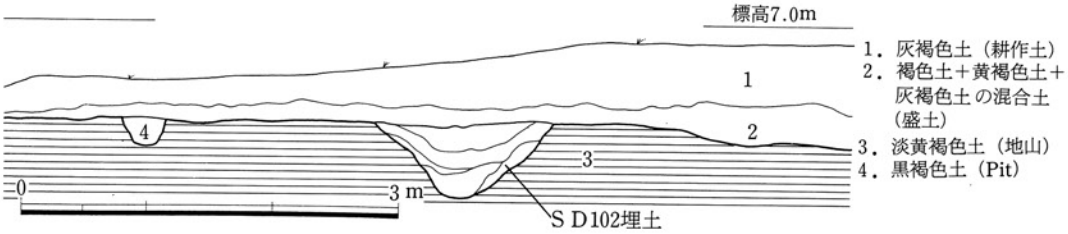


Fig. 4　千布二本黒木遺跡１区基本層序（1/60）

１．弥生時代の遺構と遺物

(1) 土　　壙

弥生時代中期と思われる土壙を２基検出している。

ＳＫ101土壙（Fig．5）

ＡＨ－18グリッドで検出した。検出面の標高は6.2m。平面形は長軸1.65m、短軸0.8mの隅丸長方形を呈し、深さ0.1～0.15mを測る。底面は概ね平坦で、壁面は角度をもって立ち上がる。埋土は淡黄褐色土が少量混入する黒褐色土であった。遺構の形態より土壙墓の可能性がある。遺物は埋土中より弥生土器片が微量出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＫ103土壙（Fig．5）

ＡＨ－20グリッドで検出した。検出面の標高は6.1m。遺構の北部及び西部はカクランに削られ、さらに南部は調査区外にでるためその全貌は知り得ない。深さは0.3m程度で、底面は概ね平坦。壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土は黒褐色土を基調としていた。遺物は埋土中より弥生中期の土器がビニール５袋程度出土した。

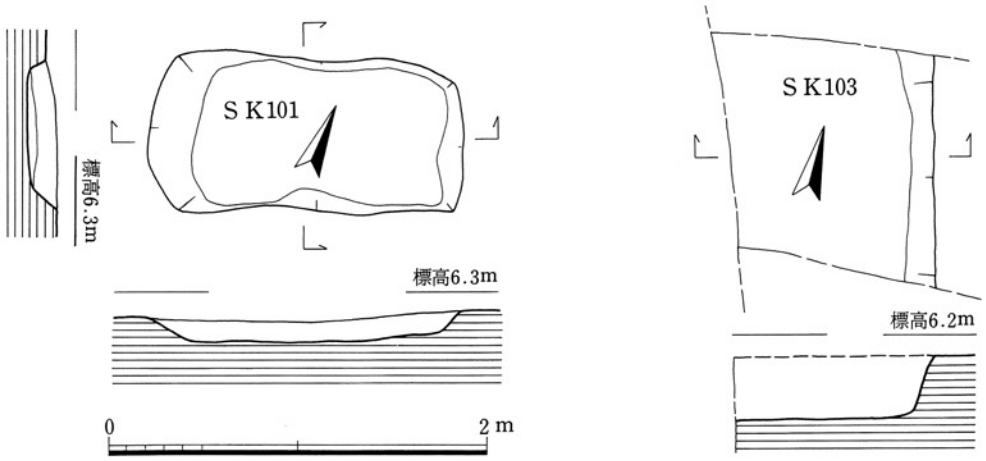


Fig. 5　ＳＫ101・103土壙測図（1/40）

出土遺物（Fig. 6）

甕（１～４）　１・２は口縁部破片。１は復元内口径24.8cm、同外口径32.2cm。口縁部横ナデ、内面ナデ調整で、外面に黒斑が認められる。外面褐色、内面赤褐色を呈する。２は復元内口径

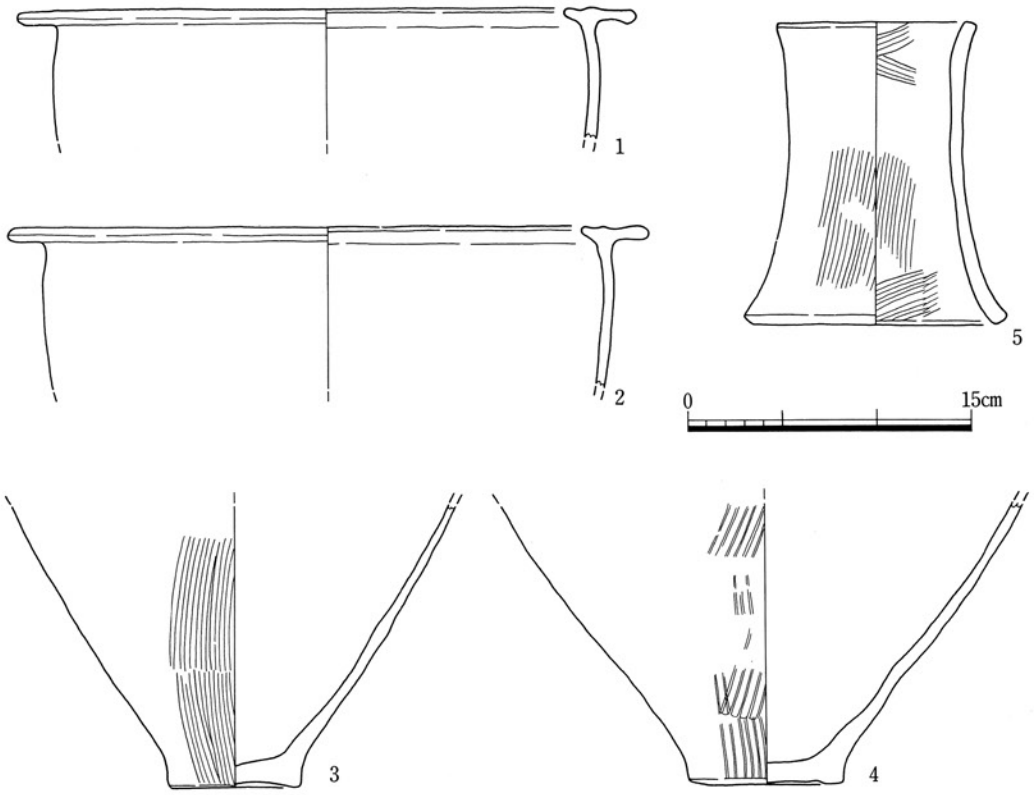


Fig. 6　ＳＫ103出土遺物実測図（1/4）

26.2cm、同外口径33.0cm。口縁部横ナデ、内面ナデ調整で、外面に煤が付着する。外面暗褐色、内面淡赤褐色を呈する。3・4は底部破片。3は復元底径6.8cm。外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整で、褐色を呈する。4は底径7.9cm。外面縦方向の粗いハケ目、内面ナデ調整で、褐色を呈する。

器台（5） 復元受部径10.4cm、同裾部径12.9cm、器高15.8cm。全体的に磨耗のため調整不明瞭だが、外面縦方向のハケ目、受・裾部内面横方向のハケ目調整を行うようである。淡黄褐色を呈する。

2．古墳時代の遺構と遺物

(1) 溝

1条（SD102）検出している。遺構からは遺物がわずかしか出土しておらず古墳時代として確定はできないが、表土下層及びカクラン内から古墳時代の遺物が出土していることから、ここでは古墳時代の遺構として報告しておく。

SD102溝（Fig. 7）

AH・AI－18・19グリッドで検出した。東西方向に検出し、その延長は調査区外にある。断面は基本的にV字形に近い形状を呈し、検出部分の中位付近では北側のみ2段掘り状をなす。幅1.2～2.2m、深さ0.6～0.7m前後で、わずかに東にむかって傾斜する。埋土は5層に大別でき、暗褐色土～暗灰褐色土を基調としていた。遺物は埋土中より弥生土器、土師器片がビニー

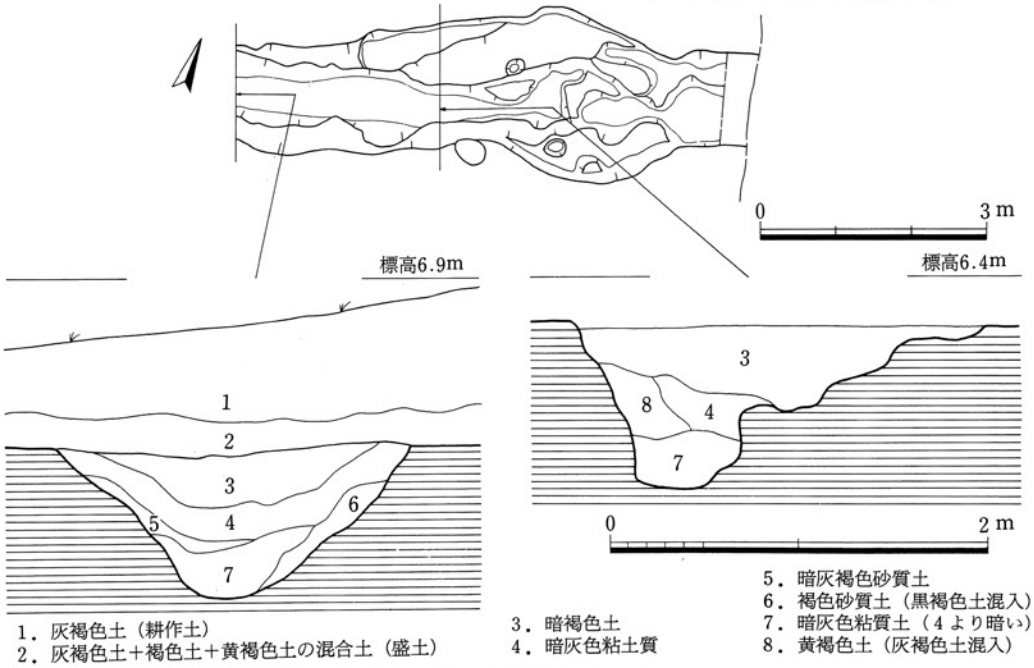


Fig. 7　SD102溝及び土層断面図（1/100・1/40）

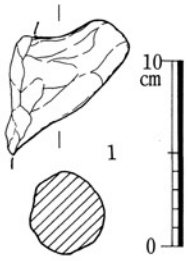


Fig.8　ＳＤ102

出土遺物実測図（1/4）

ル２袋程度出土した。

出土遺物（Fig. 8）

把手（１）　甑の把手か。ナデ調整で褐色を呈する。

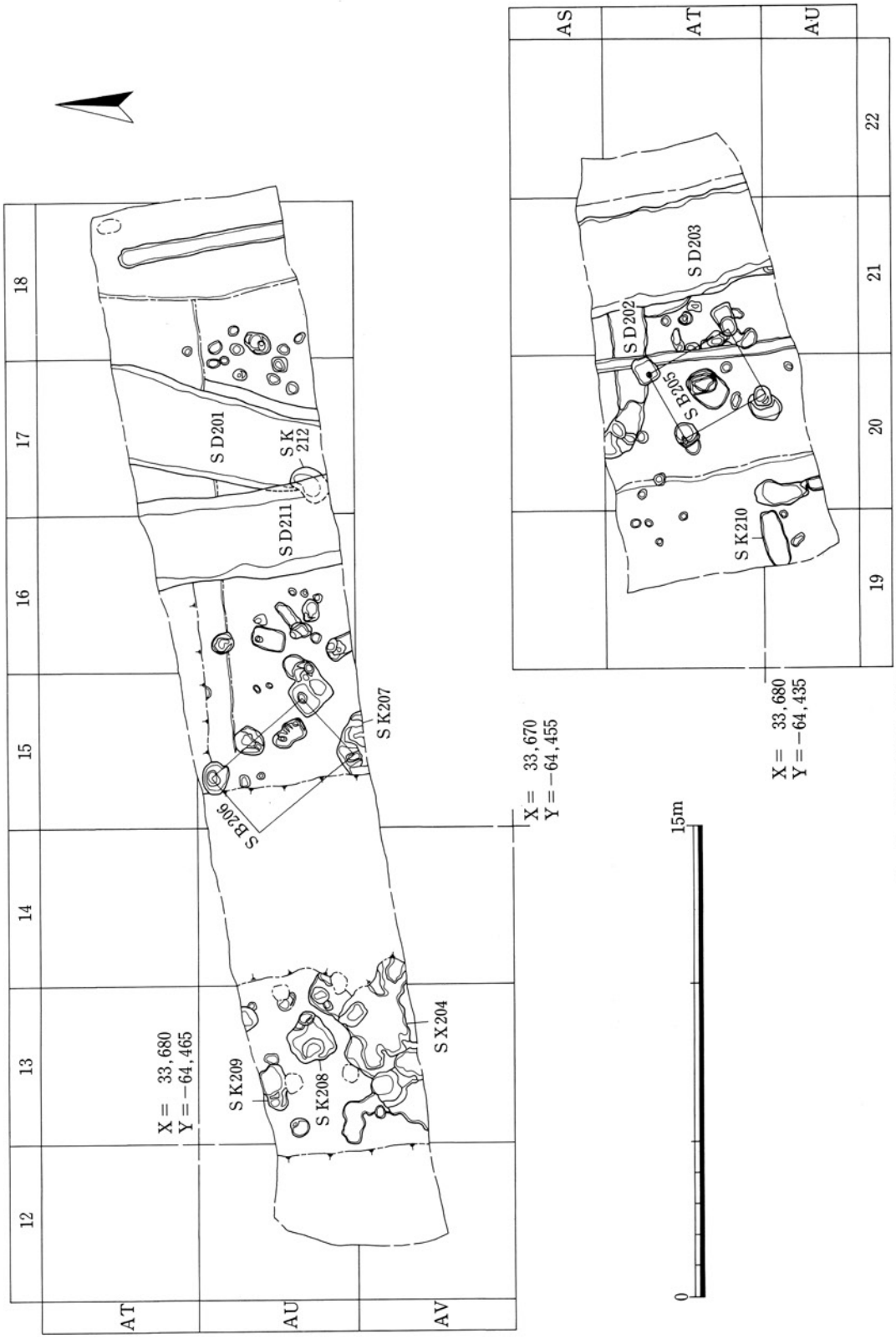


Fig. 9　千布二本黒木遺跡 2 区遺構配置図（1/200）

Ⅴ．調査の記録　－２区－

２区は水田下にあり、厚さ約20cmの現耕作土直下に淡黄褐色の基盤面を検出している。

弥生時代の遺構を中心に検出した。カクランが多く、湮滅した遺構も数多くあったものと思われる。検出した遺構は、弥生時代の掘立柱建物２棟、土壙５基、溝３条、不明遺構１基、近世の溝１条、その他小穴多数である。

１．弥生時代の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

１×１間の規模と思われる建物を２棟検出している。

ＳＢ205掘立柱建物（Fig.10）

ＡＴ・ＡＵ－20・21グリッドで検出した。検出面の標高は6.0m。ＳＤ202と重複関係にあり本建物が先行する。１×１間の建物で、桁行2.9m、梁行2.35mの規模を有する。桁行をＮ-29°-Wにとる。柱穴掘方はＰ２が長軸1.0m、短軸0.6mの隅丸長方形を呈する他は、一辺0.6～0.8

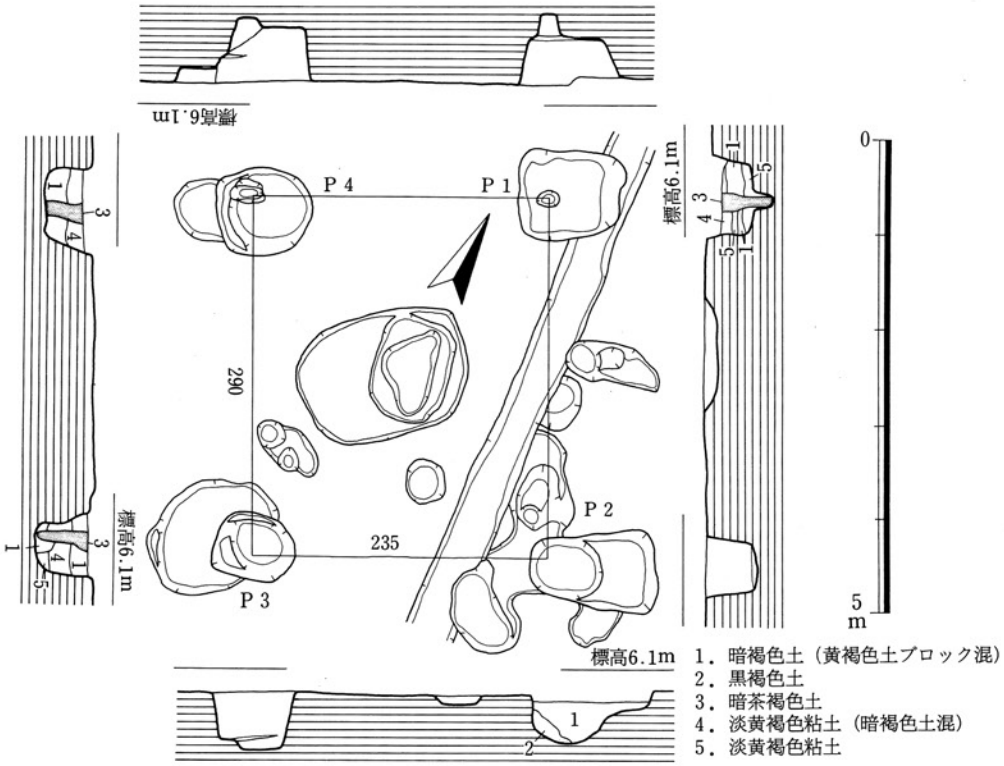


Fig.10　ＳＢ205掘立柱建物実測図（1/60）

mの隅丸方形に近い形状を呈する。深さは0.4～0.5m前後で、断面は２段掘り状を呈する。柱穴上面で柱痕跡が確認できなかったため、半載した結果、Ｐ１・３・４において径15cm程度の柱痕跡を検出することができた。柱穴埋土は暗褐色土と黄褐色土が互層をなす程度に突き固めていた。また、ＳＤ203はほぼ軸を一にするが、調査区が狭小であるため有機的な関連があるかどうかは不明。遺物はそれぞれの柱穴から弥生土器片が少量出土したが、図示できるものはなかった。

ＳＢ206掘立柱建物（Fig.11）

ＡＵ－15グリッドで検出した。検出面の標高は5.9～6.0m。柱穴の１つはカクランに削られているため検出できなかった。Ｐ３はＳＫ207と重複関係にあるがその先後関係は不明。１×１間の建物になる可能性が高く、その規模は桁行3.8m、梁行2.5m程度である。桁行をN-41°-Wにとる。柱穴掘方はＰ１が長軸0.7m、短軸0.55mの楕円形、Ｐ２は長軸0.85m、短軸0.75mの隅丸長方形で、２段掘り状を呈する。深さはいずれも0.3m前後である。柱穴埋土は地山ブロックを含む黒褐色土と暗褐色土を互層をなす程度に突き固めていた。またＰ１で土層断面により径15cm程の柱痕跡を検出している。遺物は柱穴埋土より少量の弥生土器片と石包丁１点が出土している。

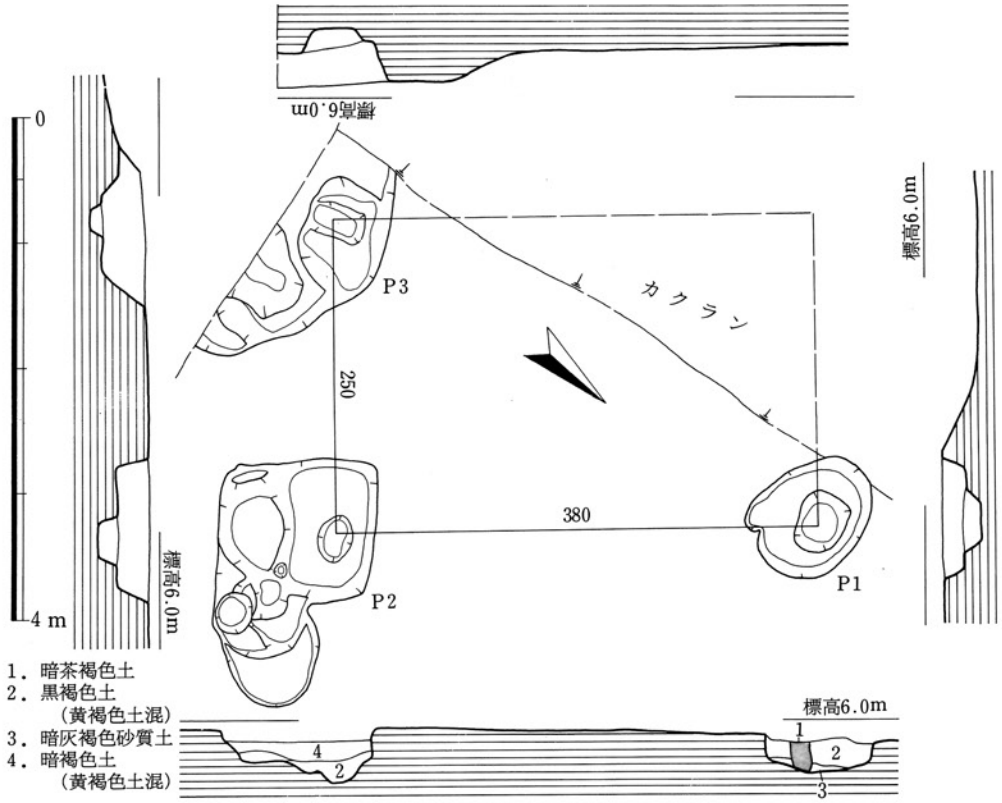


Fig.11　ＳＢ206掘立柱建物実測図（1/60）

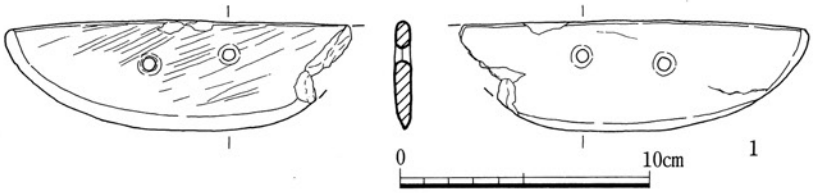


Fig.12　ＳＢ206出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.12）　Ｐ１出土。

石包丁（１）　端部を欠損するが、ほぼ完形に近い。残存長13.7㎝、最大幅4.3㎝。比較的丁寧に研磨する。穿孔は２箇所に認められ、両面から穿つ。粘板岩系と思われる。

(2) 土　　壙

５基検出している。ＳＫ212以外はいずれも埋土中より弥生土器片が出土しているが、図示できるものはなかった。ここでは検出状況の比較的良好な３基について報告する。

ＳＫ208土壙（Fig.13）

ＡＵ－13グリッドで検出した。検出面の標高は6.0m。遺構の東隅をＰ2002によって削られる他は、特に切り合い関係にある遺構はない。平面形は長軸1.4m、短軸1.3m程度のやや歪な隅丸方形を呈し、深さは最深で0.45m程度である。壁面はやや角度をもって立ち上がり、東壁の一部には底面より0.15mの位置にテラスを形成する。また底面には長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.1m程の窪みが存在する。埋土は黒褐色土の単層であった。遺物は埋土中より弥生土器片がビニール２袋程度出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＫ210土壙（Fig.13）

ＡＵ－19グリッドで検出した。上部をカクランによって削平されるため、他よりやや検出面の標高は低く、5.6m前後であった。遺構の西側の一部が現況水路のため検出できなかったが、ほぼ長軸を東西にとる隅丸長方形を呈するものと思われる。その規模は長軸1.75＋αm、短軸0.7m、深さは最深で0.5m程度である。埋土は地山ブロックを含む黒褐色土を基調とし、壁面は東壁がやや緩やかに立ち上がる他は、垂直に近く立ち上がる。底面は浅い船底状を呈する。遺物は埋土中より弥生土器片がわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＫ212土壙（Fig.13）

ＡＵ－17グリッドで検出した。検出面の標高は5.5～5.6m。ＳＤ201・211と重複関係にありいずれも本遺構が先行する。平面形は長軸1.27m、短軸8.5mの長楕円形を呈し、深さは最深で0.45m程度である。壁面はやや角度をもって立ち上がり、底面は浅いレンズ状を呈する。埋土

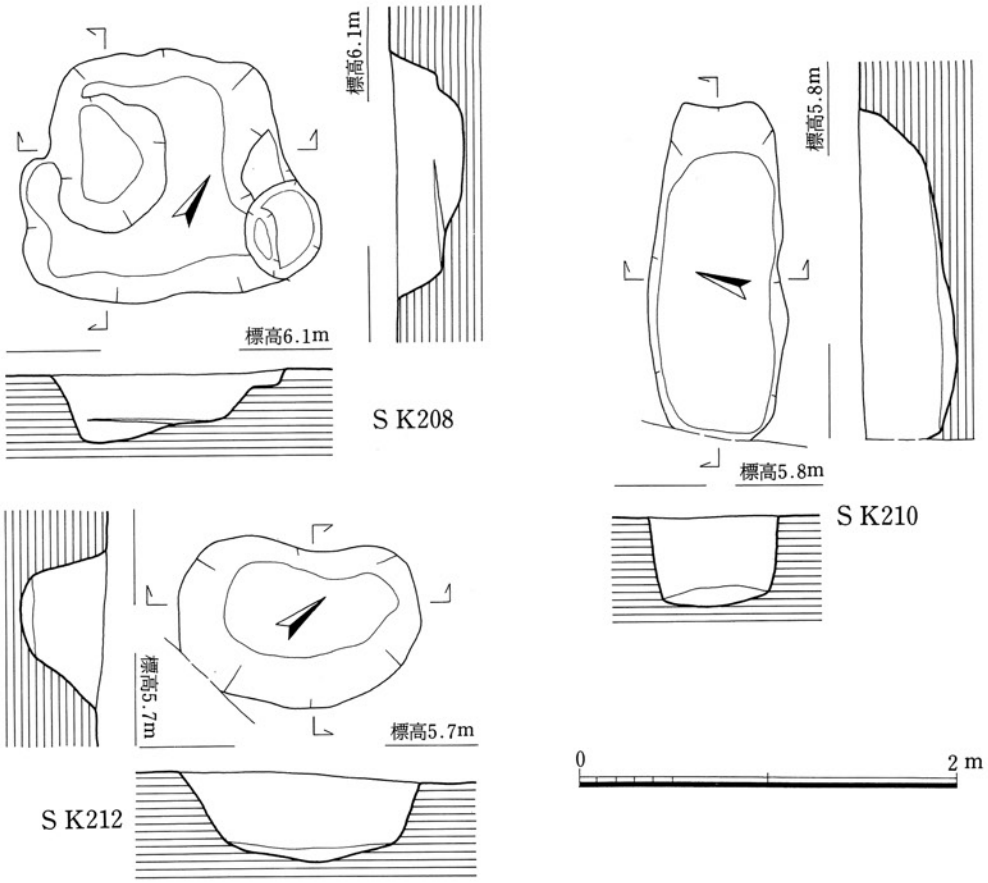


Fig.13　S K208・210・212土壙実測図（1/40）

は地山色に近い褐色を基調としていた。遺物は全く出土していない。4区で検出した縄文時代の可能性のある土壙と形状及び埋土の状態が類似しているため、本遺構も縄文時代早期まで遡る可能性がある。

(3) 溝

S D201溝（Fig.14）

AT・AU－17グリッドで検出した。検出面の標高は6.0m。S D211に切られ、S K212を切る。また北半は上面をカクランによって削平される。南北方向に検出し、その延長は調査区外にある。断面形は逆台形に近く、平均幅3.2m、深さ0.5m前後で、底面は細かい起伏があるものの概ね平坦である。その規模より集落を区画するような溝になる可能性が十分考えられる。埋土は6層に大別でき、いずれも自然堆積によるものと判断される。特に第1層の暗褐色土には多くの遺物が混入しており、埋没時に投棄されたものと考えられる。遺物は比較的多く、埋

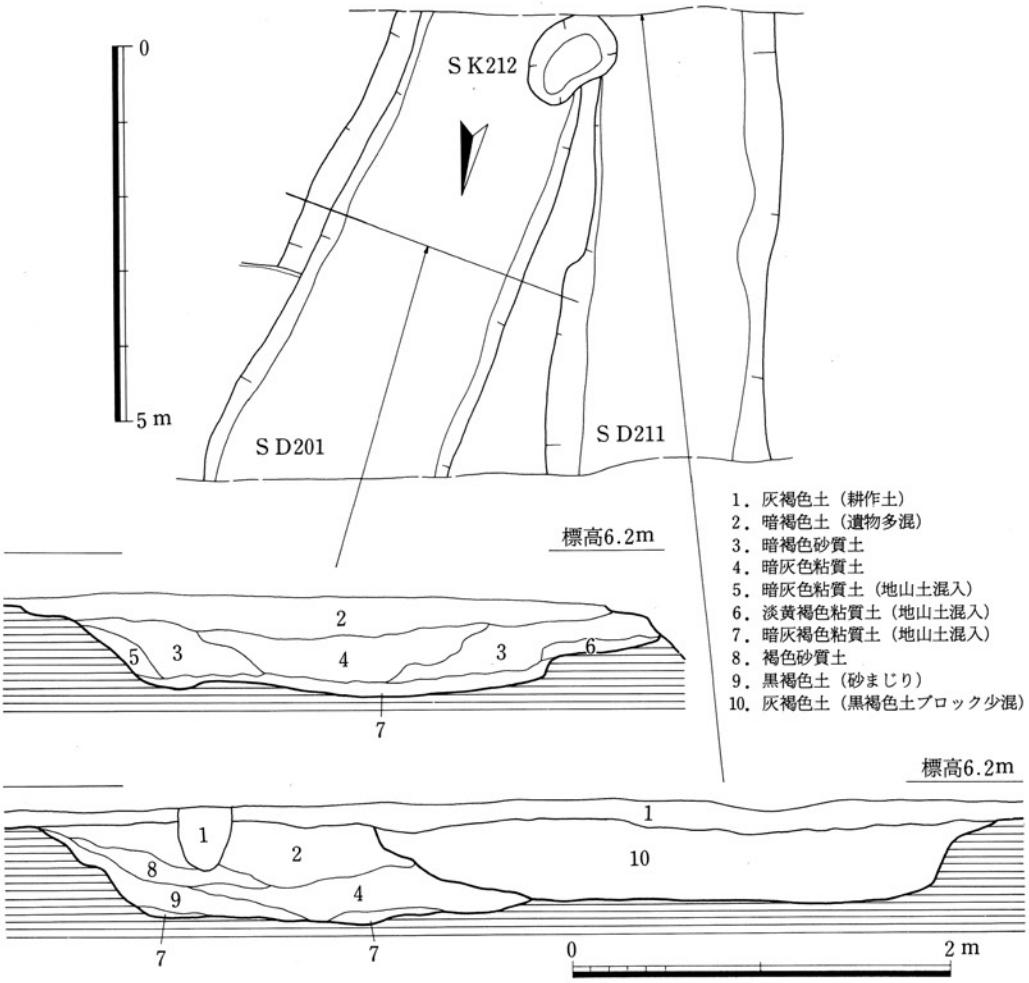


Fig.14　ＳＤ201溝及び土層断面実測図（1/100・1/40）

土中より弥生土器、石器等がコンテナ５箱程度出土している。またＳＤ211は断面逆台形を呈し、埋土は灰褐色土の単層であった。遺物は埋土中より陶磁器類細片がわずかに出土したのみであるが、埋土の状態及び遺物より近世の溝である可能性がある。

出土遺物（Fig.15～17）

甕（１～13）　１～６は口縁部破片。１は復元内口径23.4cm、同外口径28.6cm。２は復元内口径25.8cm、同外口径32.8cm。基本的に口縁部横ナデ、内面ナデ、外面は磨耗のため調整不明瞭。１は褐色、２は淡褐色を呈し、外面に黒斑が認められる。３～４は胴部上位に１条の突帯を巡らす。３は突帯に刻目を施すタイプで、復元内口径21.0cm、同外口径24.1cm。口縁部横ナデ、内面ナデ、外面は調整不明瞭。また内面には指頭圧痕が認められる。淡褐色を呈する。４は復元内口径20.0cm、同外口径25.6cm。口縁部横ナデ、外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整で、

褐色を呈する。5は復元内口径23.2cm、同外口径28.2cm。口縁部横ナデ、外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整で褐色を呈する。6は胴部上位に2条の突帯を巡らす。口縁部横ナデ、内面ナデ調整で、褐色を呈する。7～11は底部破片。7・8は外底面に葉脈痕が認められる。内外面ナデ調整。7は復元底径7.4cm、暗褐色。8は底径6.2cm、淡褐色。9は復元底径6.8cm。内外面ナデ調整で、褐色を呈する。10～13は、基本的に外面ハケ目、内面ナデ調整を行う。10は底径6.8cmで、褐色を呈する。11は底径6.2cmで、褐色を呈する。12は底径7.2cmで、褐色を呈する。13

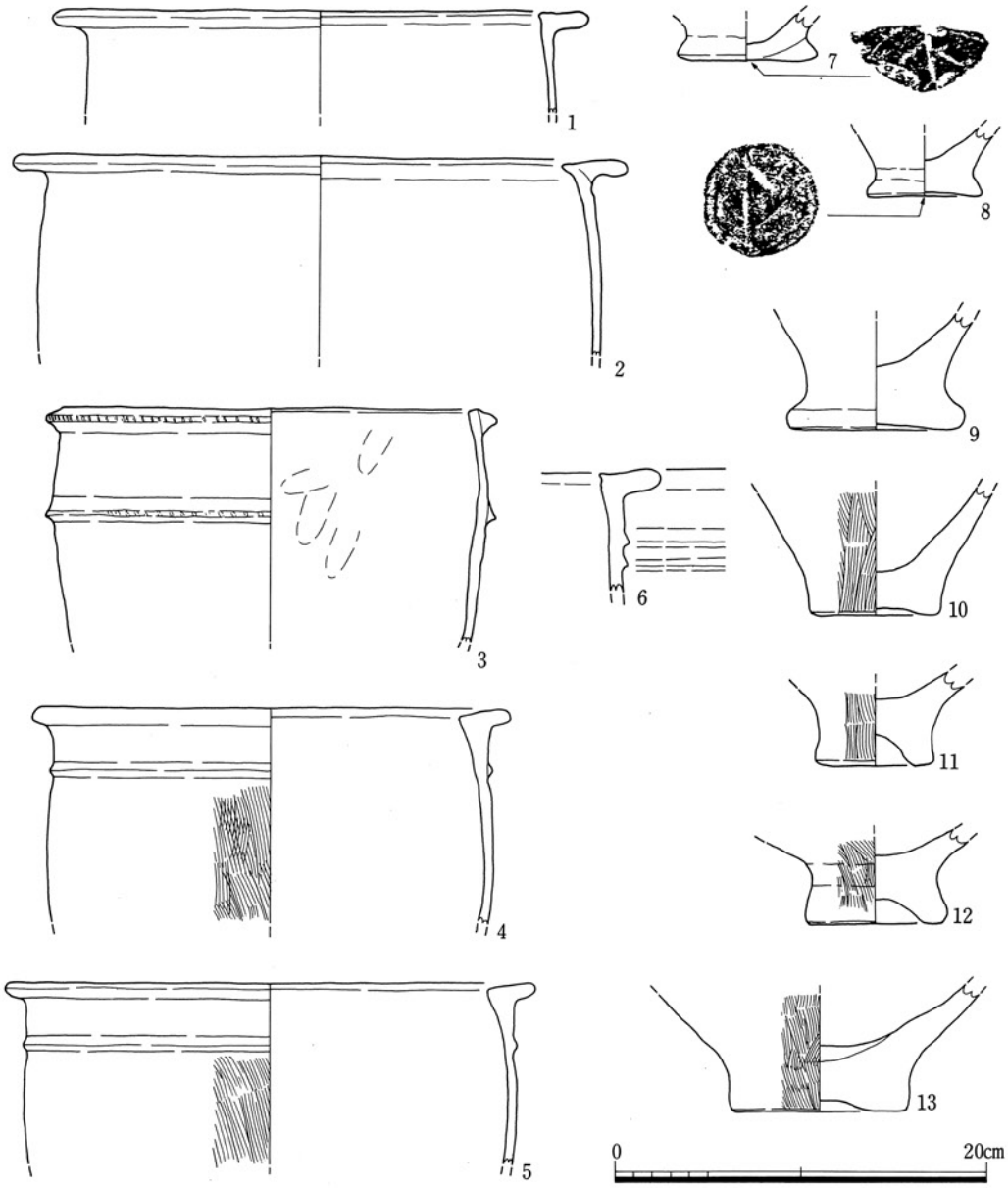


Fig.15　ＳＤ201出土遺物実測図①（1/4）

は復元底径9.4cmで、褐色を呈する。

壺（14～22）　14～18は口縁部破片。14は袋状口縁壺で、復元口径19.2cm。口縁部横ナデ、外面縦方向のハケ目、内面横方向のハケ目で、淡褐色を呈する。15は口縁端部に刻目を施す。復元内口径14.2cm、同外口径18.4cm。口縁部横ナデ、内面横方向のヘラミガキ、外面にはヘラ状工具による暗文を施す。褐色を呈する。16は復元口径16.8cm。内外面横方向のヘラミガキ調整で、暗褐色を呈する。17は復元口径17.2cm。内面横方向のヘラミガキ、外面は不明瞭だが、縦方向のヘラミガキ調整を行うようである。淡黒褐色を呈する。18は復元口径24.5cm。磨耗の

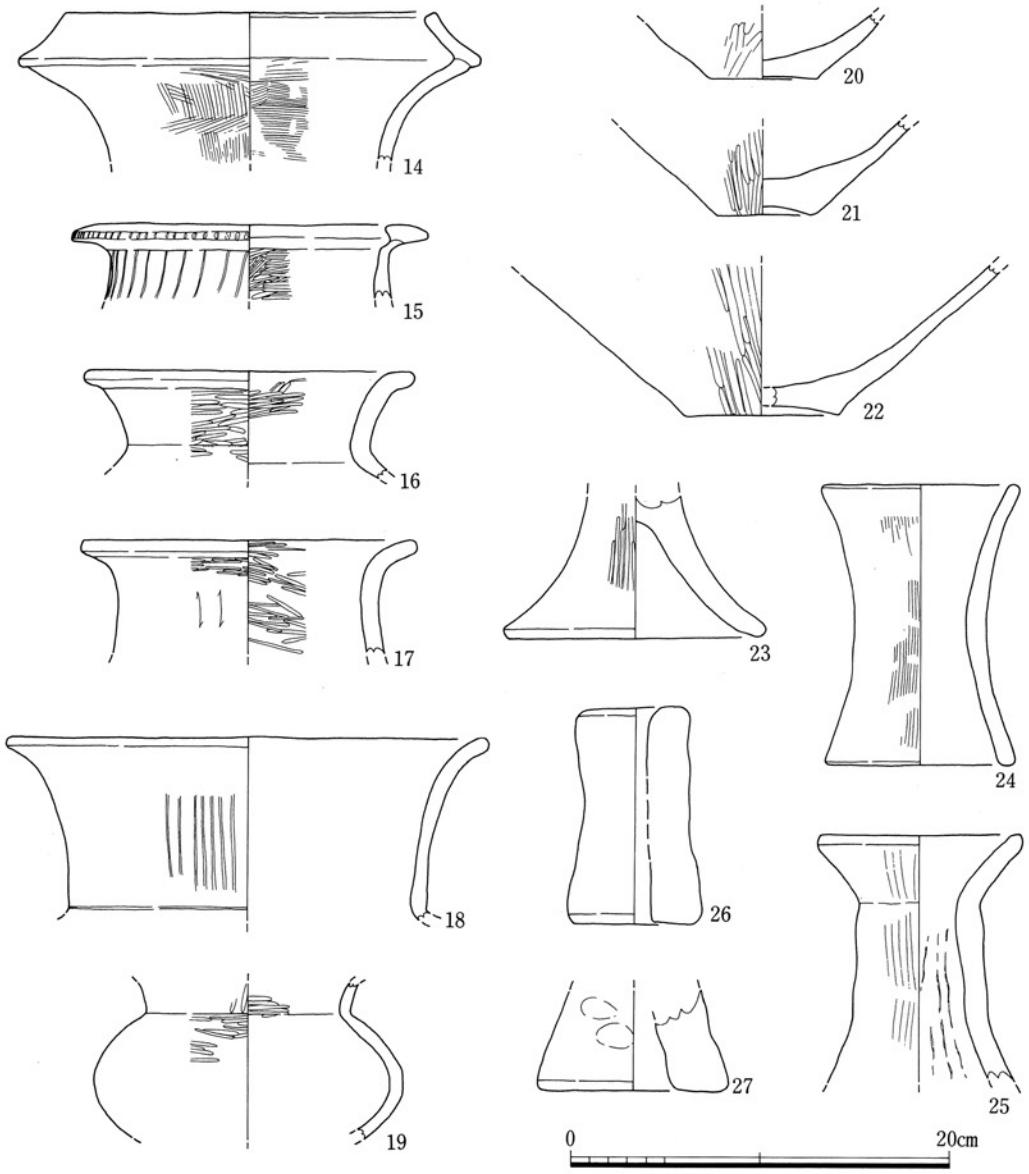


Fig.16　ＳＤ201出土遺物実測図②（1/4）

ため調整不明瞭だが、外面に施された暗文がかすかに認められる。赤褐色を呈する。19は胴部破片。胴部内面ナデ、他は横方向のヘラミガキ調整を行う。暗褐色を呈する。20～22は底部破片。内面ナデ、外面縦方向のヘラミガキ調整を基本とする。20は底径5.6cm、外面に煤が付着する。淡褐色。21は底径5.0cm、外面に黒斑が認められる。淡褐色。22は復元底径7.9cm、外面に黒斑が認められる。暗褐色。

高坏（23）　脚部破片で、脚部径13.0cm。外面縦方向のヘラミガキ、他は横ナデ調整を行う。淡褐色を呈する。

器台（24・25）　24は復元受部径10.0cm、復元裾部径9.6cm、器高14.7cm。外面縦方向のハケ目、内面ナデ、他は横ナデ調整で、淡黄褐色を呈する。25は復元受部径10.4cm。外面縦方向のハケ目、受部内面ナデ、体部内面には絞り痕が認められる。淡褐色を呈する。

支脚（26・27）　基本的に指ナデ調整を行う。26は完存品で、受部径4.7cm、裾部径6.2cm、

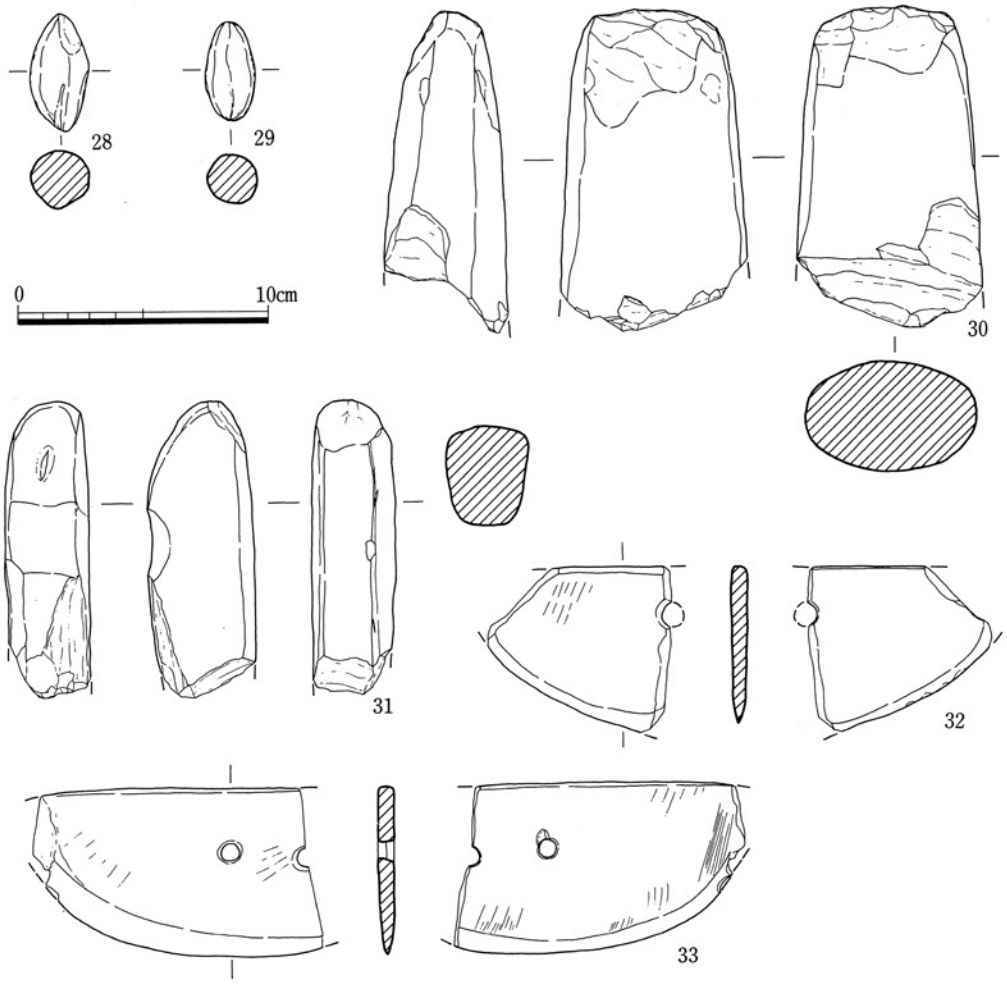


Fig.17　ＳＤ201出土遺物実測図③（1/3）

器高11.4cm。褐色を呈する。27は裾部破片で、裾部径9.4cm。褐色を呈する。

投弾（28・29）　両者とも完存品で、ナデ調整を行う。28は最大長4.6cm、最大径2.3cm。淡褐色。29は最大長3.9cm、最大径2.0cm。淡褐色。

石器（30～33）　30は石斧で、刃部を欠損する。残存長12.7cm、最大幅7.2cm。安山岩系か。31は方柱状片刃石斧で、刃部を欠損する。残存長10.6cm、最大幅4.2cm。よく研磨される。32・33は石包丁。32は残存長7.2cm、最大幅6.5cm。穿孔の１つが確認できる。33は残存長10.7cm、最大幅6.6cm。穿孔は１方向から行なわれ、２箇所で確認できる。刃はよく磨ぎ出される。両者とも比較的よく研磨される。安山岩系か。

ＳＤ203溝（Fig.18）

ＡＳ・ＡＴ－21・22グリッドで検出した。検出面の標高は6.0m。ＳＤ202と切り合い関係にあり、本溝が先行する。南北方向に検出し、その延長は調査区外にある。断面形は逆台形に近く、平均幅3.0m、深さ0.5m前後で、底面は細かい起伏があるものの概ね平坦である。その規模よりＳＤ201同様、集落を区画するような溝になる可能性が十分考えられる。埋土は４層に大別でき、自然堆積によるものと判断される。特に第２層の暗灰色粘質土には多くの遺物が混入しており、埋没時に投棄されたものと考えられる。遺物は比較的多く、埋土中より弥生土器、石器等がコンテナ４箱程度出土した。

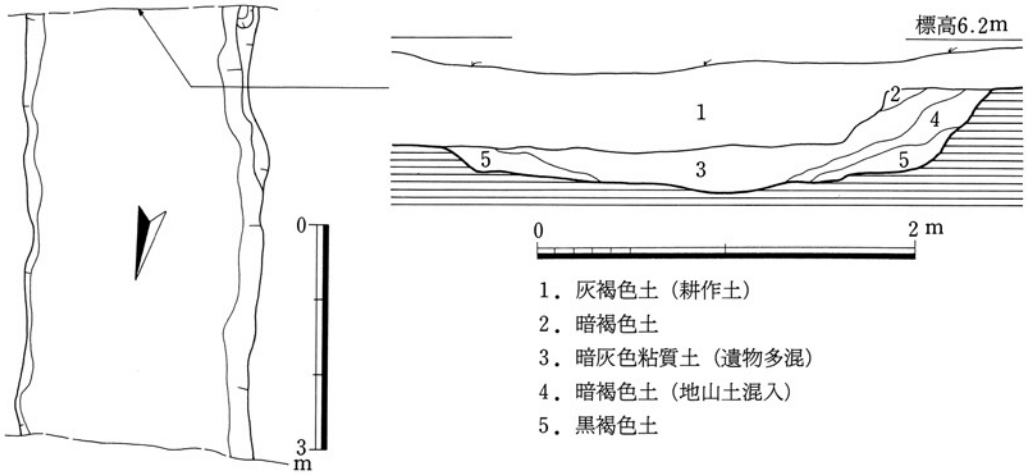


Fig.18　ＳＤ203溝及び土層断面実測図（1/100・1/40）

出土遺物（Fig.19～21）

蓋（１～５）　基本的に内面ナデ、外面は磨耗のため調整不明瞭。１は頭部径5.0cm、淡黄褐色。２は頭部径5.0cm、黄褐色。外面に黒斑が認められる。３は頭部径5.7cm、褐色。つまみ外面に黒斑が認められる。４は頭部径5.5cm、淡黄褐色。外面にハケ目がかすかに認められる。５

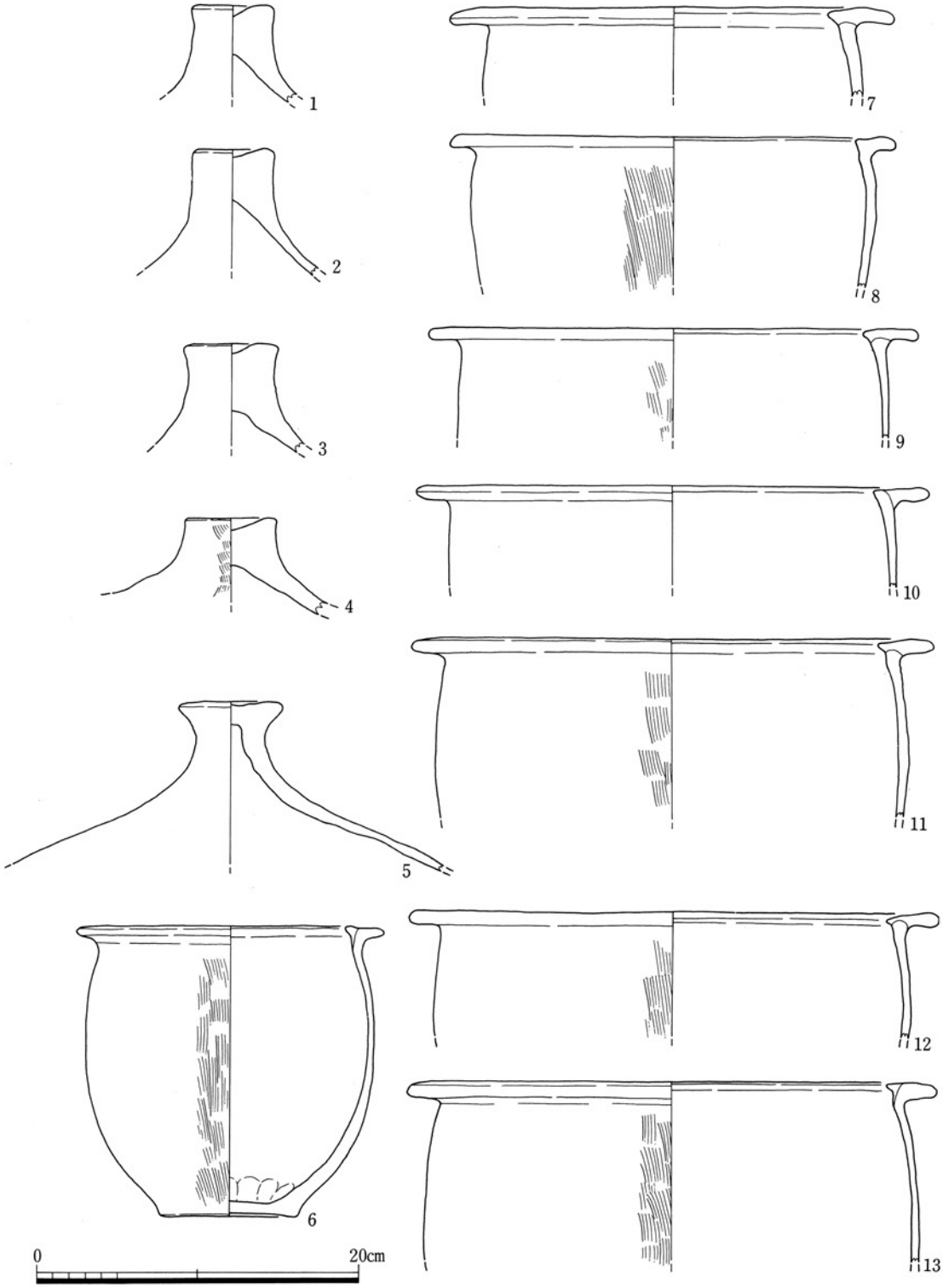


Fig.19　ＳＤ203出土遺物実測図①（1/4）

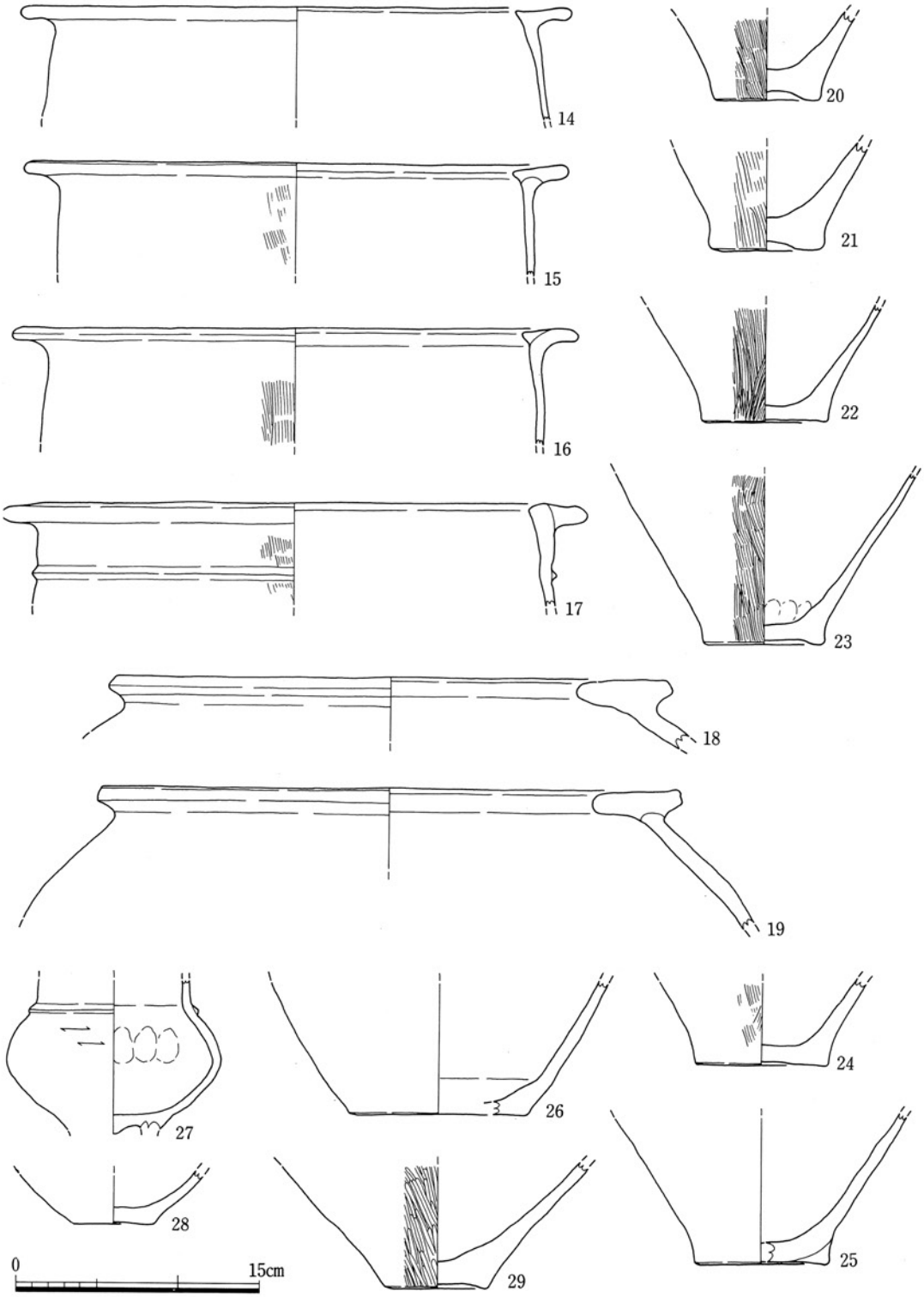


Fig.20　ＳＤ203出土遺物実測図②（1/4）

は頭部径6.3cm、褐色。

甕（6～26）　6は内口径14.2cm、外口径18.2cm。口縁部横ナデ、外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整で、内底付近には指頭圧痕が残る。また胴部外面上位には黒斑が認められる。褐色。7～19は口縁部破片。13～17は、基本的に口縁部横ナデ、外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整を行う。7は復元内口径19.0cm、同外口径27.2cm。褐色。8は復元内口径22.3cm、同外口径27.4cm。褐色。9は復元内口径23.1cm、同外口径30.0cm。褐色。10は復元内口径24.6cm、同外口径31.4cm。褐色。11は復元内口径25.2cm、同外口径32.0cm。淡黄褐色。12は復元内口径26.1cm、同外口径32.4cm。褐色。13は復元内口径26.2cm、同外口径32.4cm。淡褐色。14は復元内口径26.5cm、同外口径33.6cm。褐色。15は復元内口径26.4cm、同外口径33.2cm。淡褐色。16は内口径27.6cm、外口径34.4cm。淡褐色。17は胴部上位に1条の突帯を巡らす。復元内口径28.4cm、同外口径35.6cm。褐色。18・19は口縁部横ナデ、他はナデ調整を行う。18は復元内口径22.5cm、同外口径34.3cm。淡褐色。19は復元内口径25.0cm、同外口径35.8cm。褐色。20～26は底部破片。基本的に外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整を行う。20は底径6.5cm。外面褐色、内面淡黒褐色。21は底径6.8cm。外面淡黄褐色、内面褐色。22は底径7.7cm。暗褐色。23は底径7.7cm。内底付近に指頭圧痕を残す。外面暗褐色、内面淡黒褐色。24は底径8.2cm。褐色。25は復元底径8.2cm。褐色。26は復元底径11.0cm。淡褐色。

壺（27～29）　27は胴部破片。頸部に1条の突帯を巡らす。全体的に不明瞭だが、外面ヘラミガキ、内面ナデ調整を行う。また内面には指頭圧痕が残る。内外面に丹塗りの痕跡が認められる。淡黄褐色。28・29は底部破片。28は底径5.1cm。内外面ナデ調整で、褐色を呈する。外底面に黒斑が認められる。29は底径6.3cm。外面縦方向のヘラミガキ、内面ナデ調整で、褐色を呈する。外底付近に黒斑が認められる。

高坏（30）　脚部破片で、残存器高14.0cm全体に調整不明瞭で、内面には絞り痕が認められる。淡赤褐色を呈する。

器台（31～33）　基本的に外面縦方向のハケ目、内面ナデ、端部は横ナデ調整を行う。31は受部径9.3cm、残存器高13.0cm。淡

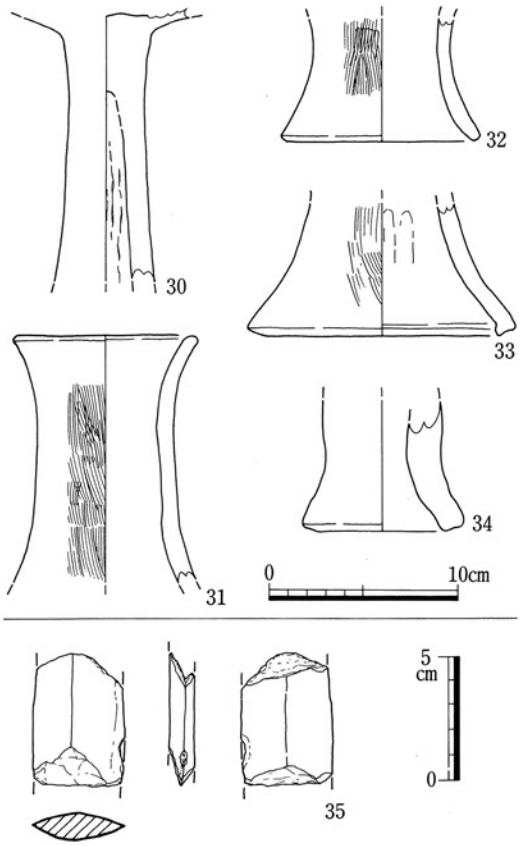


Fig.21　SD203出土遺物実測図③（1/4・1/3）

黄褐色。32は裾部破片で、復元裾部径10.4cm。淡黄褐色。33は裾部破片で、復元裾部径12.2cm。淡黄褐色。

支脚（34）　復元裾部径6.6cm。内外面指ナデ調整で、淡黄褐色を呈する。

石剣（35）　磨製石剣で、残存長5.3cm、最大幅3.7cm。全体によく研磨され、淡青灰色を呈する。

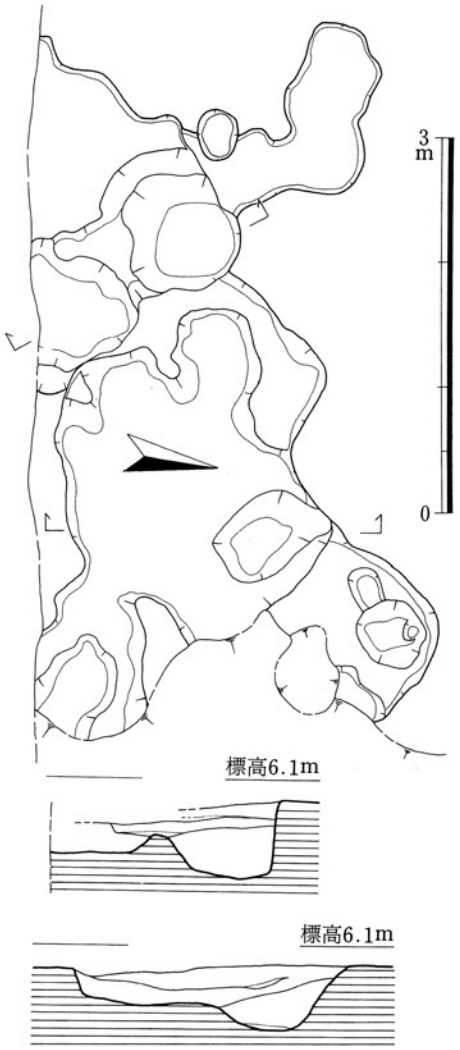


Fig.22　ＳＸ204不明遺構実測図（1/60）

(4) 不明遺構

ＳＸ204不明遺構（Fig.22）

ＡＵ・ＡＶ－13・14グリッドで検出した。検出面の標高は5.9m。遺構の東部はカクランに削られ、南部は調査区外にある。平面形は不定形で、底面は起伏が多い。検出できた部分で最大幅3.1m、最大深0.6mを測る。埋土は黒褐色土を基調としていた。遺物は比較的多く、埋土中より弥生土器、石器等がコンテナ２箱程度出土した。

出土遺物（Fig.23～26）

蓋（１）　頭部径6.2cmで、外面ハケ目、内面工具によるナデ調整を行う。つまみ部外面には黒斑が認められる。淡褐色を呈する。

甕（２～16）　２～10は口縁部破片。基本的に口縁部横ナデ、外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整を行う。２は復元口径24.3cm。内面には部分的に指頭圧痕を残す。褐色。３は復元口径24.3cm。明褐色。４は復元口径25.9cm。外面には煤が付着する。褐色。５は復元口径28.4cm。淡赤褐色。６は胴部上位に１条の突帯を巡らす。復元口径28.0cm。外面明褐色、内面暗褐色。７は口縁端部に刻目を施す。復元口径21.1cm。明褐色。８は復元内口径23.8cm、同外口径32.0cm。褐色。９は復元内口径19.8cm、同外口径31.2cm。淡褐色。10は胴部上位に２条の突帯を巡らす。復元内口径22.4cm、同外口径35.0cm。淡褐色。

11は胴部破片で、外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整を行う。外面褐色、内面淡黒褐色を呈する。12～16は底部破片。12は底径6.5cm。内外面ナデ調整で、内底付近に指頭圧痕を残す。淡褐色。13～16は基本的に外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整を行う。13は底径5.8cmで、外面に黒斑が認められる淡褐色。14は底径6.5cmで、内面に煤が付着する。明褐色。15は底径5.9cm。淡赤褐色。16は復元底径7.8cm。外面淡褐色、内面暗褐色。

壺（17～24）　17は口縁から胴部にかけての破片。復元口径13.6cm。口縁部内面は横方向のヘラミガキ調整、他は磨耗のため調整不明瞭。明褐色。18～22は口縁部破片。18は口径18.4cm。内面横方向のヘラミガキ、外面は横ナデ後に暗文を施す。赤褐色。19は復元口径18.8cm。内面横方向のヘラミガキ、外面は縦方向の暗文を施す。褐色。20は頸部に１条の突帯を巡らす。復元口径21.8cmで、内外面横ナデ調整を行う。淡褐色。21は口縁端部に刻目を施す。復元口径23.1cmで、内外面横ナデ調整を行う。褐色。22は口縁端部に刻目を施し、頸部に１条の突帯を巡らす。復元口径24.0cm。外面に暗文がかすかに認められる他は、不明瞭。外面茶褐色、内面黒褐色。23は胴部破片。胴部中位に１条の突帯を巡らす。磨耗のため調整不明瞭。淡褐色。24は底部破片。底径5.0cm、外面縦方向のヘラミガキ、内

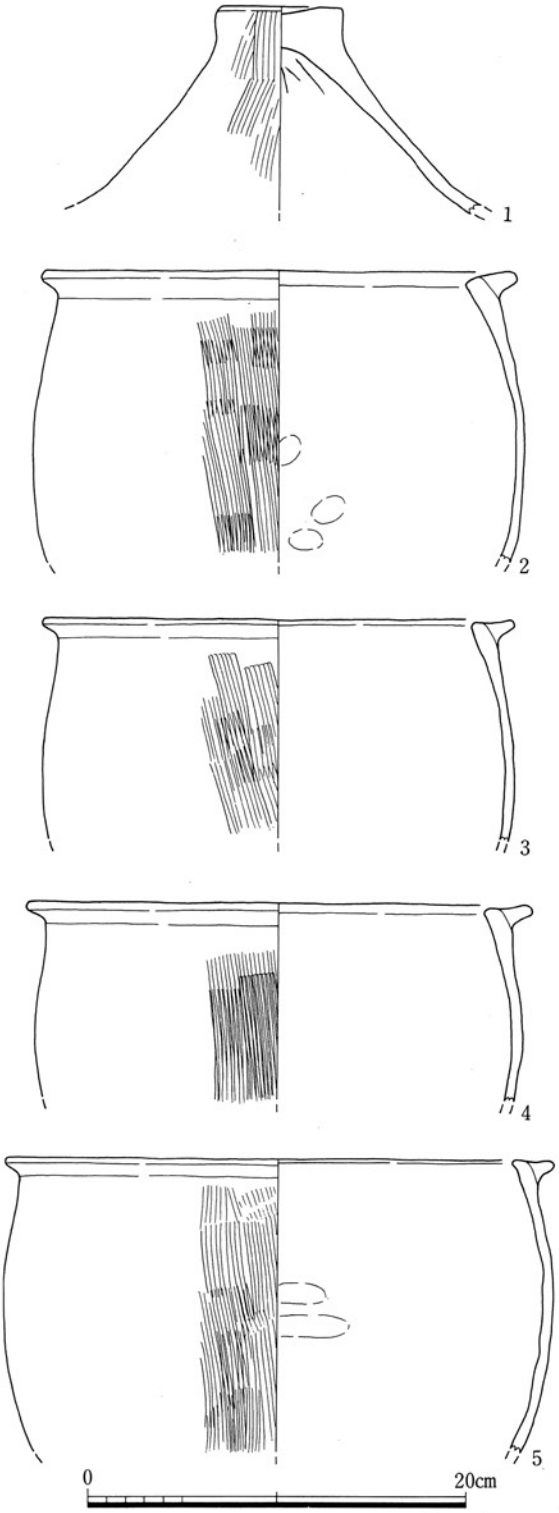


Fig.23　ＳＸ204出土遺物実測図①（1/4）

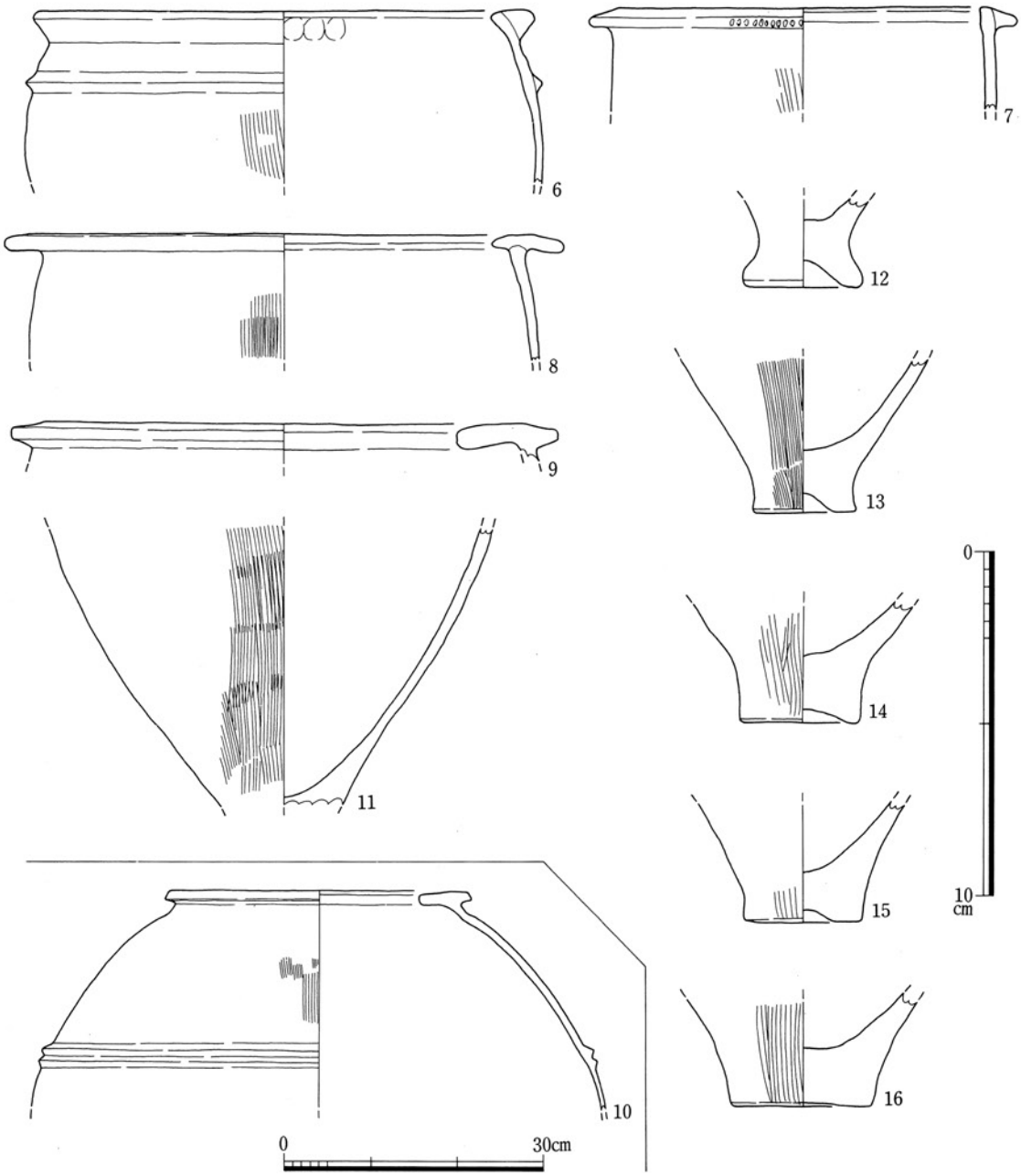


Fig.24　ＳＸ204出土遺物実測図②（1/4・1/8）

面ナデ調整を行う。外面に黒斑が認められる。淡褐色。

鉢（25～27）　25はほぼ完形で、口径11.3cm、底径4.2cm、器高5.2cm。内面ヘラミガキ調整の他は、磨耗のため調整不明瞭。赤褐色を呈する。26は復元口径31.2cm。胴部上位に１条の突帯を巡らす。口縁部横ナデ、他はナデ調整。外面暗褐色、内面淡褐色を呈する。27は口縁端部

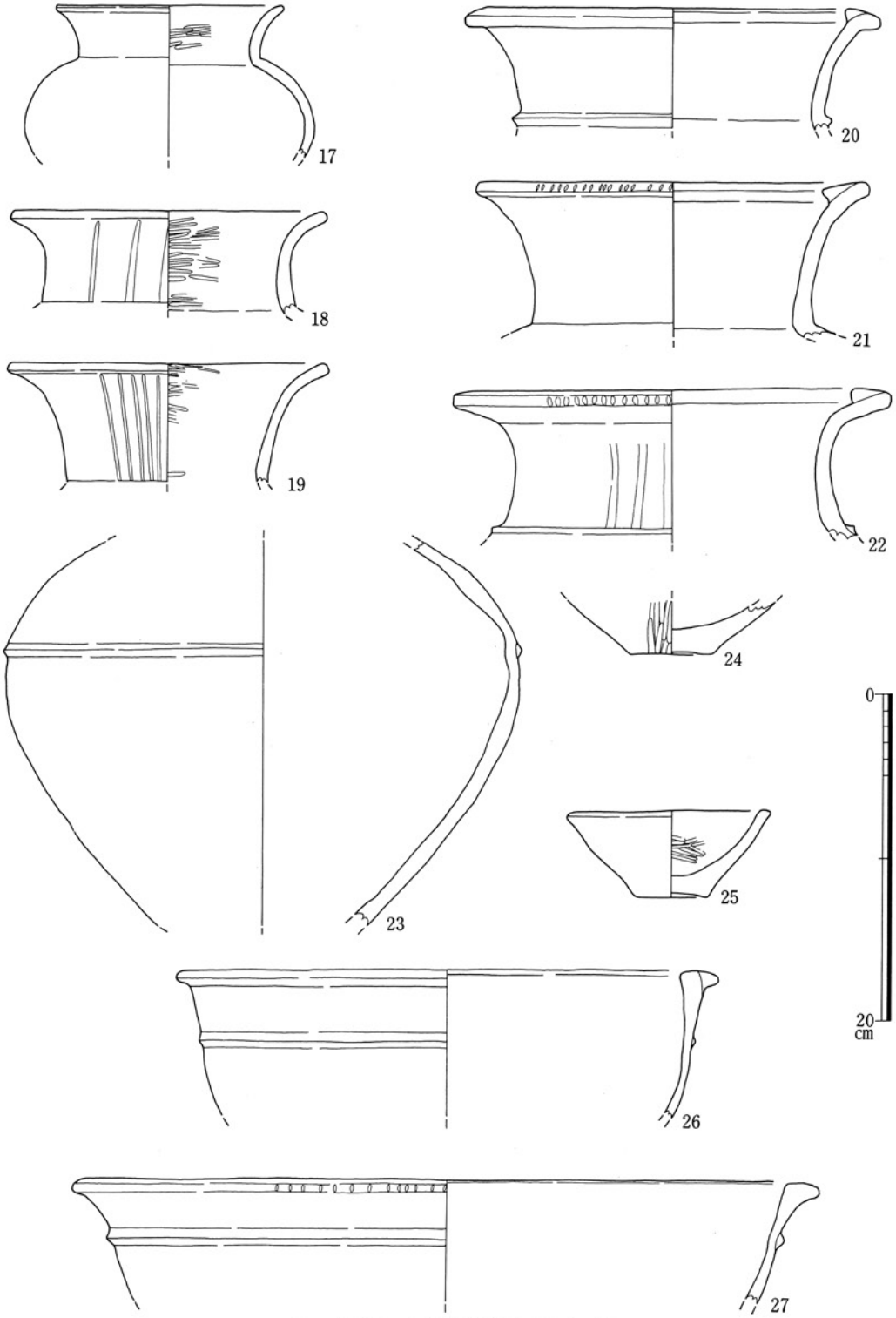


Fig.25　ＳＸ204出土遺物実測図③（1/4）

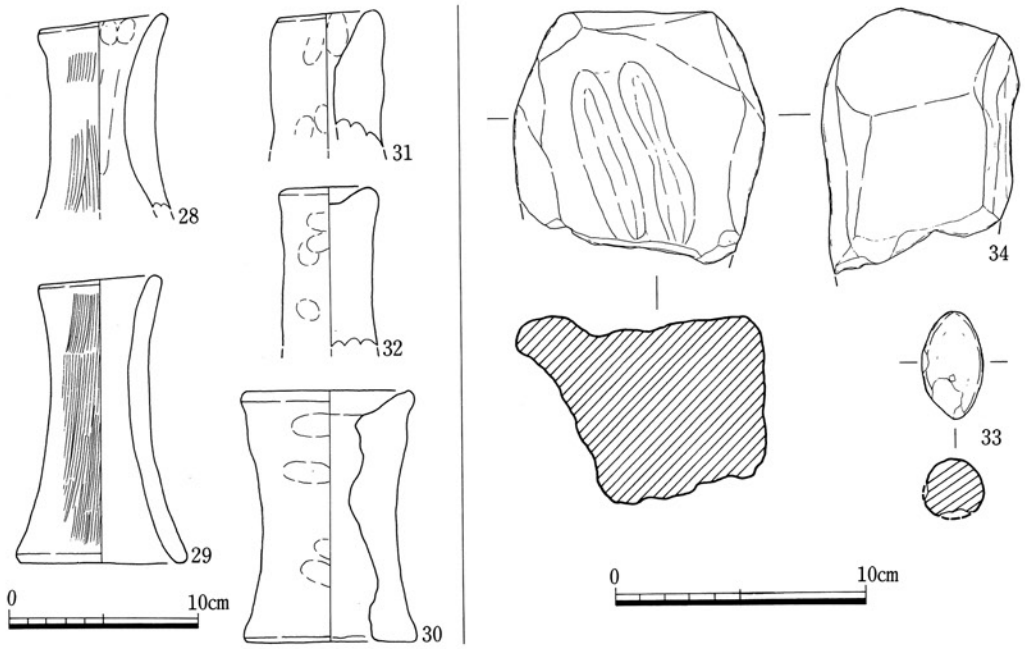


Fig.26　ＳＸ204出土遺物実測図④（1/4・1/3）

に刻目を施し、胴部上位には１条の突帯を巡らす。口縁部横ナデ、他はナデ調整で、淡褐色を呈する。

器台（28～30）　28・29は外面縦方向のハケ目、内面ナデ、端部横ナデ調整を行う。28は受部径6.4cm。明褐色。29は受部径5.8cm、裾部径8.4cm。赤褐色。30は復元受部径8.4cm、同裾部径8.7cm。内外面指ナデ調整で、淡褐色を呈する。

支脚（31･32）　両者とも基本的に指ナデ調整を行う。31は受部径5.0cm。明褐色。32は受部径4.2cm。明褐色。

投弾（33）　ほぼ完存で、最大長4.2cm、最大径2.4cm。指ナデ調整で、黒褐色を呈する。

砥石（34）　残存長9.9cm、最大幅9.7cm。４面を使用し、そのうち１面に研ぎ痕を残す。砂岩系。

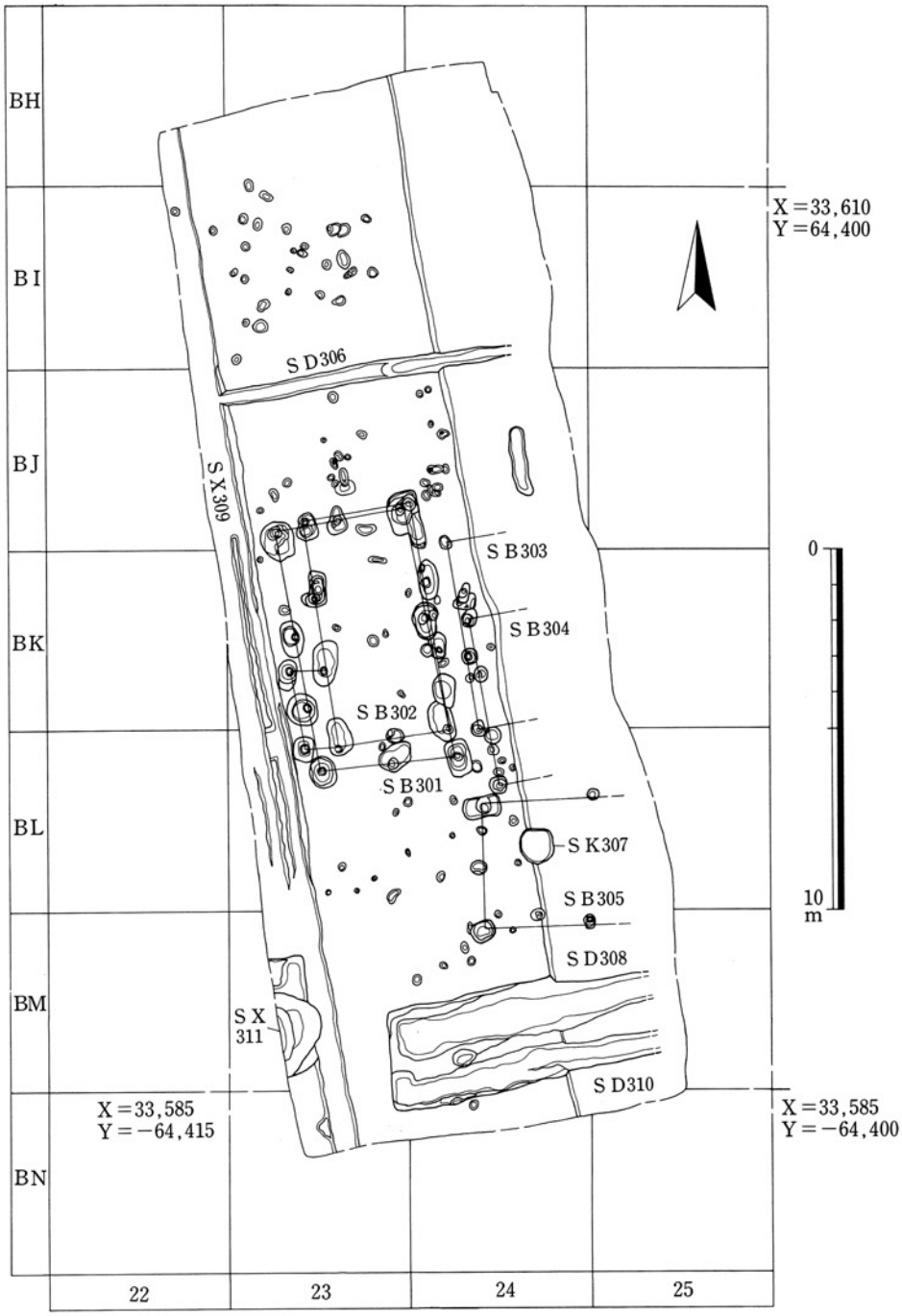


Fig.27　千布二本黒木遺跡3区遺構配置図（1/200）

Ⅵ. 調 査 の 記 録 －3区－

3区は高畑部分にあたり、基本層序はFig.28に示したとおりである。1層は厚さ約30cmの現耕作土で、その下に灰褐色土の旧耕作土（時期不明。少なくとも近世以降。5～7層が堆積する溝状のものが伴うか。）が存在する。さらにその下に褐色土がある。これはＳＸ309とほぼ同時 期の近世期の生活面（耕作土）と考えられる。基盤面は3層直下に存在しており、それは淡黄褐色の砂質土であった。

検出した遺構は中世～近世にかけての掘立柱建物5棟、土壙1基、溝3条、不明遺構2基で、この他小穴多数であった。

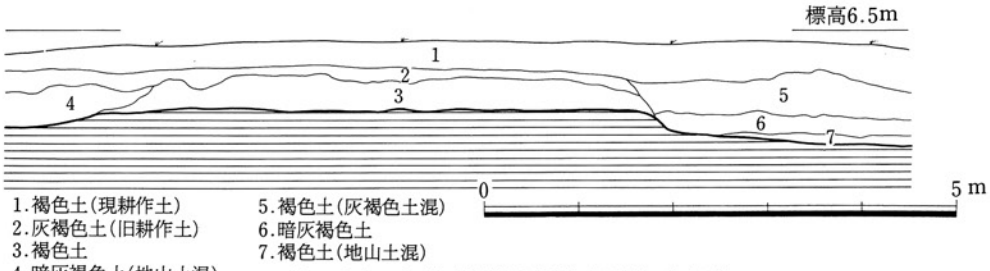


Fig.28　千布二本黒木遺跡3区基本層序（1/80）

1．中世以降の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

ＳＤ306とＳＤ308・310に挟まれた部分に5棟検出した。ＳＢ301・302以外は建物の一部を検出したのみである。また建物の梁行に平行して走るＳＤ306とＳＤ308・309が、建物群を区画する溝になる可能性は高い。

ＳＢ301掘立柱建物（Fig.29）

ＢＪ～ＢＬ－23・24グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。ＳＢ302と切り合い関係にあり、本建物が後出する。位置的にＳＢ302が立て替えられたものと考えられる。3×2間の南北棟の建物で、桁行6.8～7.0m、梁行3.6～3.8m、床面積25.5m²の規模を有する。桁行をN-12°-Wにとる。柱間は図示したとおり。Ｐ1－Ｐ2及びＰ8－Ｐ9の柱間を他よりも長くとる。柱穴掘方は円形～楕円形もしくは隅丸長方形を呈し、その規模は長軸0.7～1.1m、深さ0.5～0.7m程度で、ほとんどが2段掘り状を呈する。柱穴の長軸はＰ5が梁行方向に平行である他はすべて桁行方向に平行である。柱穴埋土は暗灰褐色土と淡黄褐色土を互層になる程度に突き固めている。またＰ2～6・8で径15～20cm程度の柱痕跡を検出している。遺物は柱穴埋土より陶

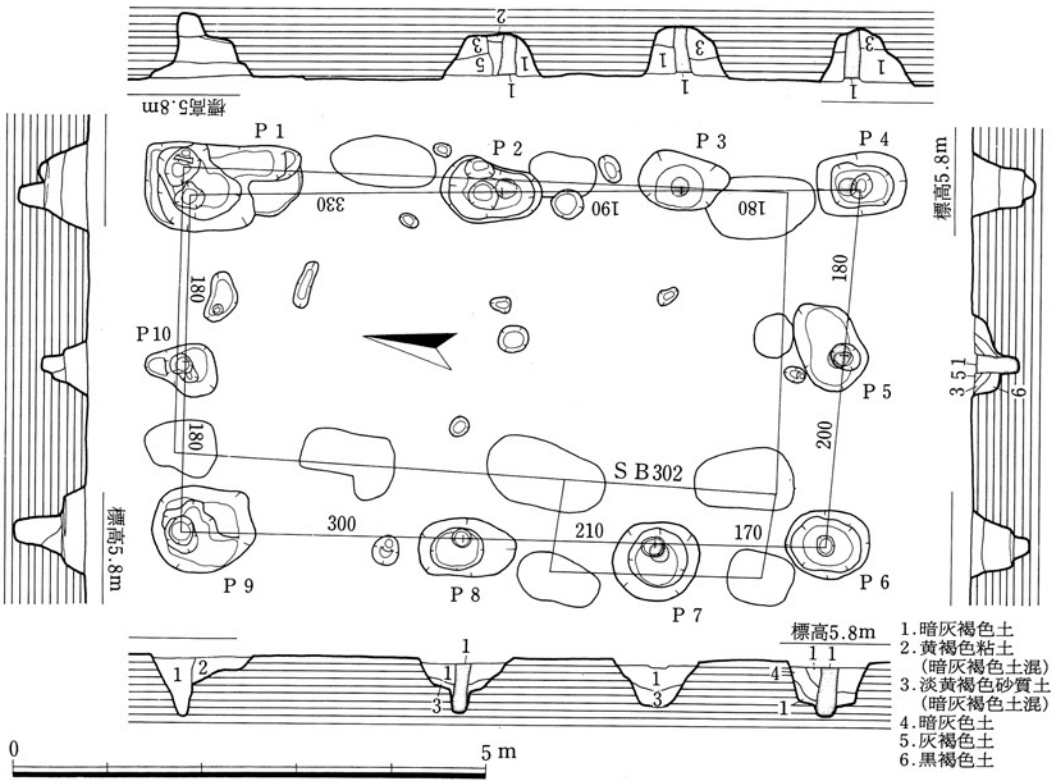


Fig.29　ＳＢ301掘立柱建物実測図（1/80）

器・瓦器・土師器類がビニール３袋程度出土した。なおＰ１はＳＢ302のＰ１と重複関係にあるが、明確にその切り合いが確認できなかったため、遺物を分割することができなかった。

出土遺物（Fig.30）　２・５はＰ１、４はＰ２、３はＰ３、６・７はＰ４、１・７はＰ７出土。

土師器（１～３）　１・２は坏。１は復元底径4.4cm。内外面横ナデ調整で、淡黄褐色を呈する。２は底部糸切りで、復元口径9.0cm、底径5.7cm、器高2.9cm。内外面横ナデ調整で、淡褐色を呈する。３は鍋の口縁部破片。磨耗のため調整不明瞭で、褐色を呈する。

瓦器（４）　擂鉢の底部破片。復元底径16.4cm。外面ナデ、内面横方向のハケ目調整。やや幅広い擂目を有し、外面には煤が付着する。淡灰色を呈する。

陶器（５・６）　いずれも肥前陶器（唐津焼）。５は花縁皿で、口径12.3cm、高台径4.1cm、器高3.9cm。淡青灰色の釉を施し、それは高台部内面にまで及ぶ。また見込みには砂目が３箇所認められる。６は碗で、淡緑白色の釉を施す。復元口径8.6cm。

石器（７・８）　いずれも流れ込みと思われる。７は石斧で、体部上半を欠損する。残存長7.8cm、最大幅5.9cm。８は黒曜石製の石鏃。完存品で、最大長1.9cm、最大幅1.4cm。

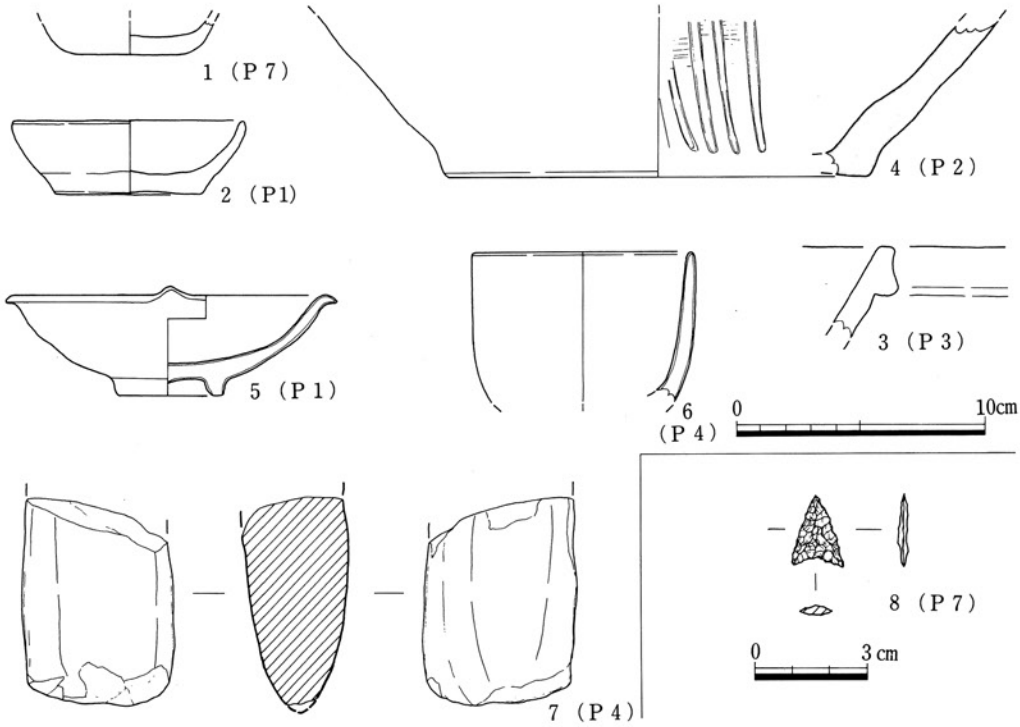


Fig.30　ＳＢ301出土遺物実測図（1/3・1/2）

ＳＢ302掘立柱建物（Fig.31）

ＢＪ～ＢＬ－23・24グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。ＳＢ301と切り合い関係にあり本遺構が先行する。３×２間の南北棟の建物で、桁行6.3m、梁行3.0～3.2m、床面積19.5㎡の規模を有する。桁行をN－９°-Wにとる。柱間は図示したとおり。Ｐ６・７の西側に並んだ柱穴を２個検出しているが、これは入り口部分を意識した廂になるのか。柱穴掘方は隅丸長方形もしくは楕円形を呈し、その規模は0.7～1.6m、深さ0.2～0.7m程度で、ほとんどが２段掘り状を呈する。また桁行方向にその長軸をとる。柱穴埋土は暗灰褐色土と灰褐色土を互層になる程度に突き固めている。Ｐ５以外の柱穴で径15cm程の柱痕跡を検出し、さらにＰ６ではわずかではあるが柱痕が残存していた。遺物は土師器類が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＢ303掘立柱建物（Fig.32）

ＢＫ・ＢＬ－24グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。ＳＢ304と重複するが、その先後関係は不明。遺構の大部分はカクランに削られているため柱穴を４個しか確認できておらず、その全貌は知り得ない。南北軸をN-10°-Wにとり、その長さは4.7m程度である。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形～楕円形を呈し、その規模は長軸0.4～0.5m、深さ0.4～0.5m程

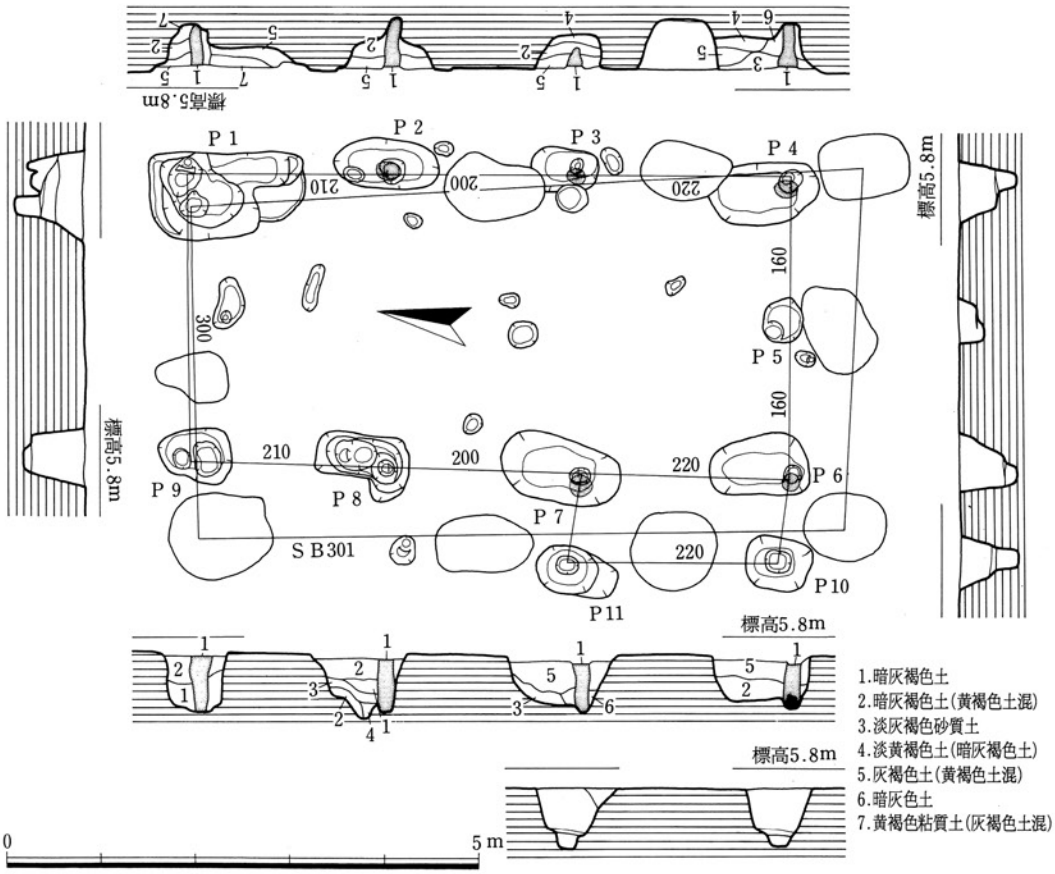


Fig.31　ＳＢ302掘立柱建物実測図（1/80）

度である。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調とし、Ｐ１・３・４では遺構上面において径15cm程の柱痕跡を検出している。遺物はＰ２の埋土中より土師器片がわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＢ304掘立柱建物（Fig.32）

ＢＪ～ＢＬ－24グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。ＳＢ303と重複するが、その先後関係は不明。ＳＢ303同様、遺構の大部分をカクランによって削られているため柱穴を４個しか確認できていない。したがって建物の全貌は知り得ない。南北軸をN－9°-Wにとり、その長さは5.4m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調とし、Ｐ３・４では遺構上面において径18cm程度の柱痕跡を検出している。遺物は全く出土していない。

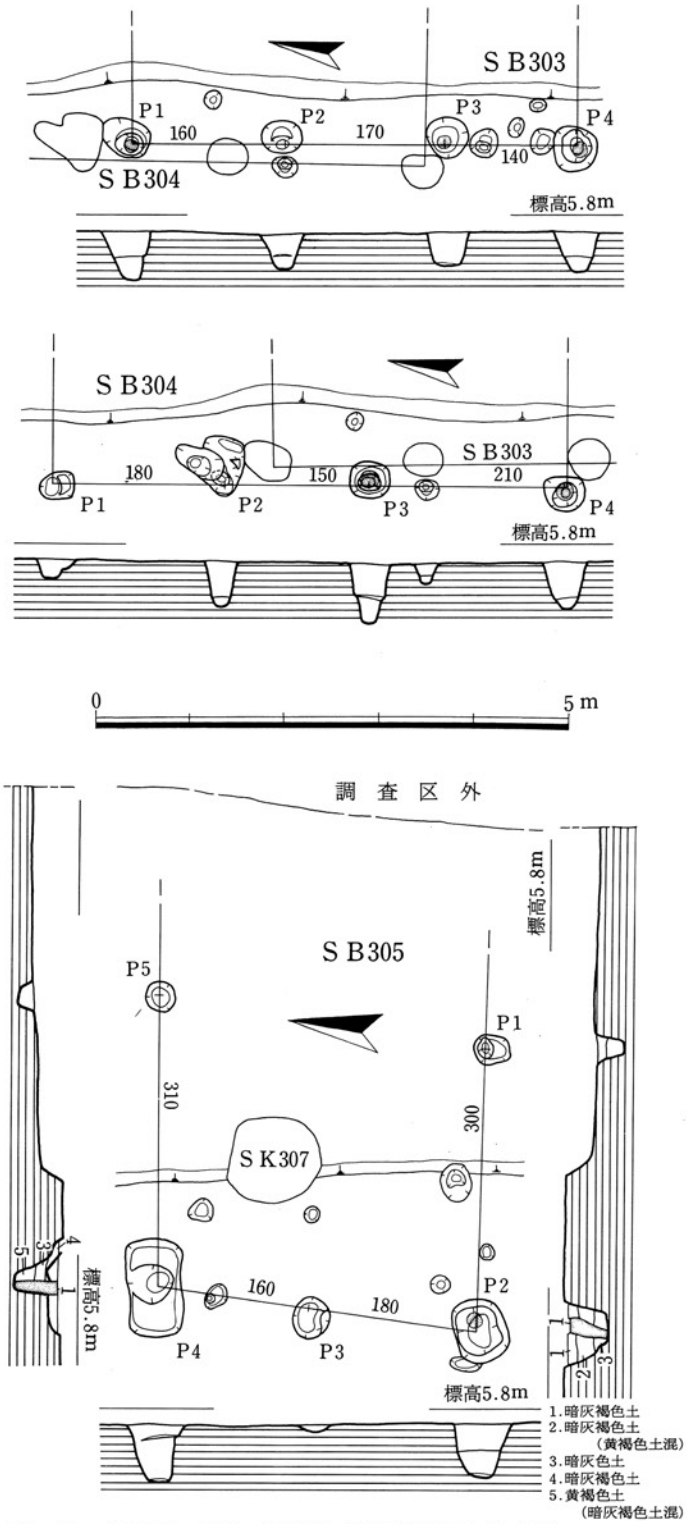


Fig.32　ＳＢ303・304・305掘立柱建物実測図（1/80）

ＳＢ305掘立柱建物（Fig.32）

ＢＬ・ＢＭ－24・25グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。ＳＫ307と重複するが、その先後関係は不明。遺構の大部分はカクランによって削られているため、その全貌は知り得ない。現況では２×１間の建物のようであるが、さらに東側に延びもっと大型の建物になる可能性が十分考えられる。東西軸をほぼ真北にとり、その長さは3.4m程度である。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は隅丸長方形もしくは円形で、その規模は長軸0.3～1.0m、深さ0.2～0.6m程度である。Ｐ４は２段掘り状を呈す。柱穴埋土は暗灰褐色土と黄褐色土が互層になる程度に突き固めている。またＰ２・４では径15cm程の柱痕跡を検出している。遺物はＰ４の埋土中より瓦器深鉢の他、土師器片が少量出土している。

出土遺物（Fig.33）

瓦器（１）　深鉢で、復元口径28.7cm、同底径23.3cm、器高24.5cm。口縁部に２個の穿孔を有する張り出しを設ける。体部内面～内底面は横方向のハケ目、体部外面は縦・斜め方向のハケ目、他は工具によるナデ調整を行う。内外面とも煤が付着

し、外面には部分的に指頭圧痕が認められる。褐色を呈する。

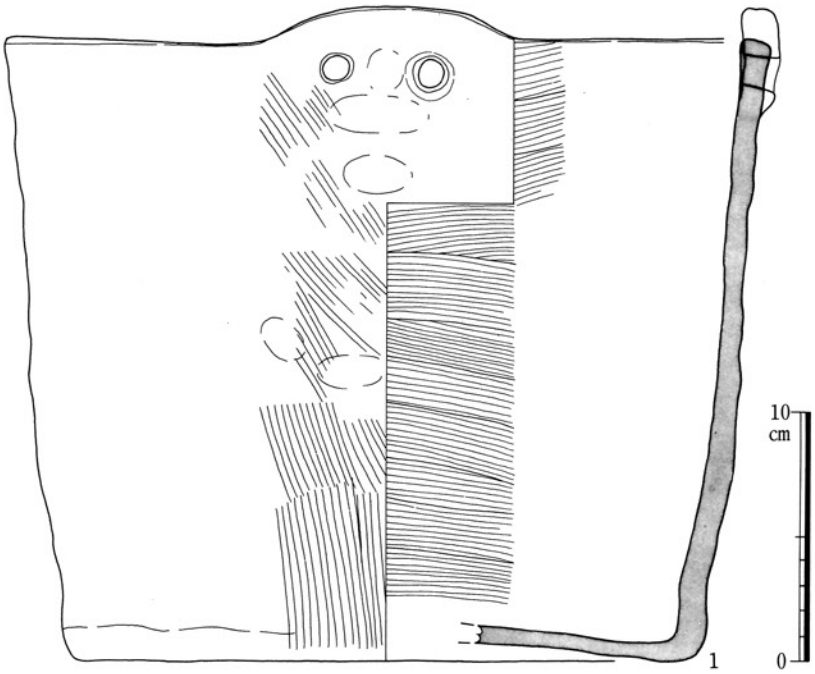


Fig.33　ＳＢ305出土遺物実測図（1/3）

(2) 土　壙

ＳＫ307土壙

（Fig.34）

ＢＬ－24グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。遺構の大部分の上面はカクランによって削平される。平面形は径0.9～0.95mの略円形を呈し、深さは0.45m程度程度である。底面は浅いレンズ状を呈し、壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層で、遺物は全く出土していない。なお埋土の状態より中世以前の所産である可能性があるが、遺物が皆無で時期が限定できないためここで報告しておく。

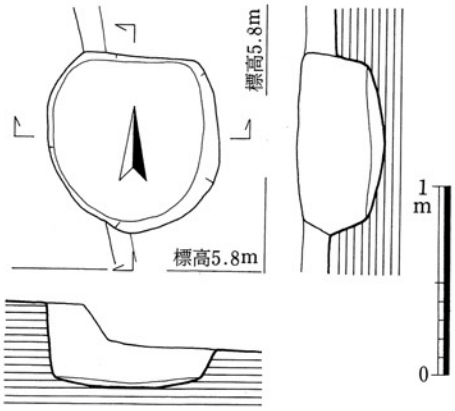


Fig.34　ＳＫ307土壙実測図（1/40）

(3) 溝

調査区の北側と南側で、３条検出している。調査区の中央部に位置する掘立柱建物群の梁行と平行しており、建物群を区画する溝である可能性が高い。

ＳＤ306溝（Fig.35）

ＢＩ・ＢＪ－23・24グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。東西方向に検出し、両端部はカクラン及び近世の遺構に削られるため明らかではないが、その延長は調査区外にまで延びるものと思われる。断面形はＵ字～Ｖ字形で、幅0.4m、深さは西側で0.2m、中央より

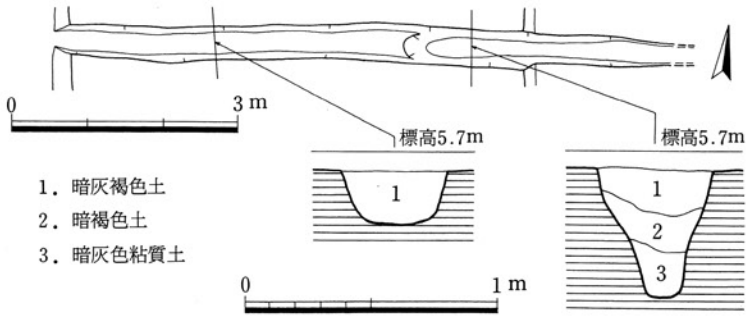


Fig.35　ＳＤ306溝及び土層断面実測図（1/100・1/30）

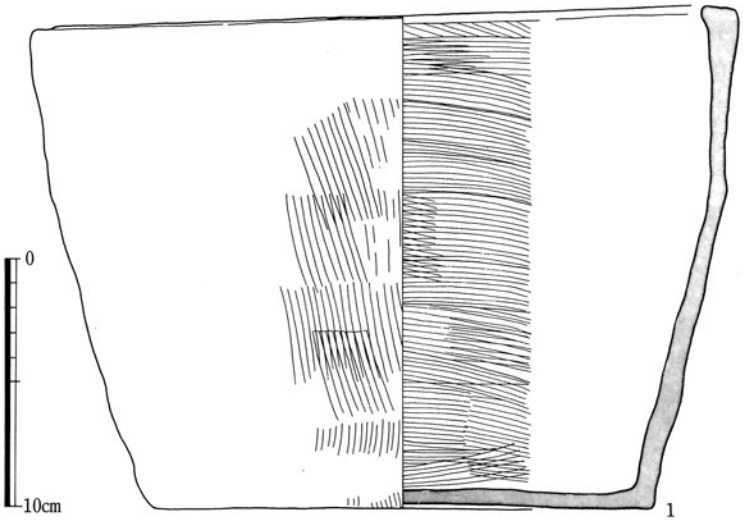


Fig.36　ＳＤ306出土遺物実測実測図（1/3）

やや東側の部分から深く落ち込み0.5m程まで達する。埋土は３層に大別でき、いずれも自然堆積によるものと判断される。遺物は埋土中より瓦器深鉢の他、土師器類がビニール１袋程度出土している。

出土遺物（Fig.36）

瓦器（１）　深鉢で、口径25.4cm、底径19.4cm、器高19.5cm。体部内面～内底面は横方向のハケ目、体部外面は縦方向のハケ目、他は工具によるナデ他調整を行う。また体部外面～同内面上半にかけて黒斑が認められる。淡灰褐色を呈する。

ＳＤ308溝（Fig.37）

ＢＭ－23～25グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。東側の延長は調査区外にあると 思われる。また西側は検出長約７m程の位置で終息しており、調査区が狭小なため断定はできないが、建物群への陸橋部分である可能性がる。調査時には土層観察によりＳＤ310に切られ る溝と考えていたが、もともとＳＤ310と同時期の２重の溝になる可能性がある。幅1.8m、深さ0.8m程度で、断面形は南側が２段掘り状を呈する。壁面は比較的緩やかにに立ち上がる。埋土は灰褐色土を基調とした４層に大別でき、いずれも自然堆積によるものと判断される。遺物は土師器片が埋土中より少量出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＤ310溝

（Fig.37）

ＢＭ・ＢＮ－23～25グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。ＳＤ308で記述したとおり、同時期の２重の溝になる可能性がある。東側の延長は調査区外にあると思われる。西側はＳＤ308同様、検出長約７ｍ程の位置で終息しており、陸橋を形成している可能性がある。断面形はＵ字形に近く、幅0.9m、深さ0.4m程度である。埋土は灰褐色土を基調とした３層に大別でき、いずれも自然堆積によるものと判断される。遺物は埋土中より土師器片がわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

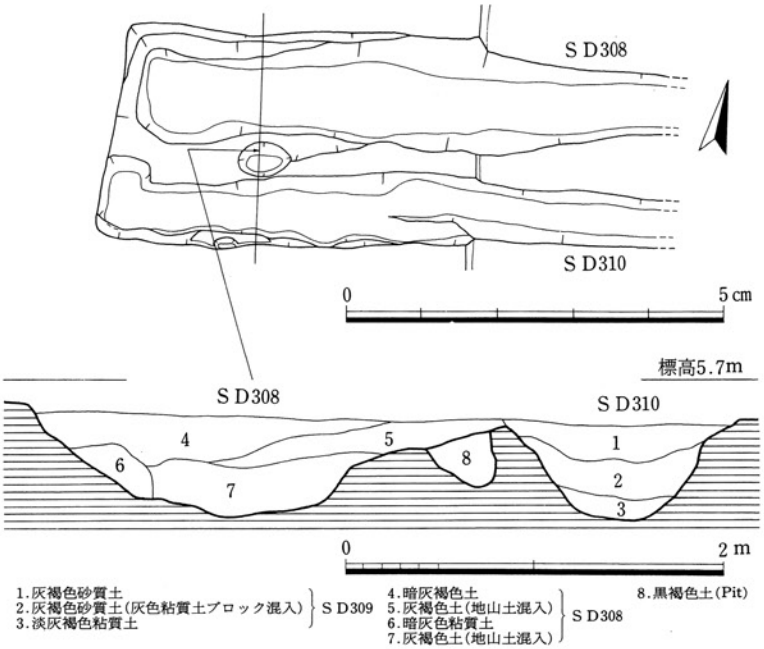


Fig.37　ＳＤ308・310溝及び土層断面実測図（1/100・1/30）

(4) 不明遺構

ＳＸ309不明遺構（Fig.27）

ＢＨ～ＢＮ－22・23グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。ＳＤ306・ＳＸ311と切り合い関係にありいずれも本遺構が後出する。現況では溝状を呈するが、遺構の西側が調査区外にあり全貌は知り得ない。検出できた部分の最大幅1.6m、最深0.2m程度で、埋土は灰褐色土を基調としていた。底面は中央部分が浅く溝状に窪んでいる他は概ね平坦であった。遺物は埋土中より陶磁器類がビニール５袋程度出土した。

出土遺物（Fig.38）

青磁（１）　碗で復元口径13.8cm、同高台径7.26cm、器高4.8cm。淡緑色の釉を施す。

磁器（２～４）　いずれも染付。２は皿で、口径13.0cm、高台径7.5cm、器高3.1cm。絵柄は青色で描かれる。３は碗で、復元口径9.7cm、同高台径4.0cm、器高5.4cm。絵柄は紺色で描かれる。４は合子の蓋で、復元口径6.6cm、器高1.9cm。絵柄は紺色で描かれる。

陶器（５～８）　５は皿で、黄褐色の釉が施される。復元口径18.2cm、残存器高4.9cm。６は

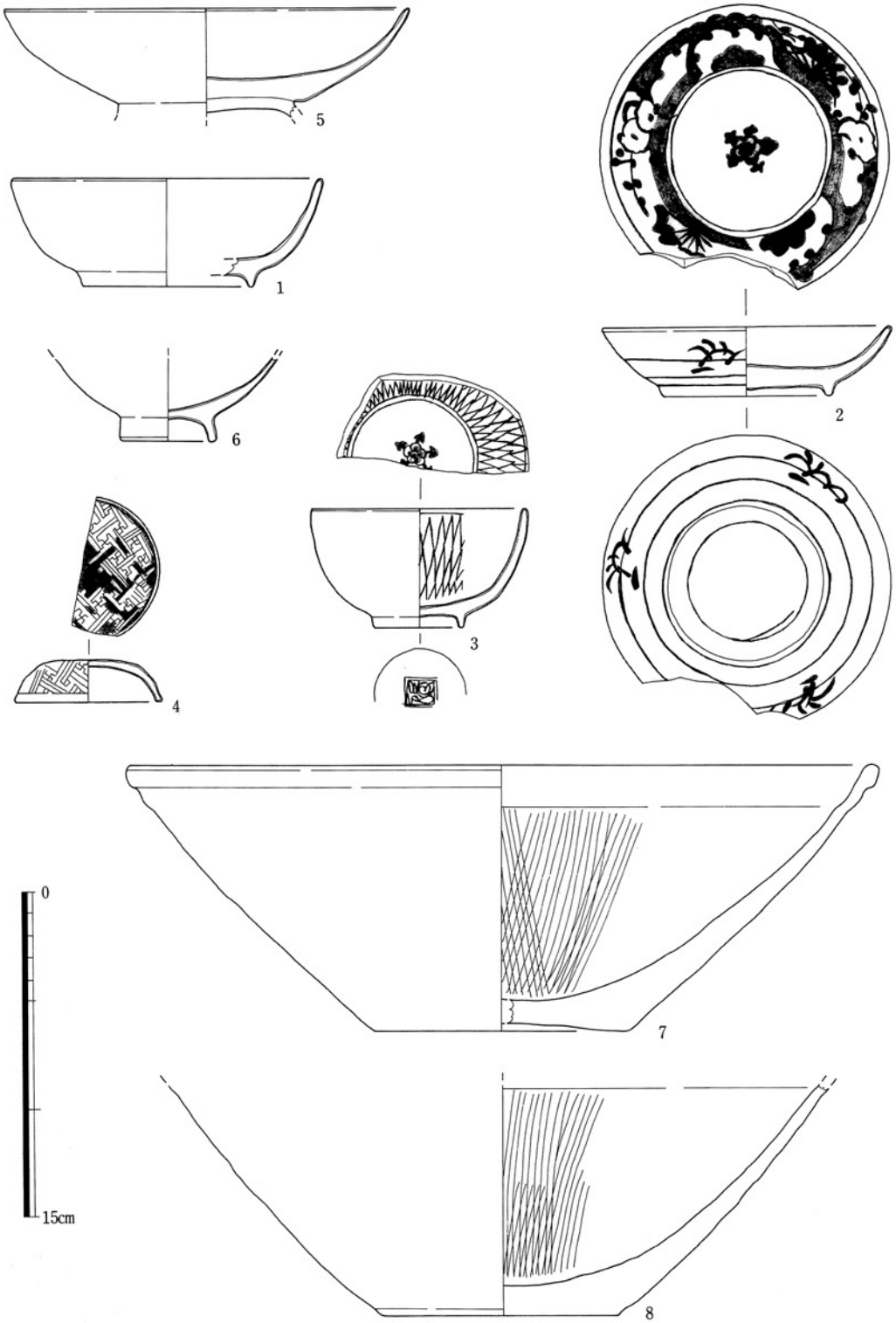


Fig.38　ＳＸ309出土遺物実測図（1/3）

碗の高台部破片で、高台径4.2cm。淡褐色の釉を施す。7・8は擂鉢。7は底部糸切りで、復元口径33.5cm、同底径11.4cm、器高12.0cm。内面全面に擂目を施す。暗茶褐色。8は底径10.6cm。内面全面に擂目を施す。また口縁部周辺のみ釉を施す。暗茶褐色。

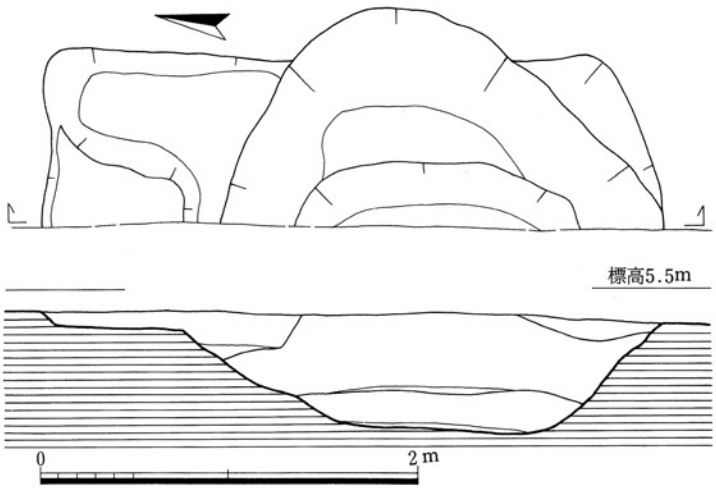


Fig.39　ＳＸ311不明遺構実測図（1/40）

ＳＸ311不明遺構（Fig.39）

ＢＭ－23グリッドで検出した。検出面の標高は5.4m。遺構の大部分は調査区外にあると考えられるため、遺構の全貌は知り得ない。また上面を近世のＳＸ309に削平される。検出できた部分での規模は南北長3.3m、東西長1.15m、深さ0.6m程度である。現況では２～３段掘り状を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は灰褐色土を基調としていた。遺物は埋土中より土師器、須恵器片が２～３点出土しているが、図示できるものはなかった。

Fig.40　千布二木黒木遺跡 4 区遺構配置図 (1/200)

Ⅶ．調査の記録　－４区－

４区は高畑部分にあたり、表土は現耕作土も含め80cm程度で、基盤面は淡黄褐色の砂質土であった。

検出した遺構は掘立柱建物19棟、井戸８基、土壙26基、溝４条、不明遺構２基、小穴多数で、縄文時代～中世にかけての所産であった。中でも中世の遺構がその中心をなしていた。以下、時代別に報告する。

１．縄文時代の遺構と遺物

(1) 土　　壙

ほとんどの土壙が遺物が皆無で時期を限定できない。ただ周辺より縄文時代早期の遺物が検出されている点及び埋土の状態より勘案して、ここでは縄文時代の可能性がある土壙を４基報告する。

ＳＫ411土壙（Fig.41）

ＢＱ－34グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。中世の建物ＳＢ450に切られる。平面形は上面で径0.9～1.0mの円形に近く、底面で径1.2m程度の円形に近い形状を呈する。断面形は台形を呈し、深さ0.3mを測る。底面は浅いレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土の単層であった。袋状の貯蔵穴になる可能性がある。遺物は埋土中より刻目突帯文土器等がビニール１袋程度出している。

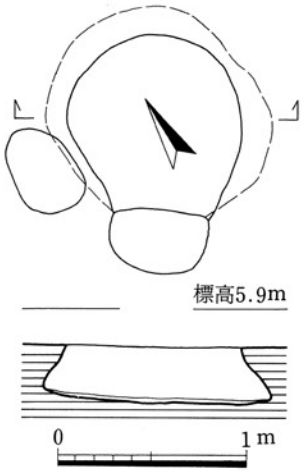


Fig.41　ＳＫ411土壙実測図(1/40)

出土遺物（Fig.42）

甕（１～４）　１・２は口縁部破片。いずれも口縁端部及び肩部にヘラによる刻目を施した突帯を巡らす。１は内外面ナデ調整で、褐色を呈する。２は肩部の突帯下部外面は条痕を施す。他はナデ調整。褐色。３は肩部破片で、同様にヘラによる刻目を施した突帯を巡らす。外面に条痕を施す以外はナデ調整。褐色を呈する。４は底部破片。底径7.8cm。ほぼ中央に穿孔を有する。内外面ナデ調整。また外底面には葉脈痕が認められる。褐色。

石器（５）　サヌカイト製の削器。最大長7.2cm、最大幅2.8cm。

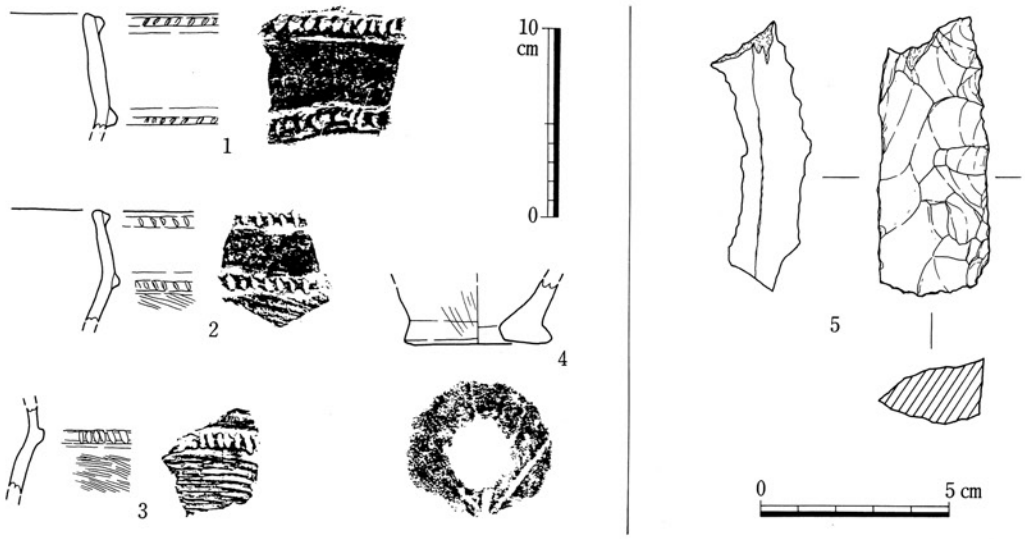


Fig.42　ＳＫ411出土遺物実測図(1/4・1/2)

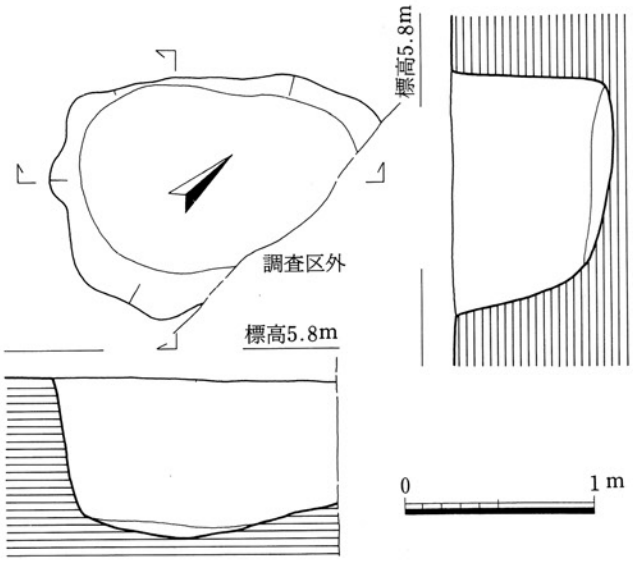


Fig.43　ＳＫ439土壙実測図(1/40)

ＳＫ439土壙（Fig.43）

ＢＳ－37グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。遺構の東側は調査区外にあり、特に他遺構との切り合いは認められない。平面形は恐らく隅丸長方形を呈するのではなかろうか。長軸1.5＋αm、短軸1.3m、深さ0.85mを測る。底面は浅いレンズ状を呈し、壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土は地山色に近い褐色を基調としていた。遺物は全く出土していない。

ＳＫ440土壙（Fig.44）

ＢＴ－37グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。遺構の一部が調査区外にあり、特に他遺構との切り合いは認められない。平面形は長軸1.05m、短軸0.7m程度の隅丸長方形を呈し、深さ0.6mを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土は暗褐色土の単層で、遺物は全く出土していない。

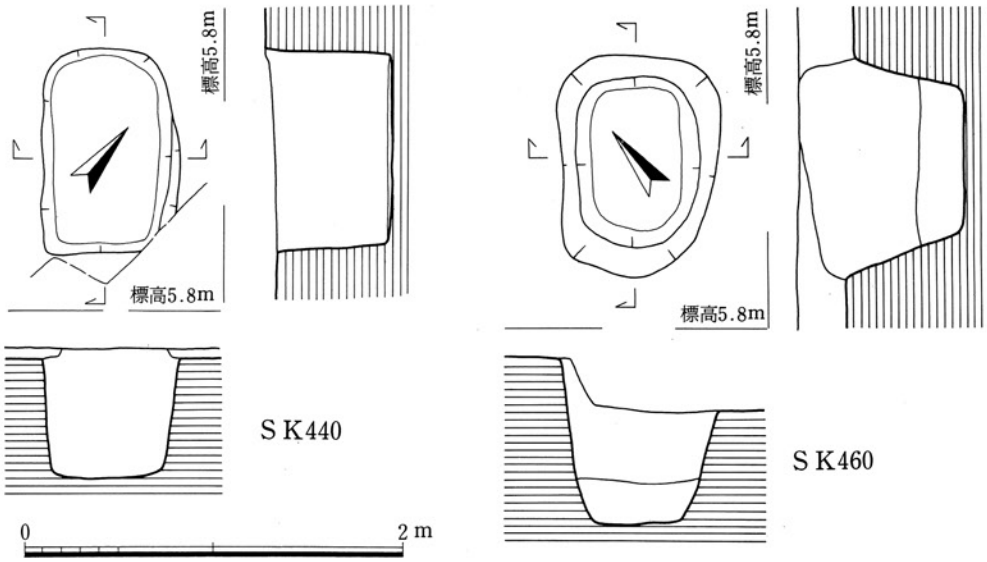


Fig.44　SK440・460土壙実測図（1/40）

SK460土壙（Fig.44）

BT－34グリッドで検出した。検出面の標高は5.4～5.7m。古墳時代のSD401に遺構上面の大部分が削られる。平面形は長軸1.15m、短軸0.8mの隅丸長方形を呈し、深さ0.85mを測る。底面は概ね平坦で、壁面はきつく立ち上がる。埋土は暗褐色土～褐色土で、遺物は全く出土していない。

⑵ その他の出土遺物

小穴出土遺物（Fig.45）

1－P4071、2－P4003、3－P4236、4－P4028、5－P4244、6－P4013出土。

縄文土器（1～4）　1は口縁下内外面に刺突文を巡らす。褐色で胎土に滑石を含む。2・3は押型文土器。2は楕円形を施文し、淡黄褐色を呈する。3は山形文を施文し、淡黄褐色を呈する。いずれも磨耗している。4は刻目突帯文土器の甕の口縁部破片。口縁部及び肩部にそれぞれ1条のヘラによる刻目を施した突帯を巡らす。胴部外面に条痕を施す他は工具によるナデ調整。褐色を呈する。

石器（5・6）　5はサヌカイト製の石匙。最大長10.1cm、最大幅4.1cm。比較的粗い仕上げである。6は黒曜石製の石鏃。剝片鏃で、最大長3.0cm、最大幅2.2cm。

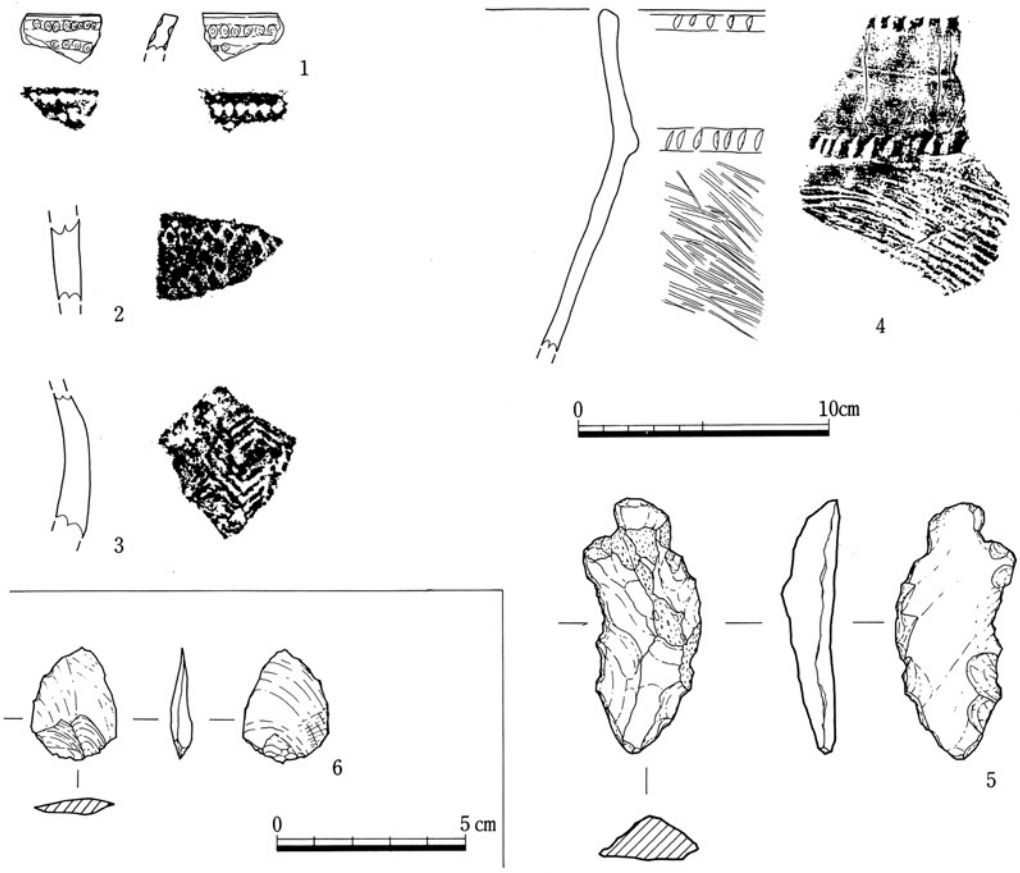


Fig.45　小穴出土遺物実測図（1/3・1/2）

２．古墳時代の遺構と遺物

確実な遺構としては、溝１条しか検出していない。

(1) 溝

調査区の北東から南西にかけて１条検出した。

ＳＤ401溝（Fig.46）

ＢＰ～ＢＴ－33～37グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。縄文時代のＳＫ460を切り、中世のＳＢ443～445、ＳＥ404、ＳＫ424、ＳＤ414、ＳＸ402の他、多数のピットに切られる。遺存状態は不良でかなり削平を受けているものと考えられる。幅2.0m、深さ0.2m前後で、断面形は逆台形に近い。埋土は黒褐色土を基調とした２層に大別できる。周辺に古墳時代の集落の存在が考えられるが、本溝以外には確実な遺構が確認できていないため不明である。遺物は埋土中より弥生土器、土師器高坏等がビニール２袋程度出土している。

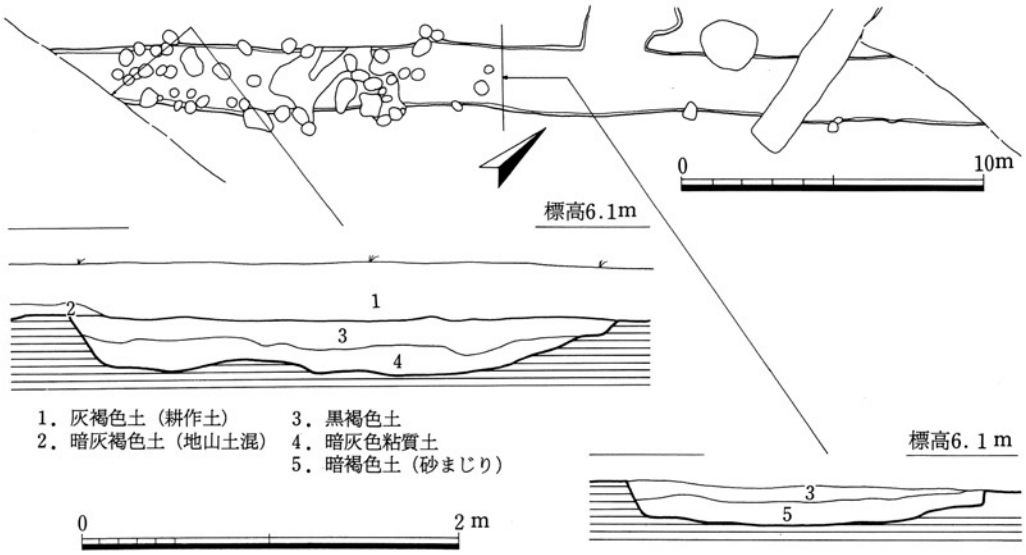


Fig.46　ＳＤ401溝及び土層断面実測図（1/250・1/40）

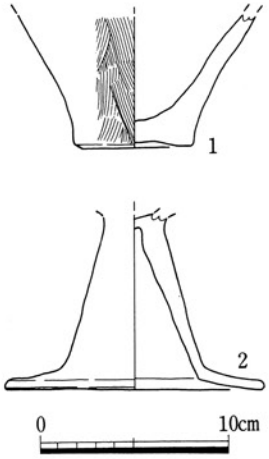


Fig.47　ＳＤ401出土遺物実測図（1/4）

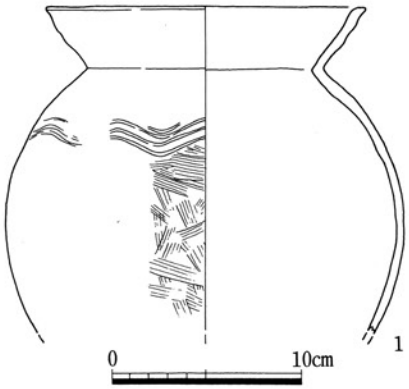


Fig.48　Ｐ4008小穴出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（Fig.47）

甕（１）　弥生中期の甕の底部破片。底径6.3cm。外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整で、淡褐色を呈する。

高坏（２）　土師器。脚部破片。裾部径13.7cm。内面横方向のヘラ削り、外面横ナデ調整で褐色を呈する。

(2) その他の出土遺物

P 4008小穴出土遺物（Fig.48）

甕（1）　口縁部から胴部にかけての破片。復元口径17.7cm。口縁部横ナデ、外面ハケ目、内面ナデ調整。肩部には3条の沈線による波状文を施す。褐色。

3．平安時代の遺構と遺物

この時期の遺構は可能性があるものも含め5基の井戸を確認しているのみである。ただ掘立柱建物群の中にもこの時期まで遡るものが含まれている可能性がある。遺物が皆無で時期が限定できないものも含まれているが、埋土の状態及び掘方の類似等によりこの時期の可能性があるものもここで報告する。

(1) 井　戸

調査区の南東部分で5基検出している。いずれも検出面より80cm前後で湧水点に達しているようである。

ＳＥ406井戸（Fig.49）

ＢＲ－36グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。特に切り合う遺構はない。平面形は一辺0.95m程度の隅丸方形に近く、深さ0.9mを測る。底面は概ね平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土を基調とした4層に大別でき、いずれも自然堆積によるものと判断される。遺物は埋土中より土師器片がわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

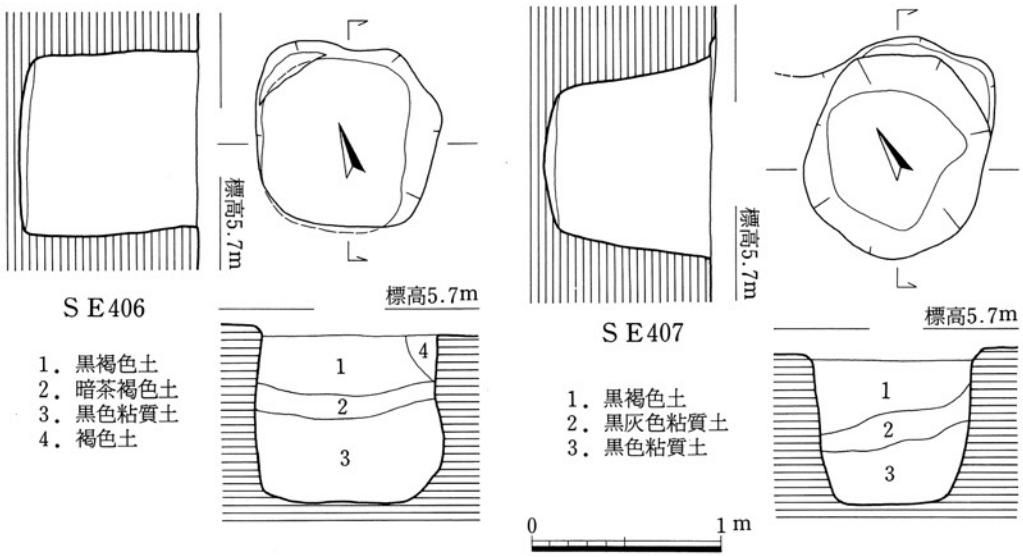


Fig.49　ＳＥ406・407井戸実測図（1/30）

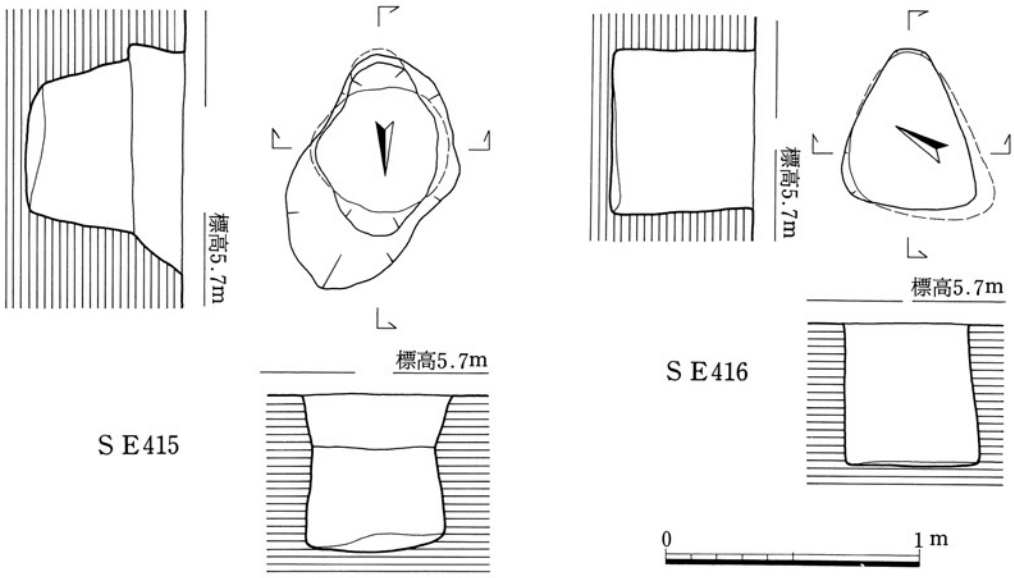


Fig.50　S E415・416井戸実測図（1/30）

S E407井戸（Fig.49）

B R－36グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。特に切り合う遺構はない。平面形は長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形に近く、深さ0.85mを測る。底面は浅いレンズ状を呈し、壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土は黒褐色土を基調とした3層に大別でき、いずれも自然堆積によるものと判断される。遺物は全く出土していない。

S E415井戸（Fig.50）

B S－36グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。S K420に切られる。平面形は長軸1.2m、短軸0.8mの歪な楕円形を呈する。深さ0.8m程度で、底面より約0.55mの位置に稜を形成する。底面は浅いレンズ状を呈し、壁面はきつく立ち上がる。埋土は黒褐色土を基調としていた。遺物は埋土中より土師器坏等が少量出土している。

出土遺物（Fig.51）

土師器（1）　坏で復元底径8.0cm。内外面ナデ調整で淡黄褐色を呈する。

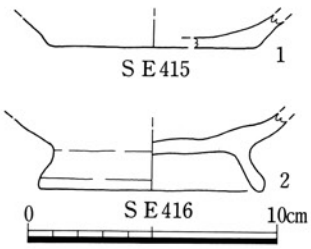


Fig.51　S E415・416出土遺物実測図（1/3）

S E416井戸（Fig.50）

B S－36グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。特に切り合う遺構はない。平面形は長軸0.85m、短軸0.7mの隅丸の三

角形に近い形状を呈する。深さは0.75mを測る。底面は概ね平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土を基調としていた。遺物は埋土中より土師器椀等が少量出土している。

出土遺物（Fig.51）

土師器（２）　椀で復元高台径8.6cm。外面横ナデ、内面ナデ調整で淡褐色を呈する。

⑵ その他の出土遺物

Ｐ4126小穴出土遺物（Fig.52）

土師器（１～３）　１・２は坏。１は口径12.0cm、底径7.1cm、器高2.7cm。体部内外面横ナデ、内底面ナデ、外底面ヘラ切り後ナデ調整。明褐色を呈する。２は復元口径11.6cm、底径7.2cm、器高3.3cm。外底面ヘラ切り後ナデ調整を行う。他は横ナデ調整で、明褐色を呈する。３は椀で、復元高台径7.8cm。内外面横ナデ調整。内面黒褐色、外面淡褐色を呈する。

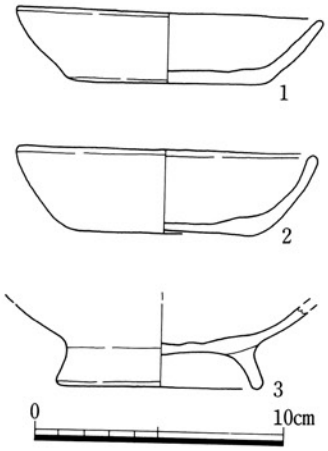


Fig.52　Ｐ4126小穴出土遺物実測図（1/3）

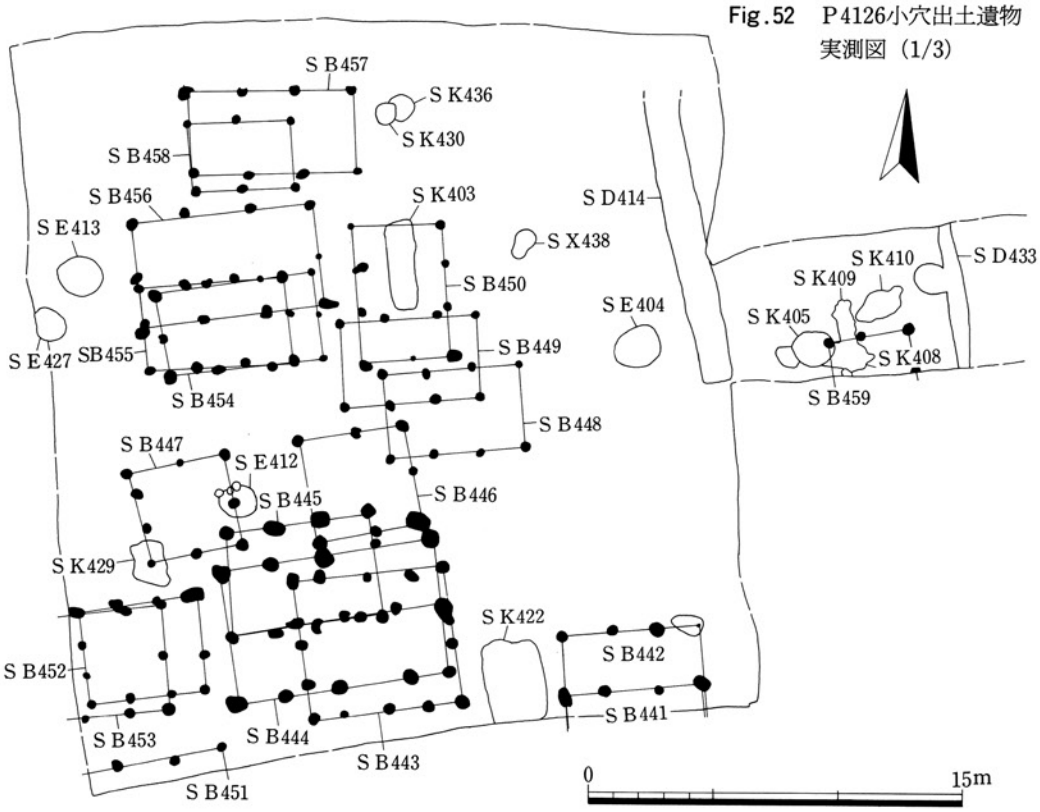


Fig.53　４区掘立柱建物配置図（1/300）

4．中世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

調査区の中央から西側にかけて集中的に検出した。確認できた建物は全部で19棟で、３×２間もしくは３×１間を基本としていた。また検出した状態から２～３回程度の立て替えが行なわれたことが考えられる。

ＳＢ443掘立柱建物（Fig.54）

ＢＳ・ＢＴ－33～35グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。古墳時代のＳＤ401を切る。またＳＢ444と切り合い、ＳＢ445と重複するがその先後関係は不明。４×３間の東西棟の建物で、桁行6.0m、梁行5.4mの規模を有する。床面積は32.4m²と大型で、桁行をN-82°-Eにとる。柱間は図示したとおり。Ｐ２・３はやや北側へ、Ｐ９・10はやや南側へ偏っているが、これは出入口部分を意識したものであろうか。柱穴掘方は円形～楕円形に近く、その規模は長軸0.3～0.6m、深さ0.3～0.7m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調としていた。遺物は柱穴埋土より、土師器小皿・坏・鍋、須恵器擂鉢等がビニール２袋程度出土している。

出土遺物（Fig.54）　６はＰ１、１・７はＰ２、３はＰ３、５はＰ４、８はＰ５、４はＰ11、２はＰ13出土。

土師器（１～７）　１～３は糸切り底の小皿。いずれも体部内外面横ナデ、内底面ナデ調整。１は復元口径7.9cm、同底径5.3cm、器高2.0cm。淡褐色。２は復元口径8.2cm、同底径6.0cm、器高1.8cm。明褐色。３は復元口径8.6cm、同底径6.0cm、器高1.4cm。淡黄褐色。４・５は坏の底部。いずれも内外面横ナデ調整。４は復元底径10.0cm。明褐色。５は復元底径10.7cm。褐色。６・７は鍋の口縁部破片。内外面ともナデ調整を行う。褐色。

須恵器（８）　擂鉢の底部破片。復元底径13.4cmで、淡白灰色を呈する。

ＳＢ444掘立柱建物（Fig.55）

ＢＳ・ＢＴ－33～35グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。古墳時代のＳＤ401を切る。ＳＢ443・445と切り合うがその先後関係は不明。４×２間の東西棟の建物で、桁行8.4～8.5m、梁行5.3～5.5mの規模を有する。床面積は45.6m²と今回検出した建物の中で最も大型で、桁行をN-80°-Eにとる。柱間は図示したとおり。Ｐ13～16は束柱になると考えられる。柱穴掘方は隅丸方形～円形もしくは楕円形で、その規模は長軸0.4～0.8m、深さ0.5～0.8m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色～淡黄褐色土を版築状に突き固めていた。Ｐ２～５、Ｐ７・８で径15cm程の柱痕跡を検出している。また遺物は柱穴埋土より土師器小皿・坏等がビニール２袋程度出土している。

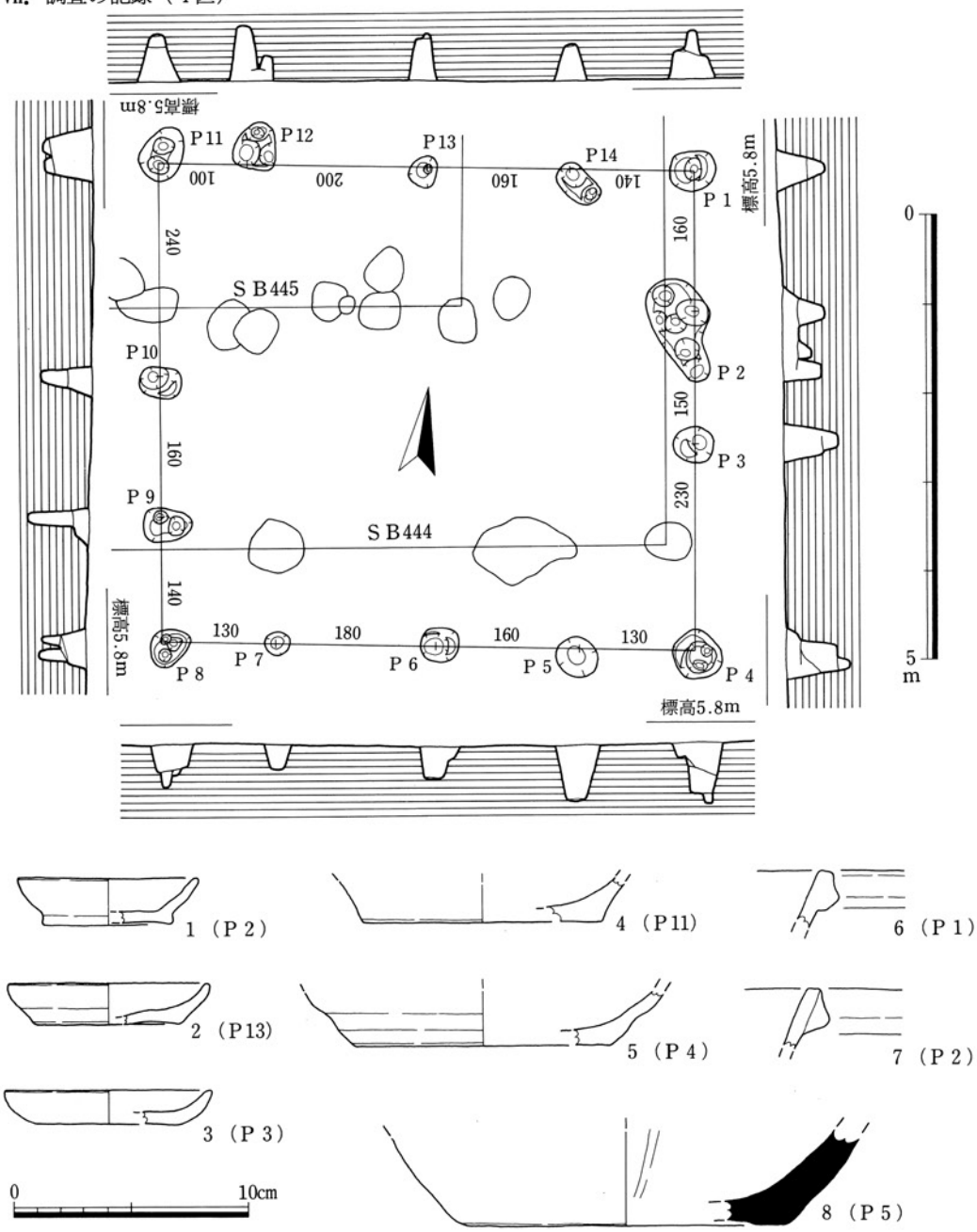


Fig.54　ＳＢ443掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）

出土遺物（Fig.55）　１・４・５はＰ１、３はＰ３、６はＰ４、２はＰ８、７はＰ10出土。

土師器（１～７）　１～６は小皿。基本的に体部内外面横ナデ、内底面ナデ調整を行う。明褐色～褐色を呈する。１は復元口径8.7cm、同底径6.0cm、器高1.7cm。２は底部糸切りで、復元口径8.8cm、同底径6.8cm、器高1.6cm。３は底部糸切りで、復元口径9.0cm、同底径7.0cm、器高

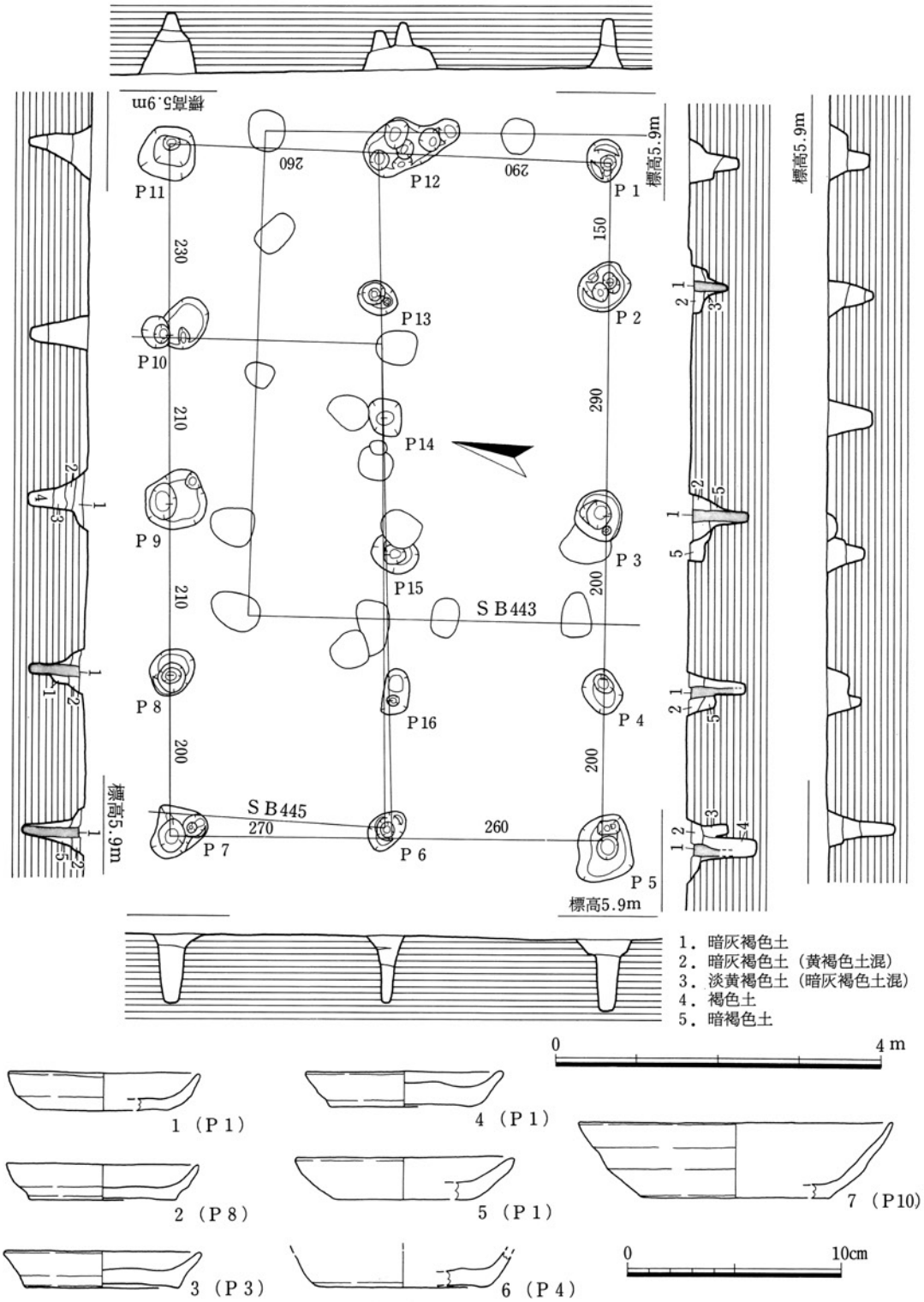


Fig.55　S B444掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）

1.7cm。４は底部糸切りで、復元口径9.0cm、同底径6.6cm、器高1.6cm。５は復元口径10.0cm、同底径6.3cm、器高1.9cm。６は底部糸切りで、復元底径8.0cm。７は糸切り底の坏で、復元口径14.4cm、同底径8.7cm、器高3.4cm。内外面横ナデ調整。外面には煤の付着が認められる。暗褐色を呈する。

ＳＢ445掘立柱建物（Fig.56）

ＢＳ・ＢＴ－33・34グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。古墳時代のＳＤ401を切る。ＳＢ444と切り合い、ＳＢ443・444・446・447と重複するがその先後関係は不明。３×１間の東

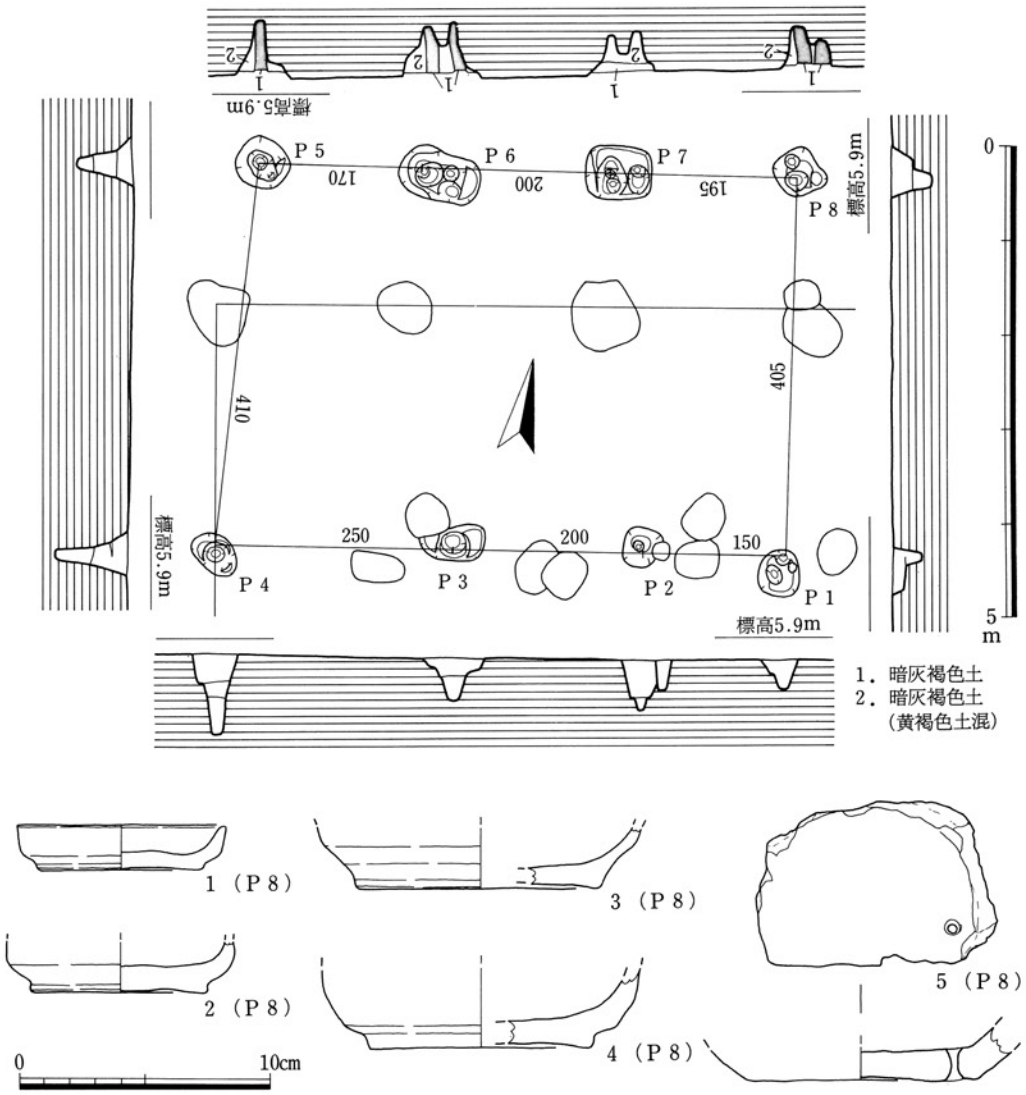


Fig.56　ＳＢ445掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）

西棟の建物で、桁行5.65～6.0m、梁行4.05～4.1m、床面積23.7m²の規模を有する。桁行をN-80°-Eにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は隅丸方形～長方形に近く、その規模は長軸0.4～0.9m、深さ0.3～0.8m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調としていた。またＰ５・６・８で径12～16cm程の柱痕跡を検出している。遺物は柱穴埋土より土師器小皿・坏の他、滑石製石鍋の破片等がビニール２袋程度出土している。

出土遺物（Fig.56）　すべてＰ８出土。

土師器（１～４）　１・２は糸切り底の小皿。いずれも体部内外面横ナデ調整。１は復元口径8.2cm、同底径6.4cm、器高1.8cm。内底面ナデ調整。淡黄褐色。２は復元底径7.0cm。淡褐色。３・４は糸切り底の坏。いずれも基本的に横ナデ調整を行う。３は復元底径9.5cm。淡橙褐色。４は復元底径8.6cm。淡褐色。

石製品（５）　滑石製石鍋の底部破片。外面には煤が付着する。穿孔が１箇所あり、転用品と考えられる。

ＳＢ446掘立柱建物（Fig.57）

ＢＲ・ＢＳ－33・34グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。ＳＢ445・448と重複するがその先後関係は不明。２×２間の建物で、桁行4.2～4.3m、梁行4.1m、床面積17.4m²の規模を有する。桁行をN-79°-Eにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は隅丸長方形もしくは円形に近く、その規模は長軸0.3～1.0m、深さ0.3～0.5m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色を基調としていた。遺物は柱穴埋土よりわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

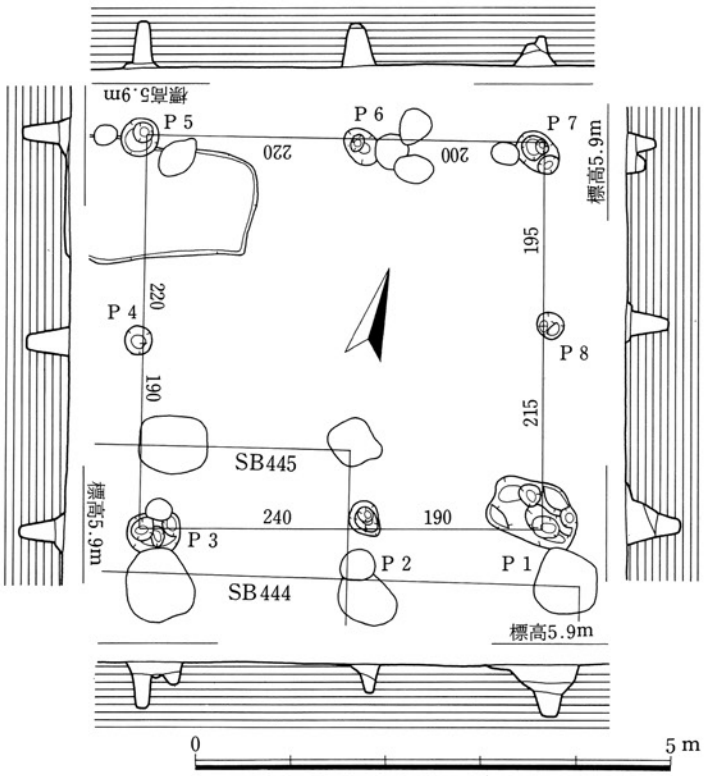


Fig.57　ＳＢ446掘立柱建物実測図（1/80）

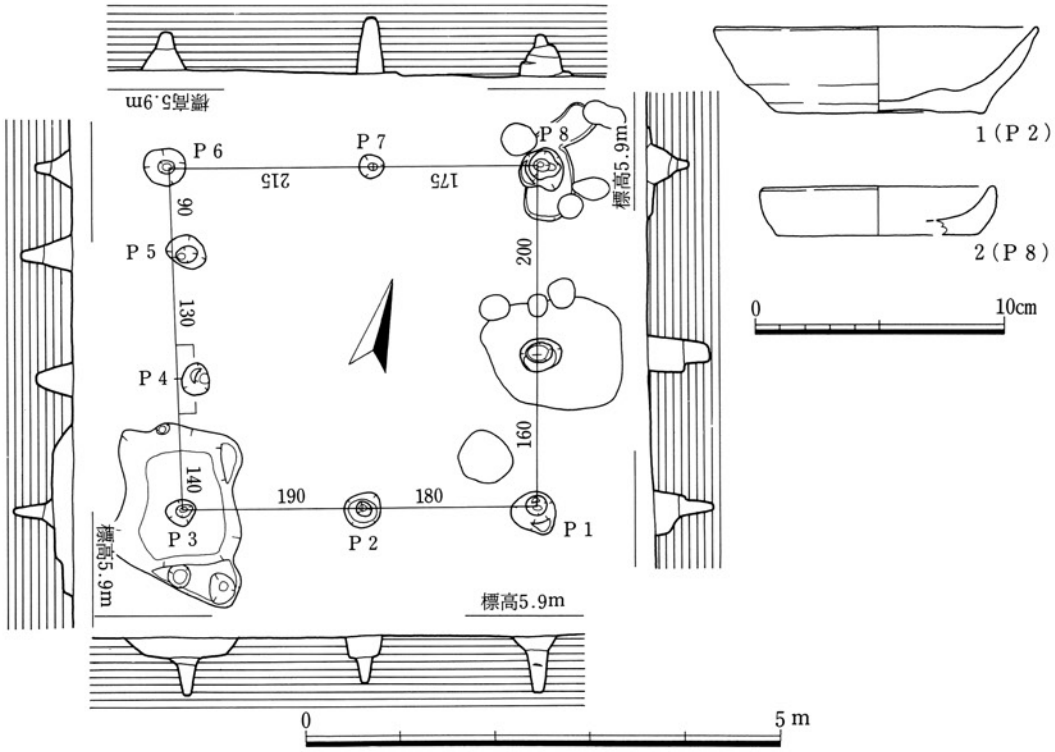


Fig.58　ＳＢ447掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）

ＳＢ447掘立柱建物（Fig.58）

ＢＲ・ＢＳ－32・33グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。ＳＥ412、ＳＫ428を切り、ＳＫ429に切られる。またＳＢ445と重複するがその先後関係は不明。基本的に２×２間の建物で、桁行3.7～3.9m、梁行3.6m、床面積13.7m²の規模を有する。桁行をN-76°-Eにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形に近く、その規模は径0.2～0.5m、深さ0.4～0.6m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色を基調としていた。遺物は柱穴埋土より土師器小皿・坏等がビニール１袋程度出土している。

出土遺物（Fig.59）　１はＰ２、２はＰ８出土。

土師器（１・２）　１は底部糸切りの坏で、口径12.6cm、底径8.0cm、器高3.4cm。体部内外面横ナデ、内底面ナデ調整。褐色を呈する。２は小皿。復元口径9.1cm、同底径7.8cm、器高1.9cm。内外面横ナデ調整で褐色を呈する。

ＳＢ448掘立柱建物（Fig.59）

ＢＱ・ＢＲ－34・35グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。ＳＸ402に切られ、ＳＢ446・449と重複するがその先後関係は不明。３×１間の東西棟の建物で、桁行5.4m、梁行3.4m、床

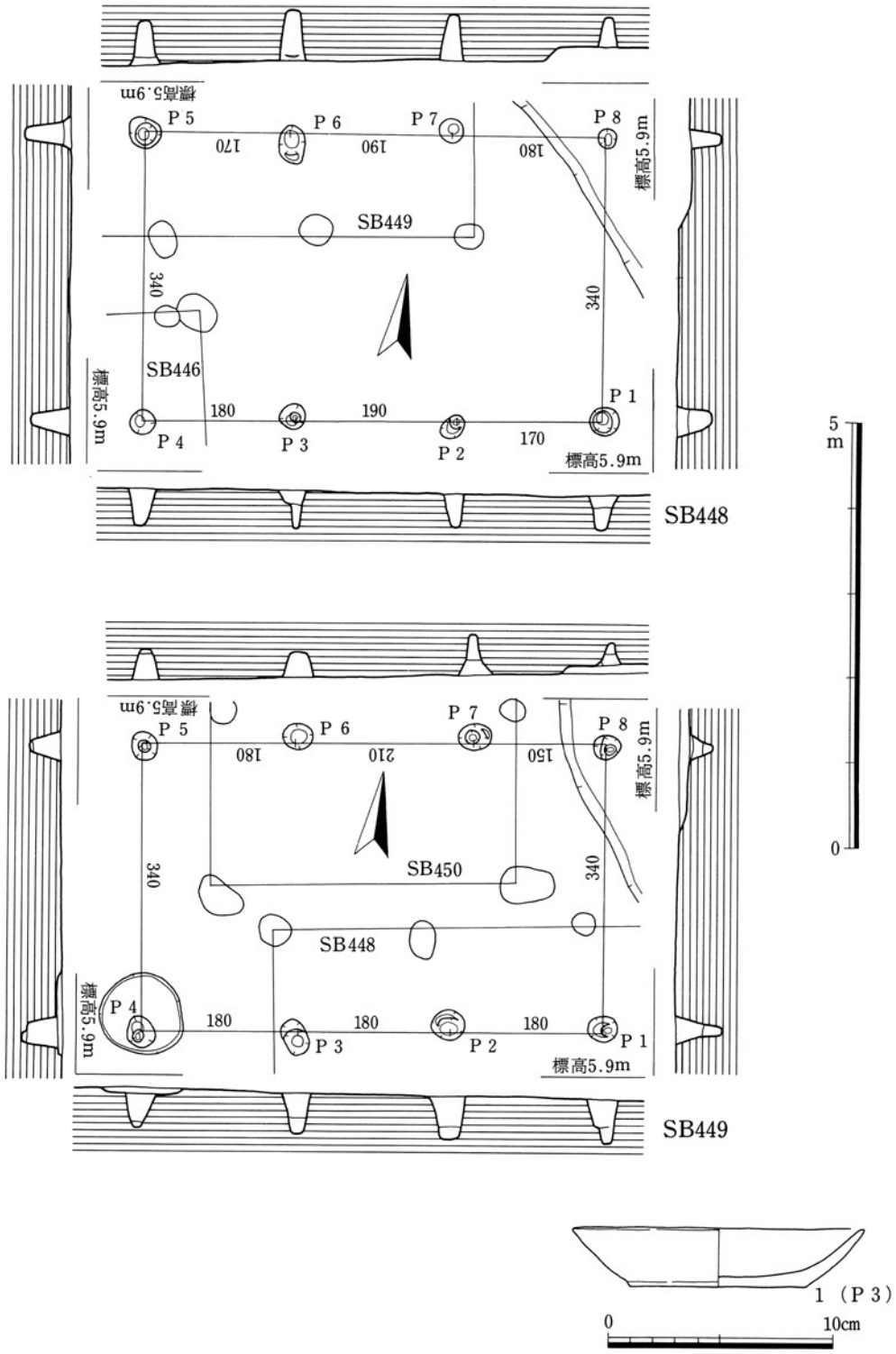


Fig.59　ＳＢ448・449掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）

面積18.4m²の規模を有する。桁行をN-84°-Eにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形に近く、その規模は径0.25～0.4m、深さ0.4～0.6m程度である。柱穴埋土は黒褐色土～暗灰褐色土を基調としていた。遺物は全く出土していない。

ＳＢ449掘立柱建物（Fig.59）

ＢＱ・ＢＲ－34・35グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。ＳＸ402に切られ、ＳＢ448・450と重複するがその先後関係は不明。３×１間の東西棟の建物で、桁行5.4m、梁行3.4m、床面積18.4m²の規模を有する。ＳＢ448と同じ規模である。桁行をN-85°-Eにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形に近く、その規模は径0.3～0.4m、深さ0.3～0.5m程度である。柱穴埋土は黒褐色土～暗灰褐色土を基調としていた。遺物は柱穴埋土より土師器坏等が少量出土している。

出土遺物（Fig.59）　Ｐ３出土。

土師器（１）　底部糸切りの坏。復元口径12.6cm、同底径7.7cm、器高2.6cm。内外面横ナデ調整で、暗褐色を呈する。

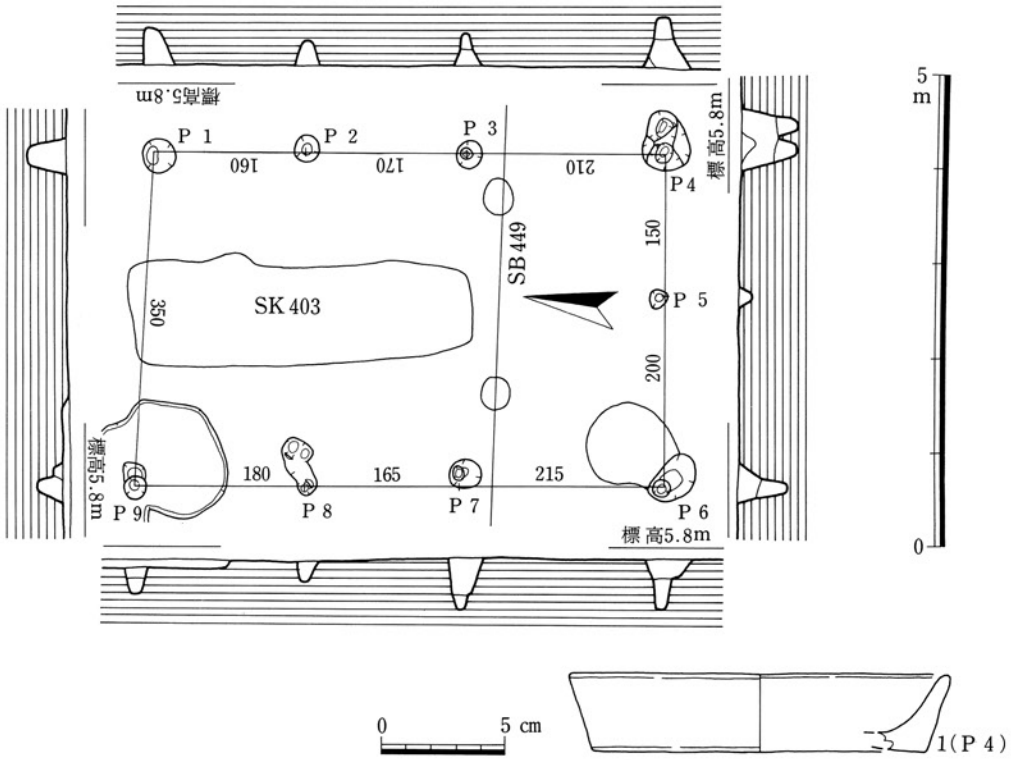


Fig.60　ＳＢ450掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）

ＳＢ450掘立柱建物（Fig.60）

ＢＰ・ＢＱ－34・35グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。縄文時代のＳＫ411を切り、ＳＫ403と切り合うと思われるがその先後関係は不明。またＳＢ449と重複するがその先後関係も不明。３×２間の南北棟の建物で、桁行5.4～5.6m、梁行3.5m、床面積19.3m²の規模を有する。梁行をＮ-84°-Ｅにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形～楕円形で、その規模は長軸0.25～0.6m、深さ0.2～0.6m程度である。柱穴埋土は黒褐色土～暗灰褐色土を基調としていた。遺物は柱穴埋土より土師器坏等がわずかに出土している。

出土遺物（Fig.60）　Ｐ４出土。

土師器（１）　底部糸切りの坏。復元口径14.8cm、同底径13.0cm、器高3.1cm。内外面横ナデ調整で、褐色を呈する。

ＳＢ452掘立柱建物（Fig.60）

ＢＳ・ＢＴ－32・33グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。ＳＢ453と切り合い関係にあり、本建物が先行する。現況では３×３間の東西棟の建物であるが、さらに調査区外まで延びている可能性がある。桁行4.65～4.7m、梁行3.65～3.9m、床面積17.6m²の規模を有する。桁行をＮ-82°-Ｅにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形～楕円形で、その規模は長軸0.2～0.9m、深さ0.1～0.7m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調としていた。遺物は柱穴埋土より土師器片がわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＢ453掘立柱建物（Fig.61）

ＢＳ・ＢＴ－32グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。ＳＢ452と切り合い関係にあり、本建物が後出する。建物の西側は調査区外にあり、現況ではどのような規模の建物になるかは知り得ない。恐らく３×２間以上の規模の建物になるのではなかろうか。桁行をＮ-83°-Ｅにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形に近く、その規模は径0.2～0.6m、深さ0.4～0.6m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調としていた。遺物は柱穴埋土より土師器小皿等がビニール１袋程度出土している。

出土遺物（Fig.61）　１はＰ４、３はＰ６、２はＰ７出土。

土師器（１～３）　いずれも小皿。１は復元口径6.9cm、同底径4.2cm、器高1.8cm。内外面横ナデ調整。淡黄褐色。２は底部糸切りで、復元口径8.6cm、同底径6.8cm、器高1.4cm。体部内外面横ナデ、内底面ナデ調整。淡褐色。３は復元口径9.0cm、同底径7.0cm、器高1.6cm。内外面横ナデ調整。茶褐色。

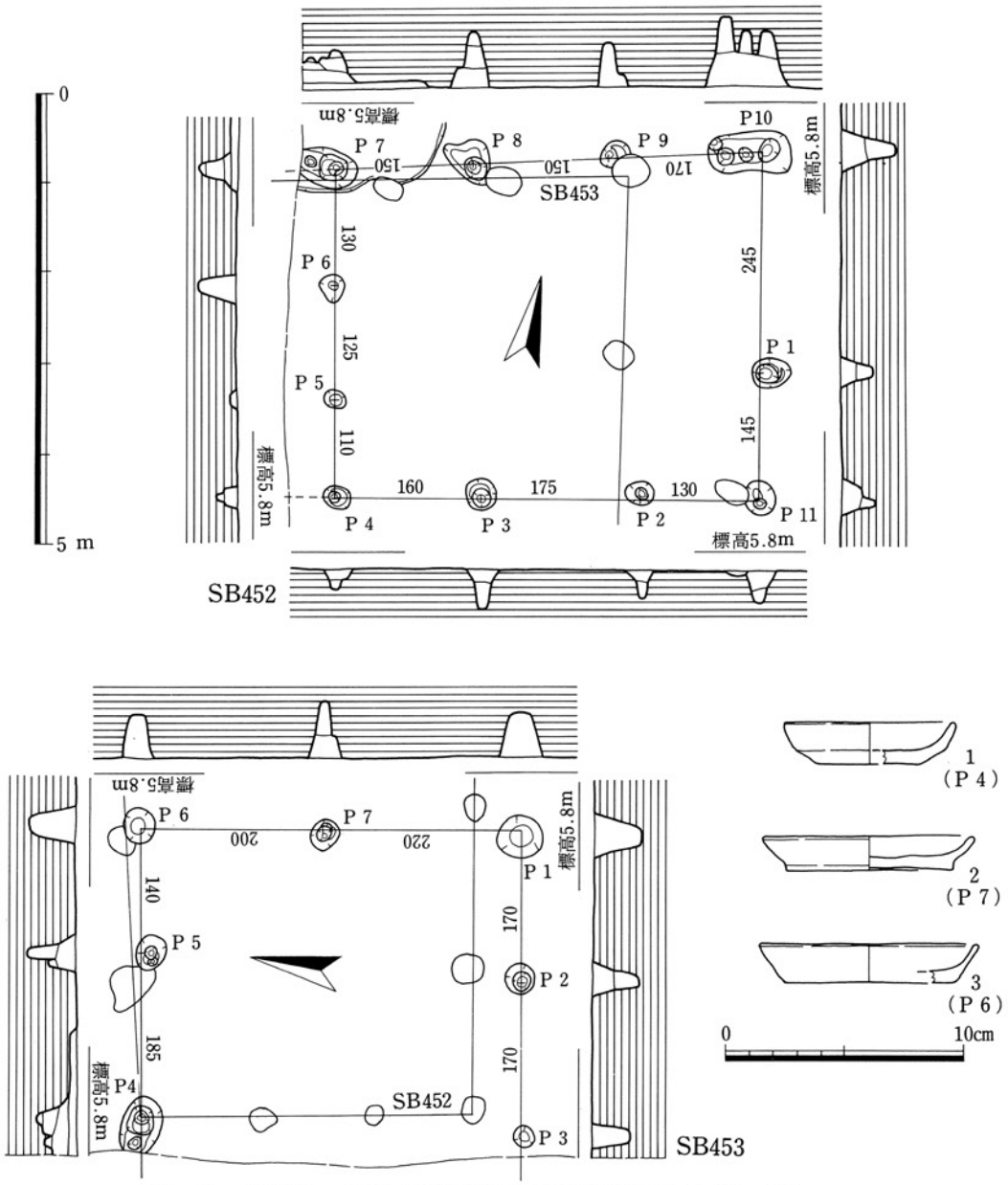


Fig.61　ＳＢ452・453掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）

ＳＢ454掘立柱建物（Fig.62）

ＢＱ・ＢＲ－32・33グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。ＳＢ455・456と重複するがその先後関係は不明。３×２間の東西棟の建物で、桁行6.05～6.3m、梁行3.4m、床面積21.0㎡の規模を有する。桁行をＮ-81°-Ｅにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は隅丸方形～円

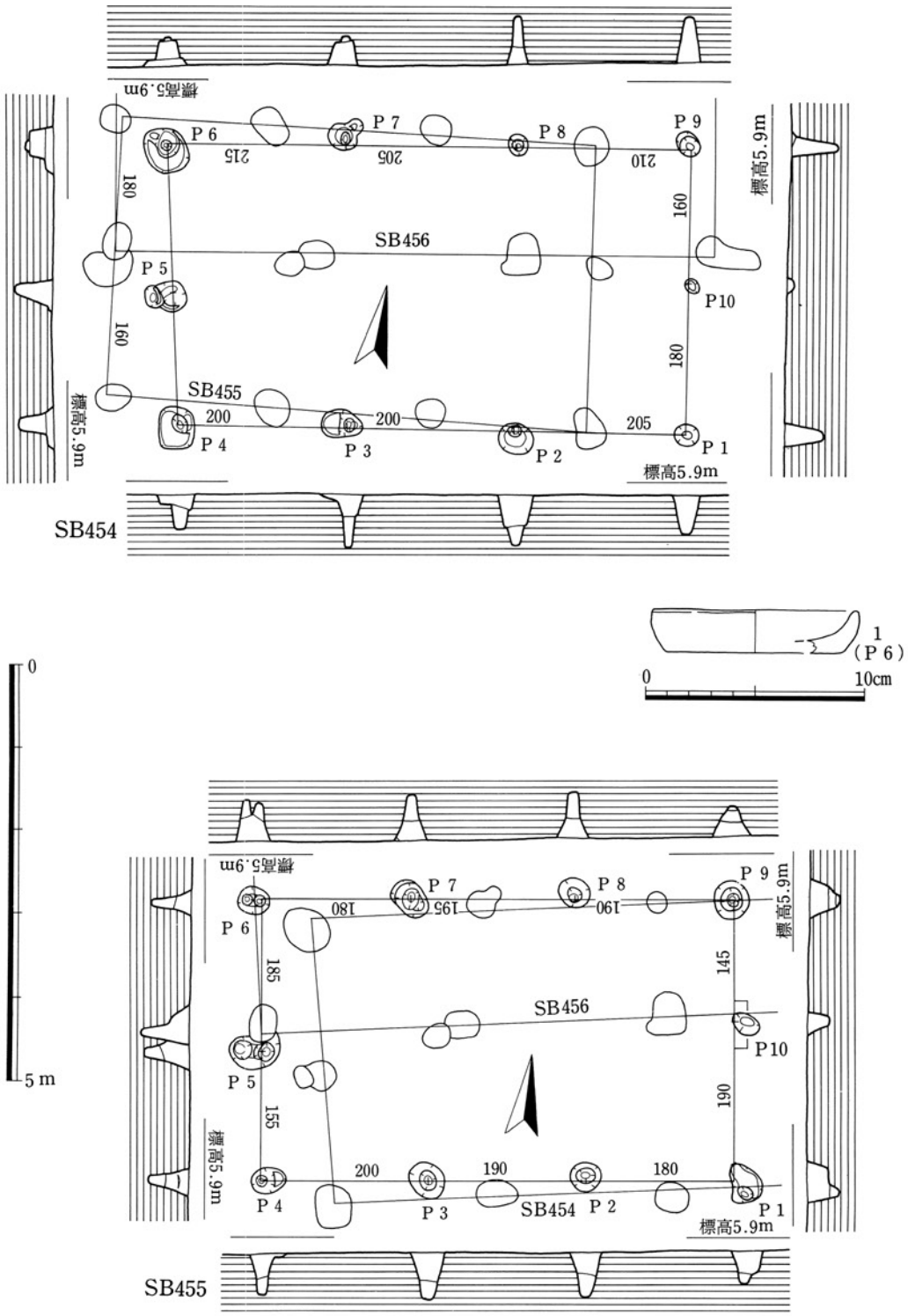


Fig.62　ＳＢ454・455掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）

形に近く、その規模は長軸0.2～0.5m、深さ0.1～0.6m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調としていた。遺物は柱穴埋土より土師器小皿等が少量出土している。

出土遺物（Fig.62）　Ｐ６出土。

土師器（１）　小皿。復元口径9.1cm、同底径7.8cm、器高1.9cm。内外面横ナデ調整で、褐色を呈する。

ＳＢ455掘立柱建物（Fig.62）

ＢＱ・ＢＲ－32・33グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。ＳＢ456に切られ、ＳＢ454と重複するがその先後関係は不明。３×２間の東西棟の建物で、桁行5.65～5.7m、梁行3.35～3.4m、床面積19.1m²の規模を有する。桁行をＮ-83°-Ｅにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形～楕円形で、その規模は長軸0.3～0.6m、深さ0.25～0.6m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調としていた。遺物は柱穴埋土よりわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＢ456掘立柱建物（Fig.63）

ＢＰ・ＢＱ－32～34グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。ＳＢ455を切り、ＳＢ454と重複するがその先後関係は不明。３×２間の東西棟の建物で、桁行7.2～7.3m、梁行4.05～4.15

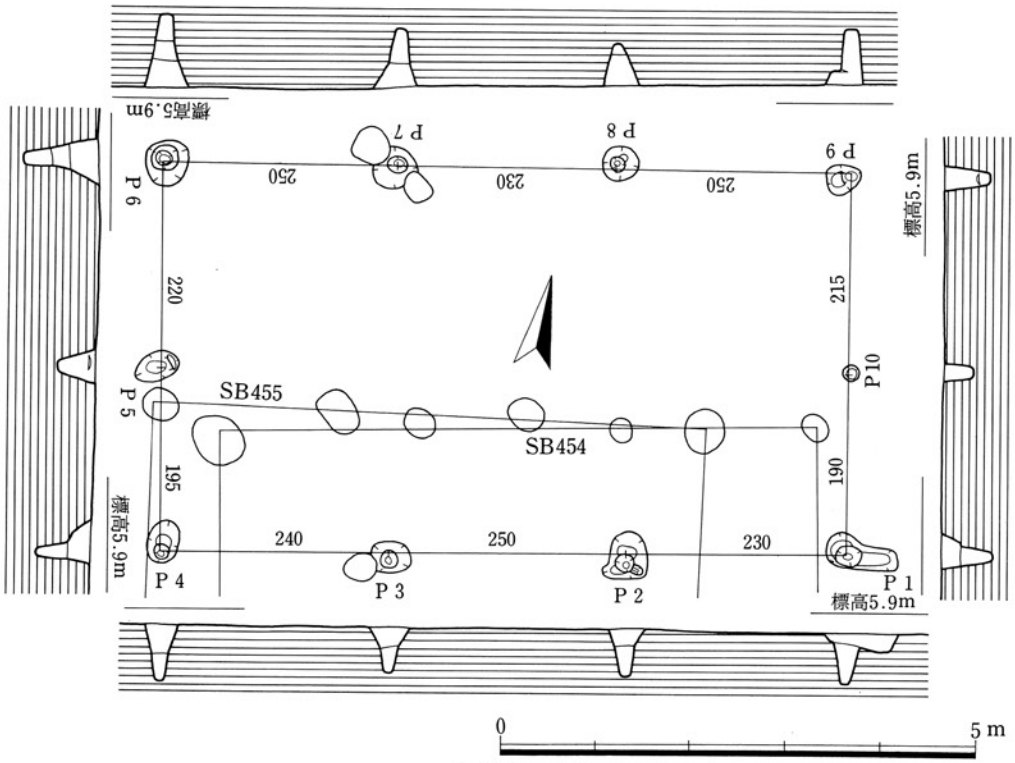


Fig.63　ＳＢ456掘立柱建物実測図（1/80）

mの規模を有する。床面積は29.7m²と大型で、桁行をN-81°-Eにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形～楕円形に近く、その規模は長軸0.2～0.8m、深さ0.3～0.8m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調としていた。遺物は柱穴埋土より少量出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＢ457掘立柱建物（Fig.64）

ＢＯ・ＢＰ－32～34グリッドで検出した。検出面の標高は5.7～5.8m。ＳＢ458と重複するがその先後関係は不明。３×１間の東西棟の建物で、桁行6.5m、梁行3.4m、床面積22.1m²の規模を有する。桁行をN-86°-Eにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形～楕円形に近く、その規模は長軸0.3～0.6m、深さ0.4～0.65m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色を基調としていた。遺物は柱穴埋土より白磁碗、瓦器擂鉢等がビニール１袋程度出土している。

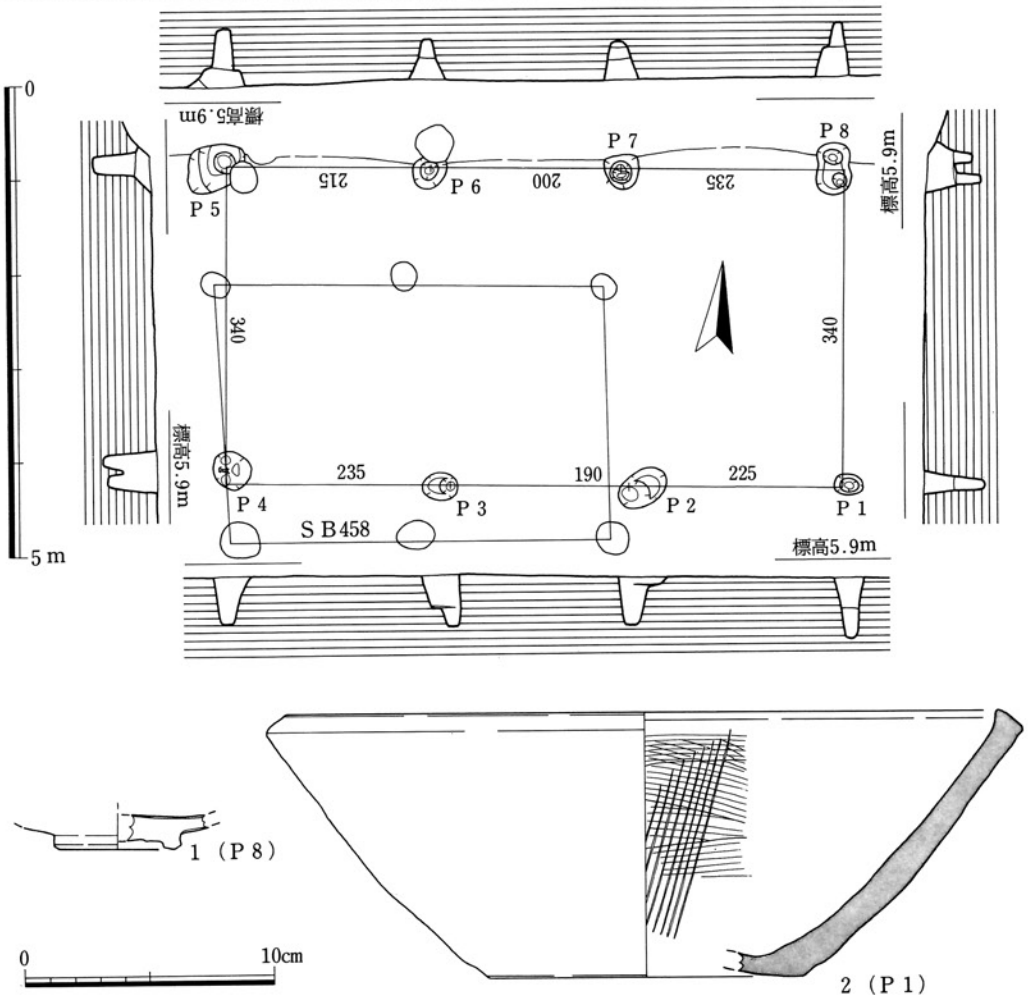


Fig.64　ＳＢ457掘立柱建物及び出土遺物実測図（1/80・1/3）

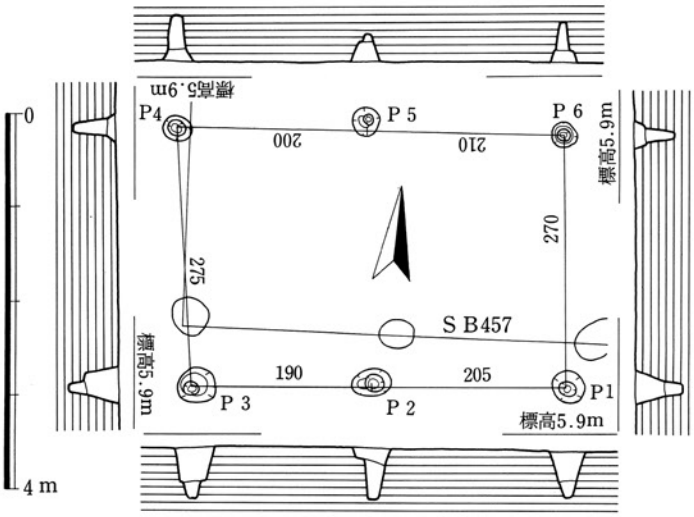


Fig.65　ＳＢ458掘立柱建物実測図（1/80）

出土遺物（Fig.64）

２はＰ１、１はＰ８出土

白磁（１）　碗の底部で、復元高台径4.6cm。淡灰白色の釉を施す。

瓦器（２）　擂鉢で、８条１単位の擂目を施す。復元口径28.2cm、同底径12.3cm、器高10.5cm。口縁部横ナデ、内面横方向のハケ目、外面ナデ調整。灰褐色を呈する。

ＳＢ458掘立柱建物（Fig.65）

ＢＰ－32･33グリッドで検出した。検出面の標高は5.7～5.8m。ＳＢ457と重複するがその先後関係は不明。２×１間の東西棟の建物で、桁行3.95～4.1m、梁行2.7～2.75m、床面積11.0㎡の規模を有する。桁行をＮ-85°-Ｅにとる。柱間は図示したとおり。柱穴掘方は円形に近く、その規模は径0.3～0.4m、深さ0.3～0.5m程度である。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調としていた。遺物は柱穴埋土よりわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

(2) 井　　戸

４基検出している。ほとんどが、検出面より１m前後で湧水点に達しているようである。

ＳＥ404井戸（Fig.66）

ＢＱ－36グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。古墳時代のＳＤ401を切る。平面形は長軸1.85m、短軸1.65mのやや歪な楕円形を呈し、深さは0.9m前後である。断面形は逆台形に近く、壁面は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦で、埋土は灰褐色砂質土～黒灰色粘質土で６層に大別できる。いずれも自然堆積によるものと判断される。掘削中にいくらかの木材が出土していることより、もともと井戸枠が存在していたことが考えられる。また、底付近より投棄された径10～20cm大の10数個の礫と伴に青磁碗、土師器坏等がビニール１袋程度出土している。

出土遺物（Fig.67）

土師器（１・２）　いずれも底部糸切りの小皿。内底面ナデ調整。１は復元底径7.0cm。明褐色。２は復元底径8.2cm。褐色。

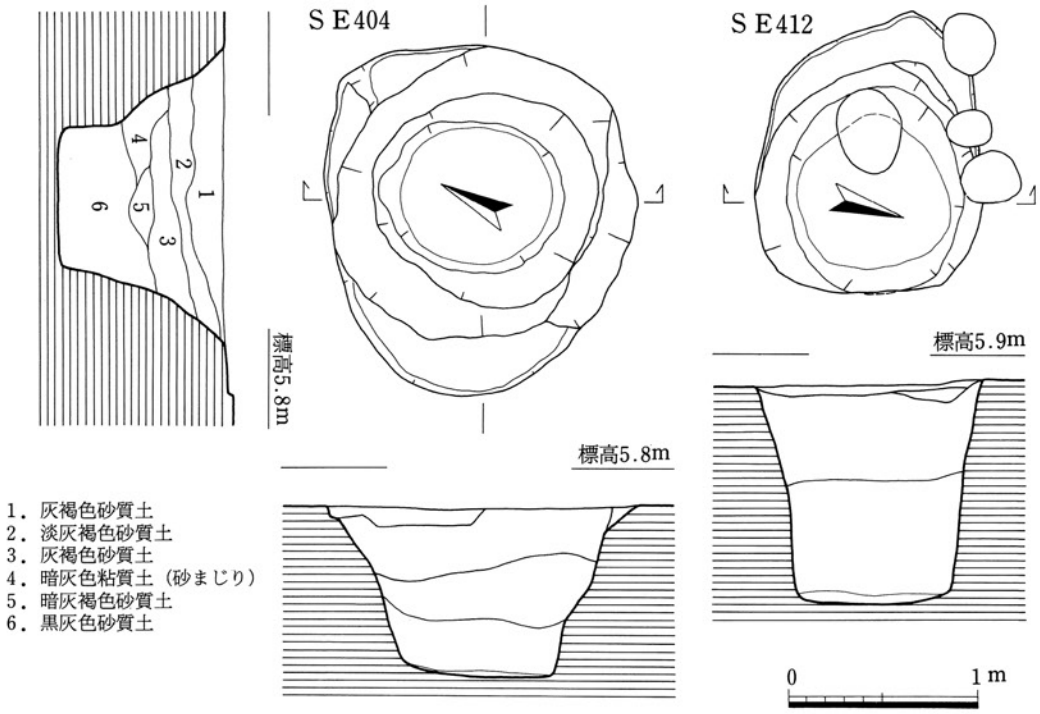


Fig.66　ＳＥ404・412井戸実測図（1/40）

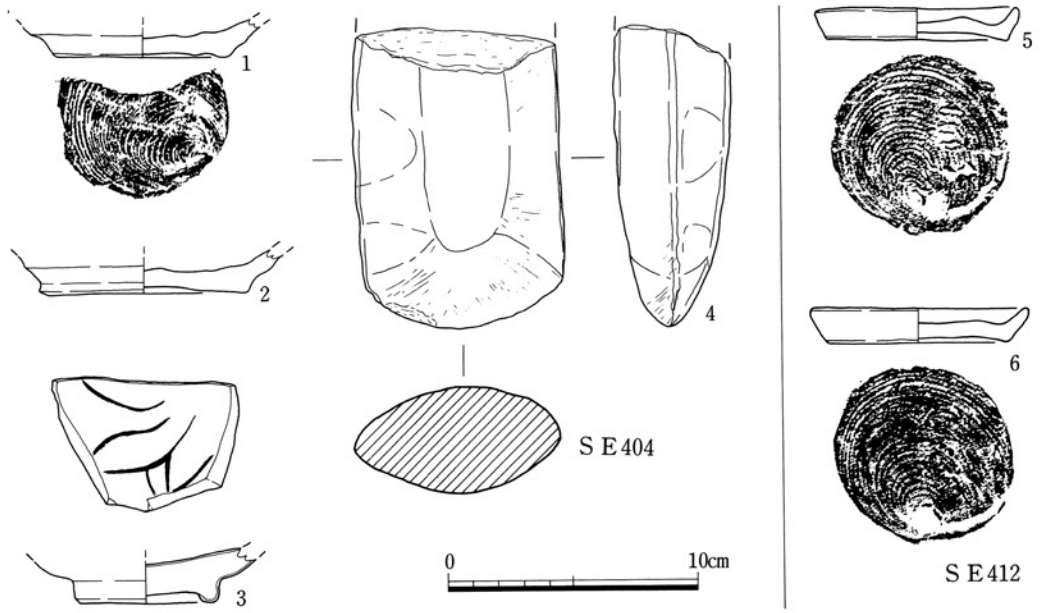


Fig.67　ＳＥ404・412出土遺物実測図（1/3）

青磁（３）　龍泉窯系碗の底部破片。復元高台径5.6cm。青灰色の釉を施す。

石器（４）　体部上半を欠損する石斧で、流れ込みと思われる。最大幅8.1cmで、比較的よく研磨される。

ＳＥ412井戸（Fig.66）

ＢＲ・ＢＳ－33グリッドで検出した。検出面の標高は5.7～5.8m。ＳＢ447Ｐ９の他、３基のピットに切られる。平面形は長軸1.4m、短軸1.2mのやや歪な楕円形を呈し、深さは1.15m前後である。底面は浅いレンズ状を呈し、壁面はきつく立ち上がる。埋土は上層が暗灰褐色土～暗褐色土、下層が黒褐色土～黒色土であった。遺物は埋土中よりほぼ完形に近い土師器小皿２点の他、少量出土している。

出土遺物（Fig.67）

土師器（５・６）　いずれも底部糸切りの小皿で、ほぼ完形に近い。体部内外面横ナデ、内底面ナデ調整を行う。５は口径7.7cm、底径7.2cm、器高1.3cm。褐色。６は口径8.4cm、底径7.0cm、器高1.4cm。淡褐色。

ＳＥ413井戸（Fig.68）

ＢＱ－31・32グリッドで検出した。検出面の標高は5.7～5.8m。ＳＤ426と切り合うがその先後関係は不明。平面形はほぼ径1.6m程の円形を呈し、深さは1.1m前後である。２段掘り状を呈し、壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土は暗灰褐色土～黒褐色土で、６～８層は井戸枠を固定するために互層に突き固めていた。また１・２層からは井戸を破棄する際に投棄されたと思われる径10～50cm大の礫が20数個出土した。検出した井戸枠は、平均幅10cm程の板材を17枚弧を描

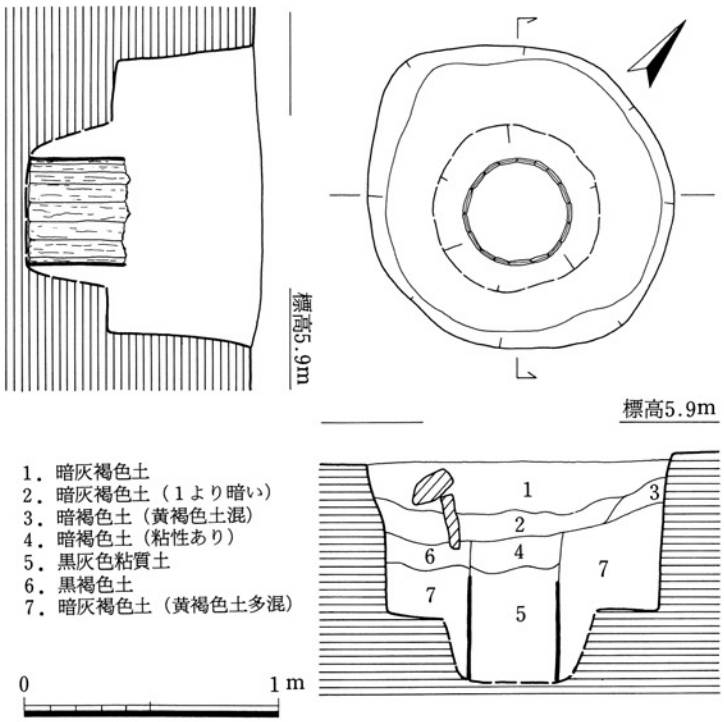


Fig.68　ＳＥ413井戸実測図（1/40）

くように並べ、土圧によって隙間を塞ぐように固定されていた。遺物は埋土中より少量出土したが、図示できたのは砥石1点のみであった。

出土遺物（Fig.69）

石器（1）　砥石で、最大長3.2cm、最大幅3.2cm。3面を使用する。砂岩系。

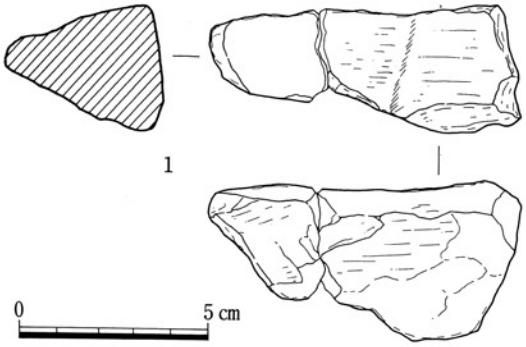


Fig.69　ＳＥ413出土遺物実測図（1/2）

ＳＥ427井戸（Fig.70）

ＢＱ－31グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m。遺構の西側の一部は調査区外にある。特に切り合い関係はないが、ＳＥ413との間に浅く暗灰褐色土が堆積していた。平面形は径1.3m程度の円形を呈すものと思われる。深さ0.75mで、底面は浅いレンズ状を呈し、壁面はきつく立ち上がる。埋土は暗灰褐色土を基調としていた。遺物は埋土中よりわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

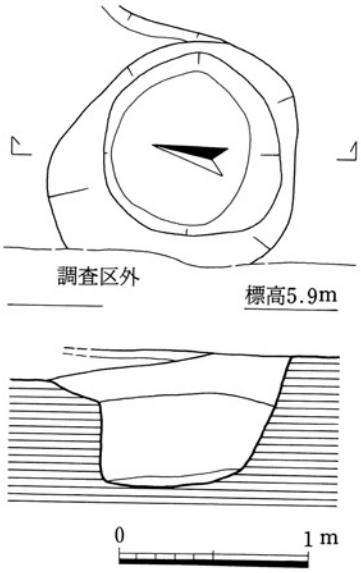


Fig.70　ＳＥ427井戸実測図(1/40)

(3) 土　　壙

全体で20基を検出しているが、ここでは検出状況の良好な8基について報告する。特にＳＫ403・422は、佐賀市内の泉三本栗・大日・立野・原ノ町・東高田の各遺跡で検出されている大型土壙と類似する点がある。

ＳＫ403土壙（Fig.71）

ＢＰ・ＢＱ－34グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。ＳＢ450と切り合うがその先後関係は不明。平面形は長軸3.55m、短軸2.0m程度の隅丸長方形を呈し、深さ0.5m前後である。長軸を南北方向にとる。底面は東南隅に低いテラスを形成する他は、概ね浅い船底状を呈する。壁面は角度をもって立ち上がる。埋土は暗灰褐色土～黒褐色土の5層に大別でき、いずれも自然堆積によるものと判断される。北隅の底面より15cm程浮いた状態で完形の土師器坏を検出した。中に小石を入れた状態で出土しており、何らかの祭祀行為が行なわれたことが考えられる。遺物はこの他、埋土中より土師器小皿等が少量出土している。

出土遺物（Fig.72）

土師器（1・2）　1は底部糸切りの小皿。ほぼ完形で、口径8.0cm、底径6.9cm、器高1.5cm。

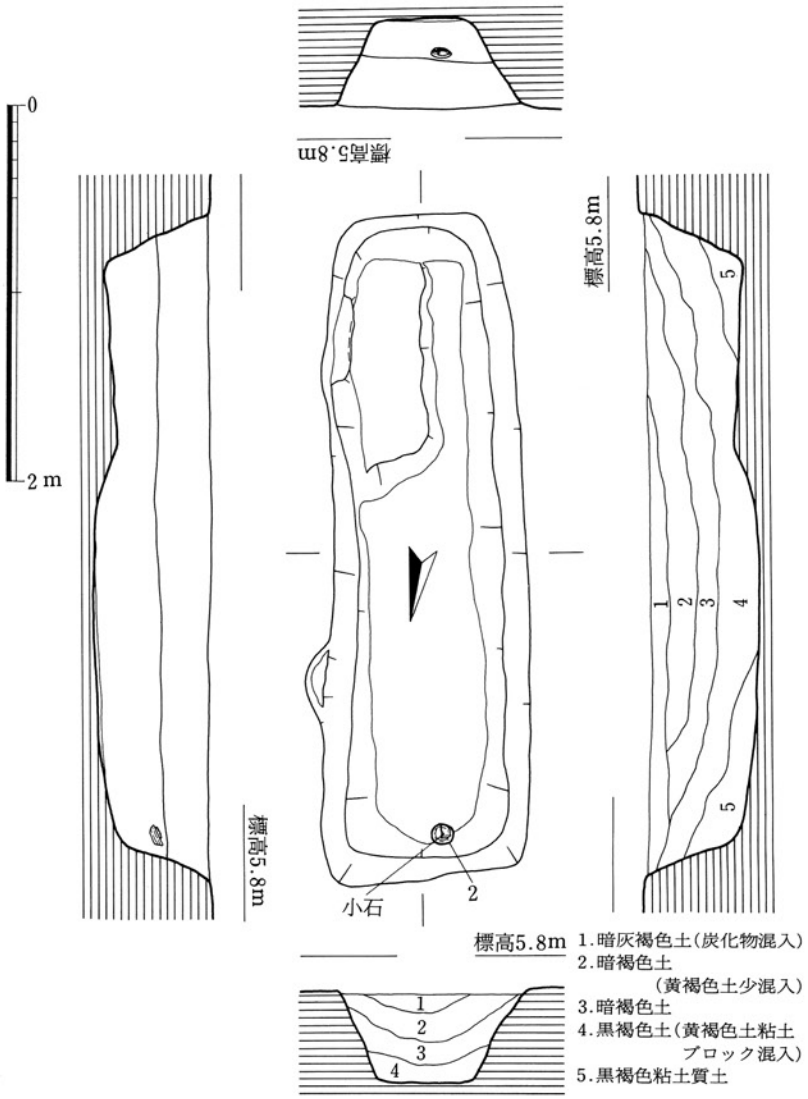


Fig.71　ＳＫ403土壙実測図（1/40）

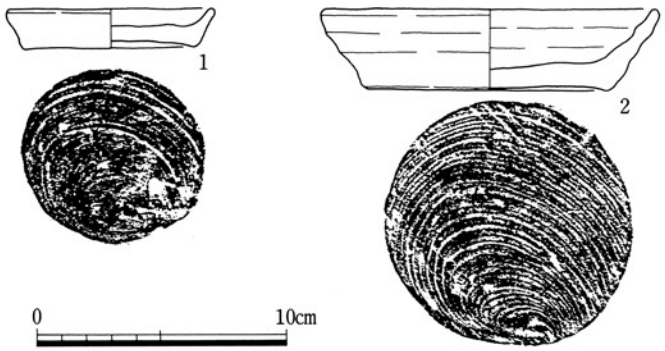


Fig.72　ＳＫ403出土遺物実測図（1/3）

体部内外面横ナデ、内底面ナデ調整。淡褐色。２は底部糸切りの坏。ほぼ完形で、口径13.0cm、底径9.8cm、器高3.2cm。体部内外面横ナデ、内底面ナデ調整。明褐色。

ＳＫ405土壙（Fig.73）

ＢＱ－37グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。ＳＫ408を切り、ＳＢ459に切られる。平面形は長軸1.7m、短軸1.4m程の楕円形を呈し、深さは0.4m程度である。底面は概ね平坦で、壁面はきつく立ち上がる。埋土は暗灰褐色土の単層であった。遺物は埋土中よりわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＫ408土壙（Fig.73）

ＢＱ－38グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。ＳＫ405に切られ、ＳＫ409と切り合

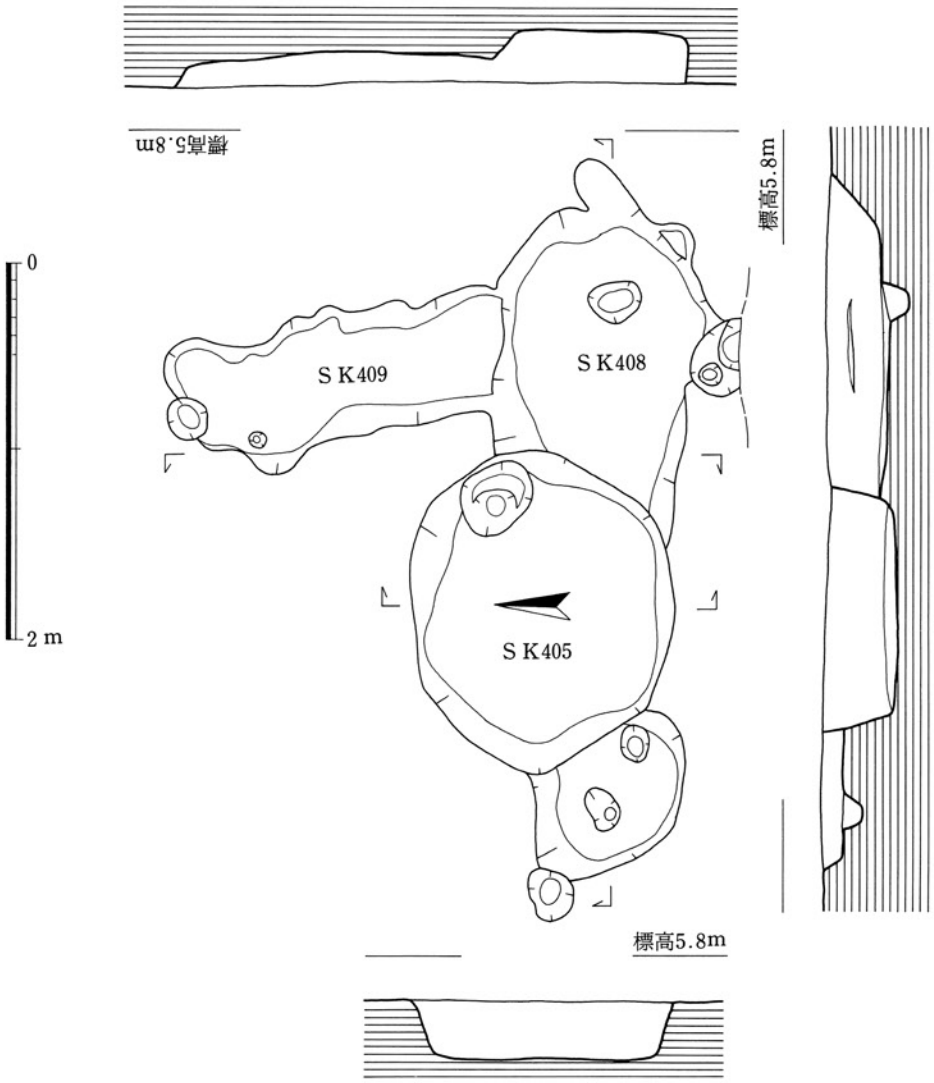


Fig.73　ＳＫ405・408・409土壙実測図（1/40）

うがその先後関係は不明。さらにＳＢ459と重複関係にある。遺構の全貌は他遺構と切り合うため知り得ない。深さ0.35m程度で、底面は概ね平坦。壁面は角度をもって立ち上がる。また底面の中央よりやや東寄りには、径0.2m程の小ピットが存在する。埋土は暗灰褐色土の単層であった。遺物は埋土中よりわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＫ409土壙（Fig.73）

ＢＱ－38グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。ＳＢ459と重複し、ＳＫ408と切り合うがその先後関係は不明。平面形は切り合いのため知り得ないが、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。底面は概ね平坦で、壁面は角度をもって立ち上がる。埋土は暗灰褐色土の単層であった。遺物は埋土中よりわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＫ410土壙（Fig.74）

ＢＱ－38グリッドで検出した。検出面の標高は5.5～5.6m。特に他遺構との切り合い関係は認められない。平面形は長軸2.15m、短軸1.1m程度の不定形を呈する。深さは0.15m程度。底面はいくつかの小ピットが存在するものの概ね平坦で、壁面は角度をもって立ち上がる。埋土は暗灰褐色土の単層であった。遺物は埋土中より土師器坏等が少量出土している。

出土遺物（Fig.75）

土師器（１）　底部糸切りの坏で、復元口径13.6cm、同底径11.0cm、器高2.8cm。体部内外面横ナデ、内底面ナデ調整を行う。明褐色を呈する。

ＳＫ422土壙（Fig.76）

ＢＴ－35グリッドで検出した。検出面の標高は5.5～5.6m。ＳＫ423と切り合うがその先後関係は不明。平面形は南側の一部が調査区外にあり知り得ないが、恐らく長軸3.1＋αm、短軸2.4m程度の隅丸長方形を呈するものと思われる。長軸を南北方向にとる。深さは最深部で0.75mを測る。底面はやや中央部が盛

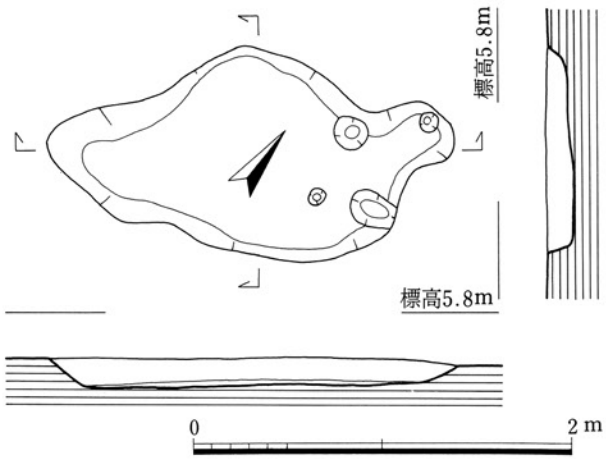


Fig.74　ＳＫ410土壙実測図（1/40）

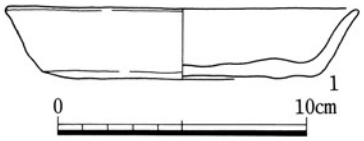


Fig.75　ＳＫ410出土遺物実測図(1/3)

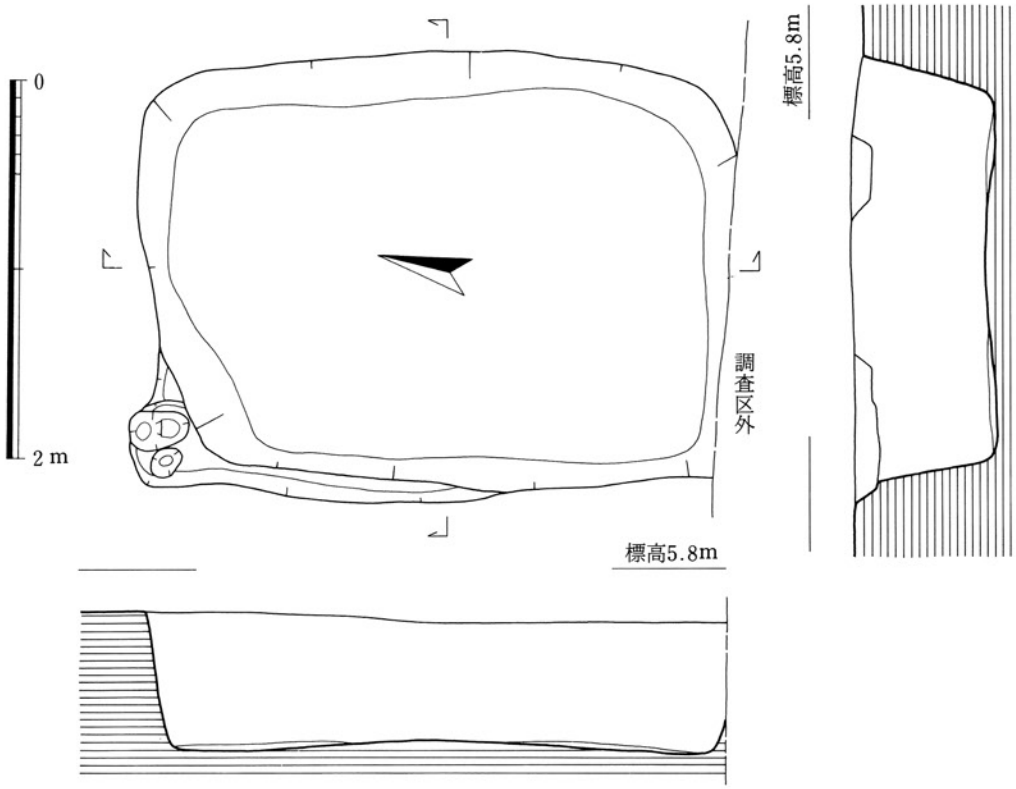


Fig.76　ＳＫ422土壙実測図（1/40）

り上がるものの概ね平坦で、壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土は暗灰褐色土と黄褐色土（地山土）の混合土で、その状態より人工的に埋められた可能性がある。遺物は埋土中よりわずかに出土しているが、図示できるものはなかった。

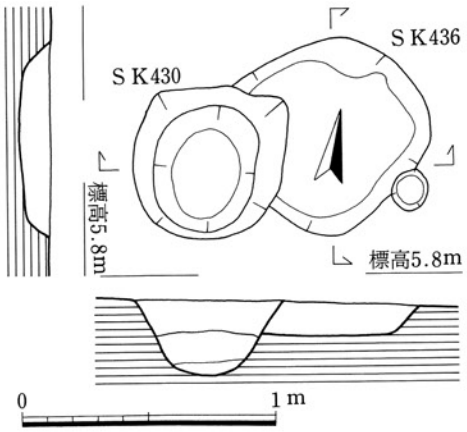


Fig.77　ＳＫ430・436土壙実測図（1/40）

ＳＫ430土壙（Fig.77）

ＢＯ－34グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。ＳＫ436と切り合い関係にあり本土壙が後出する。平面形は径0.8m程の円形に近く、深さは0.4m前後である。底面はレンズ状を呈し、壁面は角度をもって立ち上がる。埋土は暗灰褐色土の単層であった。遺物は埋土中よりわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

ＳＫ436土壙（Fig.77）

ＢＯ－34グリッドで検出した。検出面の標高は5.6～5.7m。ＳＫ430と切り合い関係にあり本土壙が先行する。平面形はＳＫ430に切られているため知り得ないが、深さは0.2m程度である。底面は概ね平坦で、壁面は角度をもって立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層で、他遺構の埋土と比較すると中世以前に遡る可能性もある。遺物は全く出土していない。

(4) 溝

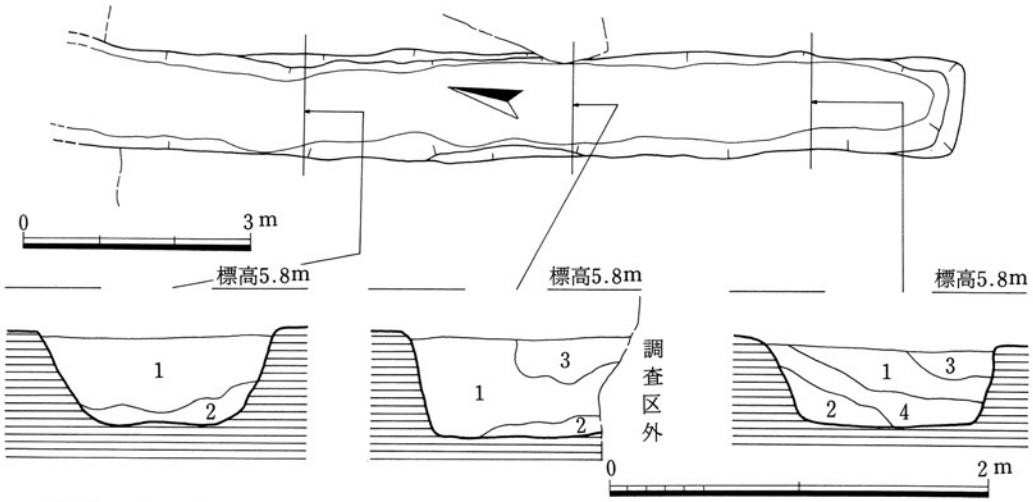
調査区の東側で２条検出している。検出部分が短く明確ではないが、掘立柱建物群に平行して走るため集落を区画する溝になる可能性がある。

ＳＤ414溝（Fig.78）

ＢＯ～ＢＱ－36・37グリッドで検出した。検出面の標高は5.6m。北側はカクランに削られ、古墳時代のＳＤ401を切る。南北方向に検出し、ほぼ掘立柱建物群と平行して走る。幅1.3～1.4m、深さ0.4～0.6m程度で、断面形は逆台形に近い。検出長は12m弱で、ＢＱグリッド付近で終息しており、本溝が区画溝であるとすれば陸橋部分にあたる可能性がある。埋土は暗褐色土～黒褐色土を基調とするが、黄褐色土（地山土）が多量に混入し、さらに固く締まっているため人工的に埋められた可能性が高い。遺物は埋土中よりわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

ＳＤ433溝（Fig.79）

ＢＰ・ＢＱ－38・39グリッドで検出した。検出面の標高は5.4～5.5m。ＳＫ432と切り合うが



1．暗灰褐色土（黄褐色粘質土多混）　3．暗褐色土（黄褐色粘質土多混）
2．黒褐色土（青灰色粘土混）　4．黒褐色土（黄褐色土多混）

Fig.78　ＳＤ414溝及び土層断面実測図（1/100・1/40）

その先後関係は不明。南北方向に検出し、ＳＤ414及び掘立柱建物群と平行して走る。幅0.4～0.6m、深さ0.2m前後で断面形はＵ字形に近く、検出長は4.7m程度である。ＳＤ414同様、区画溝になる可能性がある。埋土は暗灰褐色土の単層であった。遺物は埋土中よりわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

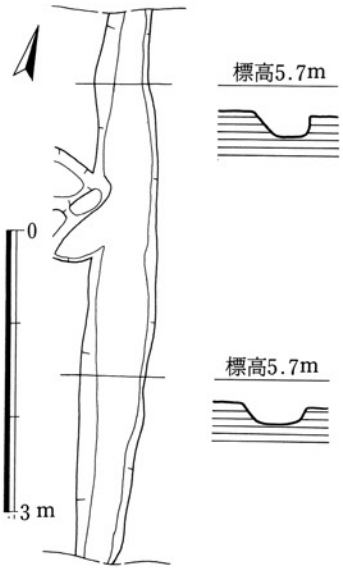


Fig.79　ＳＤ433溝実測図（1/80）

(5) 不明遺構

ＳＸ402不明遺構（Fig.40）

ＢＯ～ＢＲ－34～36グリッドで検出した。検出面の標高は5.7m前後。古墳時代のＳＤ401及びＳＢ448・449、ＳＫ437と切り合い関係にありいずれも本遺構が後出する。現状ではやや歪な浅い溝状を呈する。幅1.0～3.0m、深さ0.1～0.2m程度で、底面は凸凹が著しい。埋土は暗灰褐色土の淡層であった。現状ではどのような性格の遺構になるのかは判断できない。遺物は埋土中より少量出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＸ438不明遺構（Fig.80）

ＢＰ・ＢＱ－35グリッドで検出した。検出面の標高は5.5～5.6m。ちょうど掘立柱建物群が存在しない箇所にあり、特に他遺構との切り合いは認められない。平面形は長軸1.25m、短軸0.75m程度の瓢箪形を呈し、深さ0.15mを測る。中央よりやや北側に寄せて長さ70～80cm前後の石材３個を配置し、中央より南側には炭及び灰が堆積していた。このような状況より本遺構は炉ではないかと考えた。つまり石材を配置した部分で煮炊きをし、南側の灰が堆積する箇所がかき出し部分と考えられないだろうか。ただ石材自体に焼成を受けた痕跡が認められないし、焼成により赤く硬化した面が検出できなかったため即断はできない。ここではその可能性のみを指摘しておく。埋土は暗灰褐色土を基調としていた。遺物

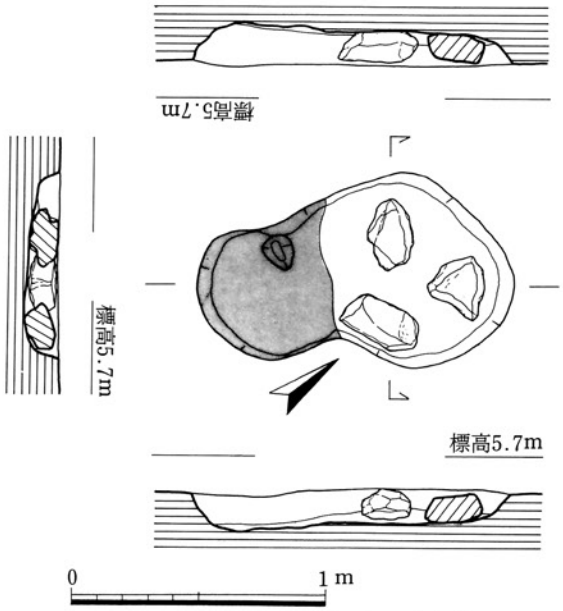


Fig.80　ＳＸ438不明遺構実測図（1/30）

は埋土中より土師器細片が4～5点出土したが、図示できるものはなかった。

⑹ その他の出土遺物

小穴出土遺物（Fig.81）

1－P4225、2－P4106、3－P4262、4－P4106、5－P4124、6－P4108、7－P4130、

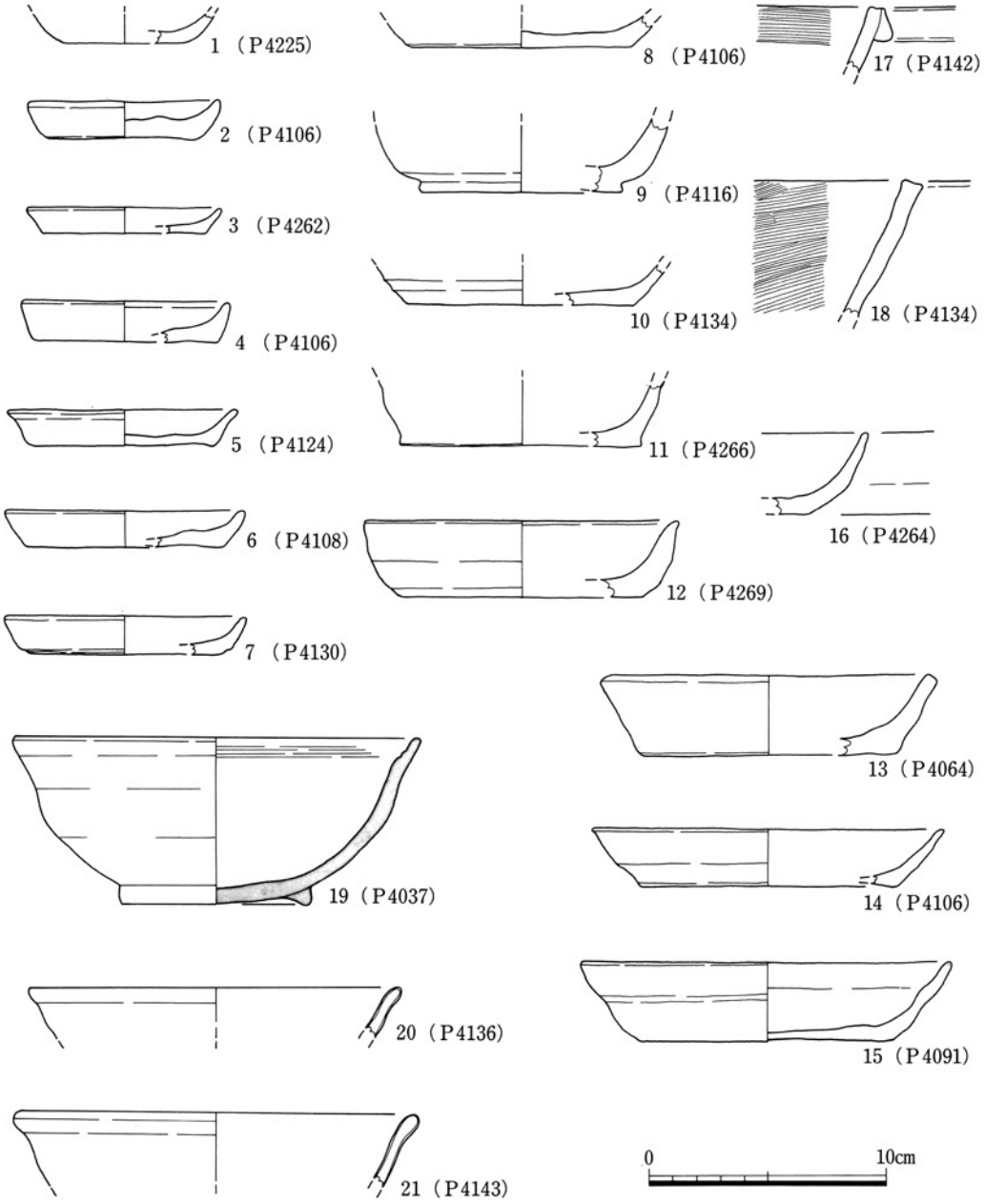


Fig.81　小穴出土遺物実測図（1/3）

8－P4106、9－P4116、10－P4134、11－P4266、12－P4269、13－P4064、14－P4106、15－P4091、16－P4264、17－P4142、18－P4134、19－P4037、20－P4136、21－P4143出土。

土師器（1～18）　1～7は小皿。1は復元底径4.8cm。褐色。2は完存品で、口径7.8cm、底径6.0cm、器高1.5cm。底部糸切りで、体部内外面横ナデ、内底面ナデ調整。褐色。3～7は復元口径7.9～9.8cm、同底径6.8～8.0cm、器高1.1～1.7cm。いずれも糸切り底で、基本的に横ナデ調整を行う。淡褐色を呈する。6は体部外面から内底面にかけて黒斑が認められる。8～16は坏。復元口径13.0～15.0cm、同底径10.0～10.6cm、器高2.4～3.3cm。8は底部ヘラ切りで板状圧痕が残る。11・12・14～16は底部糸切り。基本的に横ナデ調整を行い、明褐色～茶褐色を呈する。17・18は鍋の口縁部破片。17は内面横方向のハケ目、外面横ナデ調整で、褐色を呈する。18は内面横方向のハケ目、外面は煤付着のため調整不明瞭。褐色を呈する。

瓦器（19）　碗で全体に磨耗が著しい。口径16.5cm、高台径7.6cm、器高7.0cm。口縁部内面には2条の沈線を巡らす。灰黒色～白褐色を呈する。

青磁（20）　碗の口縁部破片。復元口径15.1cm。淡緑色の釉を施す。

白磁（21）　碗の口縁部破片。復元口径16.4cm。

表土下層出土遺物（Fig.82）

土師器（1～9）　1・2は底部糸切りの小皿。体部内外面横ナデ、内底面ナデ調整。1は復元底径5.2cm。茶褐色。2は外底面に板状圧痕が認められる。口径8.0cm、底径6.2cm、器高1.8cm。茶褐色。3～6は小型の坏で、基本的に底部糸切りである。口径5.8～7.1cm、底径3.3～4.7cm、器高1.9～2.3cm。内外面横ナデ調整で、淡黄褐色を呈する。5は外底面に板状圧痕が認められる。7は鍋で、復元口径23.8cm。外面ナデ、内面横方向のハケ目調整。外面には煤が付着する。褐色を呈する。

須恵器（8）　擂鉢で、復元口径25.9cm。7条1単位の擂目を施す。外面ナデ、内面横方向のハケ目調整。淡灰褐色を呈する。

瓦（9）　残存する部分で、最大長9.6cm、最大幅8.7cm。端部はヘラで仕上げる。暗灰色を呈する。

陶器（10）　肥前陶器（唐津焼）。碗の底部破片と思われ、復元高台径7.4cm。淡緑色の釉を施す。

磁器（11）　皿の口縁部破片で、復元口径9.8cm。淡灰色の釉を施す。

白磁（12）　12は碗の口縁部破片で、復元口径16.3cm。やや青みがかり淡緑色を呈する。

ガラス製品（13）　復元径0.5cmの小玉で、スカイブルーを呈する。

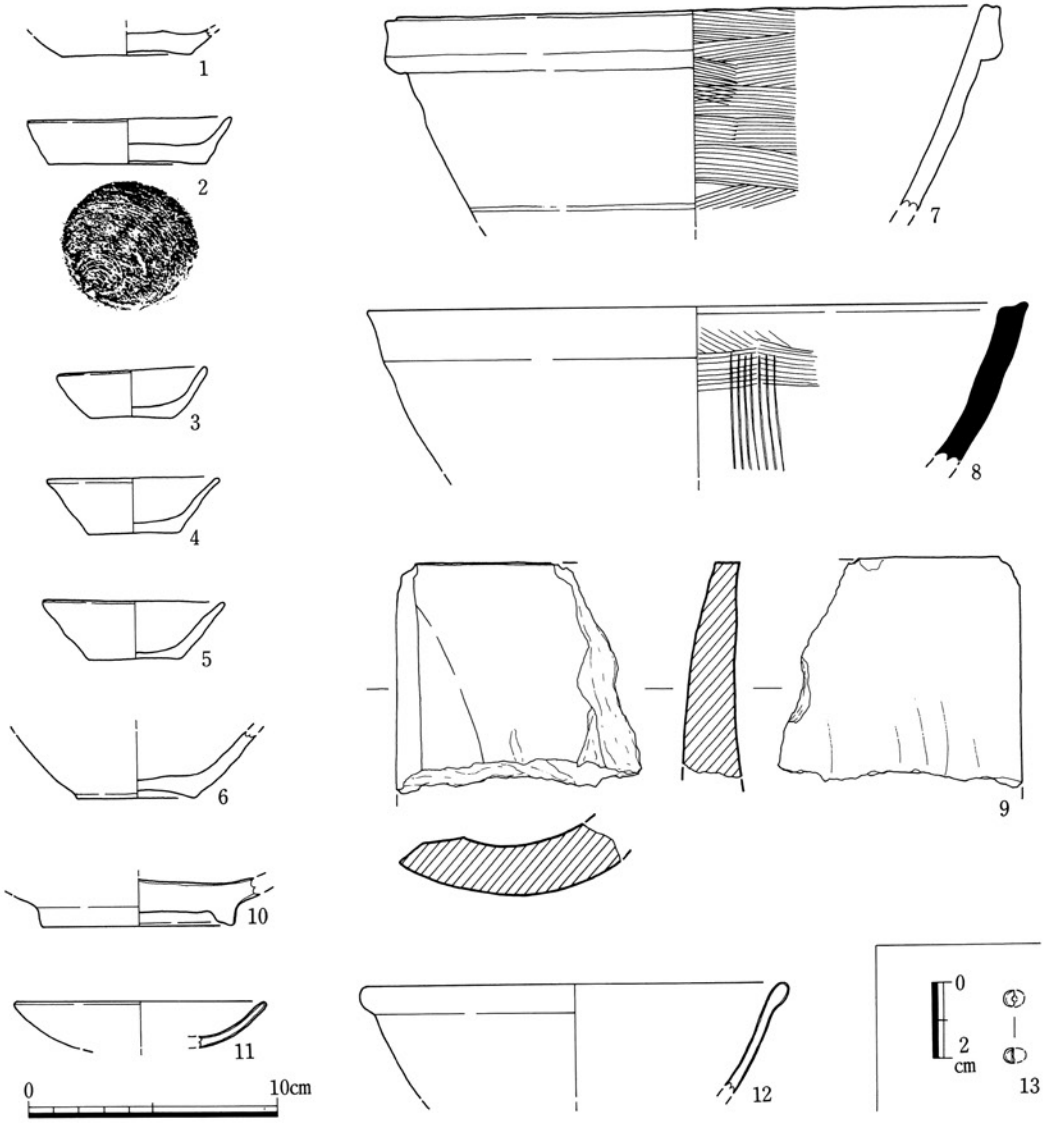


Fig.82　表土下層出土遺物実測図（1/3・1/2）

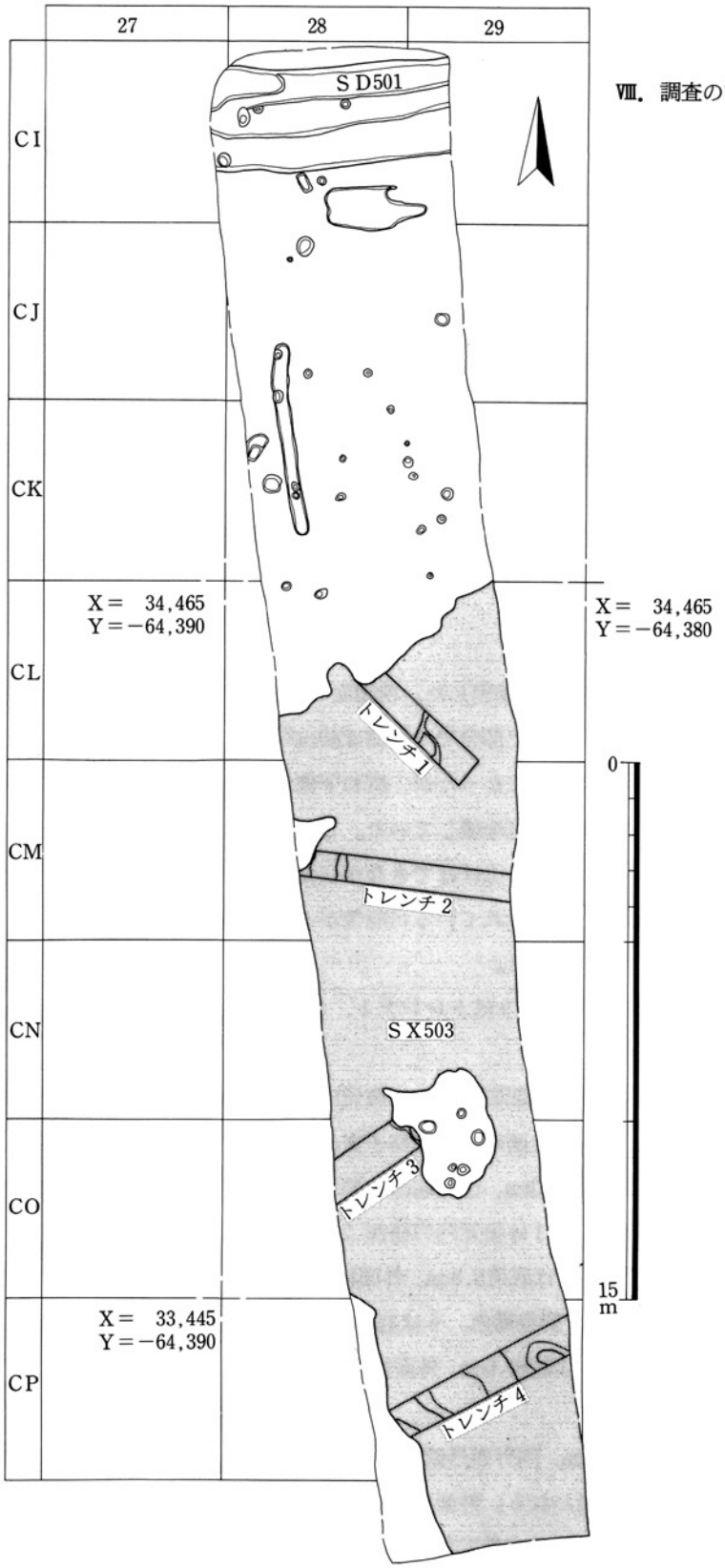


Fig.83　千布二本黒木遺跡5区遺構配置図（1/200）

Ⅷ. 調 査 の 記 録 －５区－

５区は水田下にあり、約20cmの現耕作土直下に黄褐色の基盤面を検出している。

調査区の狭小さもあって検出遺構は少なく、弥生時代の河川跡と近世の溝１条を検出したのみである。

１．弥生時代の遺構と遺物

(1) 河川跡

調査区の南半で検出している。時間的な制約もあり、４本のトレンチ調査に止まった。他には同時期の遺構は検出していない。

ＳＸ503河川跡（Fig.83）

ＣＬ～ＣＱ－28･29グリッドで検出した。検出面の標高は5.2m前後。特に他遺構との切り合い関係は認められない。掘削した部分での最深は80cm程度である。埋土は壁面の崩落と激しい湧水のために詳細な観察はできなかったが、概ね下部に黒色粘質土が堆積し、その上に淡褐色を基本とした砂層が50～80cm程度堆積していた。このような土層の状況よりかなりの流水があったものと考えられる。また取り上げはできなかったが杭状の木製品を検出しており、自然流路に部分的に人工的な手が加えられている可能性がある。遺物は埋土中より弥生土器、石器等がビニール３袋程度出土している。

出土遺物（Fig.84）　６・８・９はトレンチ１、２・４はトレンチ２、７はトレンチ３、１・３・５はトレンチ４出土。

甕（１～６）　１～３は口縁部破片。１は復元内口径10.4cm、同外口径14.2cm。胴部上位に１条の突帯を巡らす。口縁部上面に沈線で格子文を施す。内外面横ナデ調整。淡褐色。２は復元内口径18.0cm、同外口径24.2cm。口縁端部に刻目を施し、胴部上位に２条の突帯を巡らす。内外面横ナデ調整。淡褐色。３は復元内口径26.2cm、同外口径33.0cm。内外面横ナデ調整。淡褐色。４～６は底部破片。４は底径5.8cm。外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整。淡褐色。５は復元底径6.4cm。内外面ナデ調整褐色。６は底径7.2cm。内外面ナデ調整。褐色。

壺（７）　底部破片。復元底径9.6cm。外面横方向のヘラミガキ、内面ナデ調整。外面暗褐色、内面褐色を呈する。

鉢（８）　復元口径19.4cm。内外面丹塗りの痕跡が認められる。磨耗のため調整不明瞭だが、内外面ヘラミガキ調整と思われる。外面暗褐色、内面褐色を呈する。

石器（９）　石槍か。完存品で最大長4.2cm、最大幅0.9cm。サヌカイト製。

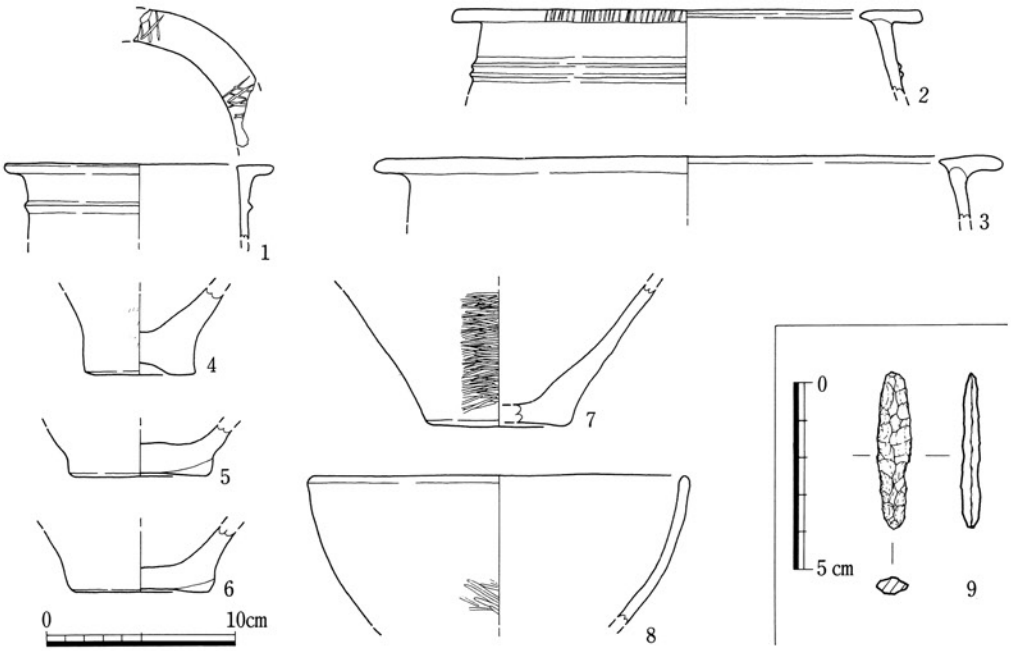


Fig.84　ＳＸ503出土遺物実瀬図（1/4・1/2）

2．近世の遺構と遺物

(1) 溝

ＳＤ501溝（Fig.85）

ＣＩ－27～29グリッドで検出した。検出面の標高は5.3～5.2m。東西方向に検出しているが、調査区が狭小なためどのような性格の溝になるかは不明。幅2.7～2.8m、深さ0.4m程度で 、南側は３段掘り状を呈する。埋土は灰褐色を基調としていた。遺物は埋土中より磁器碗、陶器擂鉢、石器等がビニール１袋程度出土している。

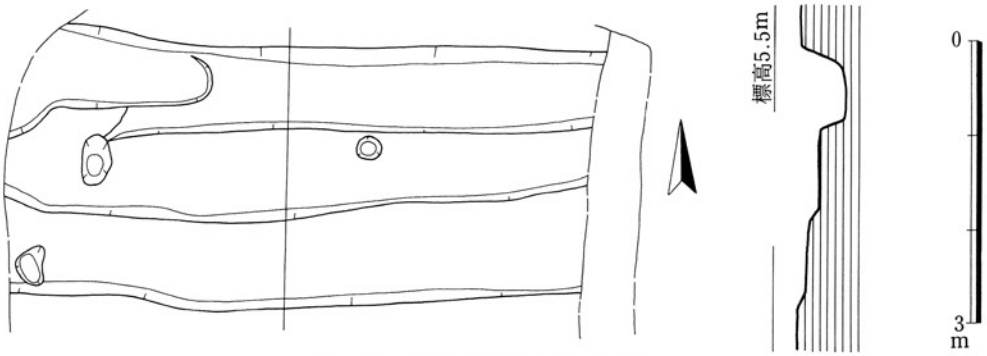


Fig.85　ＳＤ501溝実測図（1/80）

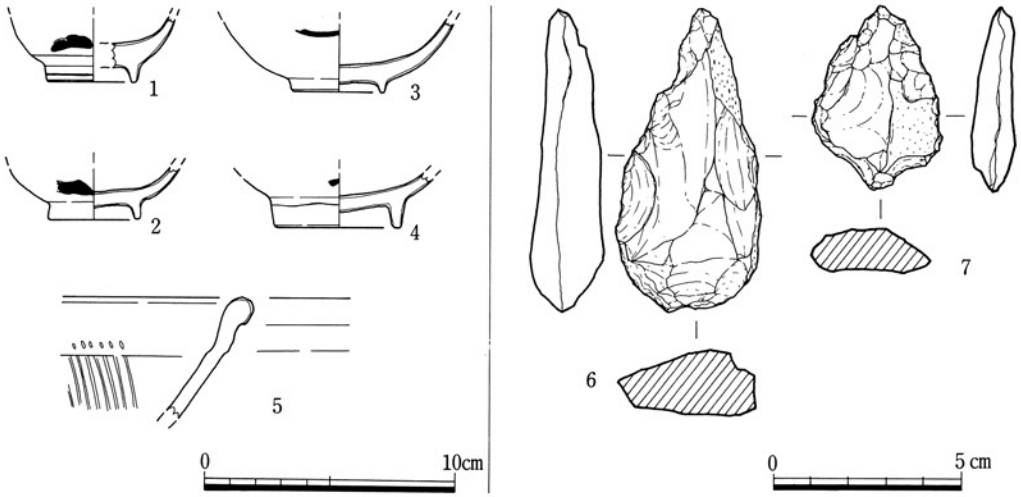


Fig.86　ＳＤ501出土遺物実測図（1/3・1/2）

出土遺物（Fig.86）

磁器（１～４）　いずれも染付碗の底部破片。復元高台径3.4～4.8cm。絵柄は青色で描かれる。１は復元高台径3.4cm、２は復元高台径3.6cm、３は復元高台径3.6cm、４は復元高台径3.6cm。

陶器（５）　擂鉢の口縁部細片。口縁部周辺のみ釉を施す。暗茶褐色を呈する。

石器（７・８）　いずれもサヌカイト製の尖頭器。６は最大長7.9cm、最大幅3.8cm。７は有舌で最大長4.9cm、最大幅3.3cm。

Ⅸ．小　結

今回の調査で千布二本黒木遺跡は、ほぼ弥生時代と中世から近世の２時期に営まれた集落跡であることが明らかになった。この他にも縄文時代、古墳時代の遺構・遺物を検出しているが、いずれも断片的な資料で、遺跡の主体は上記の２時期であると考えてよい。なお今回の調査区は狭小な５地区に分割されており、これが遺跡全体の様相を明らかにするものではないことを付記しておく。

弥生時代の遺構は１・２区に集中しており、掘立柱建物２棟、土壙７基、溝４条、不明遺構等を検出した。いずれも弥生時代中期の所産と考えられ、近接する久富遺跡、東千布遺跡からも同時期の遺構が確認されており何らかの関連があったものと考えられる。特に東千布遺跡は甕棺墓群であり、当時の墓地と集落の関係を考える上で興味深い。またちょうど巨勢川の対岸には弥生時代後期の拠点集落と考えられる村徳永遺跡が存在する。特筆すべき遺構としては、調査区が狭小なためにその性格が明らかではないが、多数の弥生土器が出土したＳＤ201・203が挙げられる。両者とも幅3.0m前後、断面逆台形で大量の遺物が出土していることより、集落を区画する環濠になる可能性がある。ただＳＤ203よりＳＤ201の方が若干先行していたようで、２重の環濠になる可能性は薄い。地理的要因から勘案すれば集落の中心はこれらの溝より西側に存在するものと考えられる。これは推測の域を脱しないが、今回検出した集落の一部が環濠を伴うような集落であったとすれば、久富遺跡や東千布遺跡で確認された遺構群などとを考え合わせ、村徳永遺跡を遡る時期の拠点的な集落がこの地に存在していた可能性がある。

中世～近世にかけての遺構は３～５区で検出しているが、特に４区ではの多数の掘立柱建物を確認し、屋敷地の一部であることが明らかになった。検出した遺構は掘立柱建物24棟、井戸８基、土壙27基、溝８条等で、24棟の掘立柱建物のうち19棟が４区に集中していた。近隣では平成５年度に調査された友貞遺跡で中世の屋敷地の一部が確認され、東千布遺跡では近世の集落の一部が調査されている。

今回の調査で特筆すべきものは４区で確認された屋敷地の一部であろう。狭小な調査区に多数検出された掘立柱建物から当時の様相を窺い知ることができる。近年の調査でこの時期の屋敷地は区画溝を伴っている例が多いのだが、今回の調査では調査面積の兼合いもあって明確な区画溝は確認できていない。ただＳＤ414・433は規模的に屋敷地全体を区画するような溝ではないが、掘立柱建物の方位を意識しており、屋敷地内部の小区画溝になる可能性は高い。掘立柱建物については、３×２間もしくは３×１間を基調とし、その検出状況から２～３回程度の立て替えが考えられた。建物の主軸方位はほとんど等しく、ＳＢ450のみ南北棟で、他はすべて東西棟である。中でも特にＳＢ444は床面積45.6㎡と大型で、何か特別の役割をもった建物であ

ったことが考えられる。調査区の狭小さに加え出土遺物がわずかであったため、他遺構との有機的な関連や掘立柱建物自体の時期的な共存関係等を明らかにすることができなかった。

またＳＫ403•422土壙であるが、これは形態的類似より大型土壙[(1)]の一種ではないかと考える。この大型土壙は佐賀市域ではすでに泉三本栗遺跡、大日遺跡、立野遺跡、原ノ町遺跡、東高田遺跡で検出されてはいるが、その性格については未だ不明な点が多い。立野遺跡では畑跡が伴っていたため用水路と接続した溜め舛としての機能が考えられているが、原ノ町遺跡では８基もの大型土壙がほぼ等間隔に並んだように存在しており何か祭祀的な様相が窺える。今回検出したＳＫ403・422は掘立柱建物群の中に存在しており、立野遺跡の例のように畑に伴った溜め舛とは考えづらい。ＳＫ403などは遺物の出土状況（土師器坏に小石を入れ投棄されている）より、どちらかといえば原ノ町遺跡の例のように祭祀的なものを考えさせられる。この種の土壙は形状こそ類似してはいるが、その使用目的は必ずしも同一ではなく、大型土壙という名称の引用についても今後検討が必要であろう。

検出した多数の遺構群の割りに出土した遺物の量が少なく、そのため時期を限定するのが困難であるが、ほとんど瓦器椀が見受けられないことなどから、ほぼ13世紀後半を中心に営まれた屋敷地と考えられる。

調査地周辺には「久富」•「友貞」•「東名」といった中世的な地名呼称が残っていて、この地域には広い範囲で中世の荘園村落が分布していたものと考えられる。今後の調査によってその実態が少しでも明らかにされていくものと期待される。

＜註＞

1）泉三本栗遺跡において最初に引用されている。その特徴としては南北に長い丘陵上にあり、主軸を東西にとる。隅丸長方形を基調としている。鎌倉期の所産である。などが挙げられている。
福田義彦『泉三本栗遺跡』佐賀市文化財調査報告書第18集　佐賀市教育委員会　1987

Tab. 1　千布二本黒木遺跡３・４区掘立柱建物一覧表

遺構番号	間　数	桁行×梁行(m)	床面積(m²)	桁行方位	備　　考
ＳＢ301	３×２間	6.9×3.7	25.5	N-12°-W	ＳＢ302を切る。
ＳＢ302	３×２間	6.3×3.1	19.5	N-９°-W	ＳＢ301に切られる。
ＳＢ303	——	——	——	——	ＳＢ304と重複する。
ＳＢ304	——	——	——	——	ＳＢ303と重複する。
ＳＢ305	——	——	——	——	ＳＫ307と重複する。
ＳＢ441	——	——	——	——	ＳＢ442と重複する。
ＳＢ442	——	——	——	——	ＳＢ441と重複する。
ＳＢ443	４×３間	6.0×5.4	32.4	N-82°-E	ＳＢ444と切り合う。ＳＢ445と重複する。
ＳＢ444	４×２間	8.45×5.4	45.6	N-80°-E	ＳＢ443・445と切り合う
ＳＢ445	３×１間	6.0×4.1	23.7	N-80°-E	ＳＢ444と切り合う。ＳＢ443•446•447と重複する。
ＳＢ446	２×２間	4.3×4.1	17.4	N-79°-E	ＳＢ445•448と重複する。
ＳＢ447	２×２間	3.9×3.6	13.7	N-76°-E	SE412•SK428を切り、SK429に切られる。SB445と重複する。
ＳＢ448	３×１間	5.4×3.4	18.4	N-84°-E	ＳＢ446•449と重複する。
ＳＢ449	３×１間	5.4×3.4	18.4	N-85°-E	ＳＸ402に切られる。ＳＢ448・450と重複する。
ＳＢ450	３×２間	5.6×3.5	19.3	N-84°-E（梁行）	ＳＫ403と切り合う。
ＳＢ451	——	——	——	——	——
ＳＢ452	３×３間	4.7×3.9	17.6	N-82°-E	ＳＢ453に切られる。
ＳＢ453	——	——	——	N-83°-E	ＳＢ452を切る。
ＳＢ454	３×２間	6.3×3.4	21.0	N-81°-E	ＳＢ455•456と重複する。
ＳＢ455	３×２間	5.7×3.4	19.1	N-83°-E	SB456に切られ、SB454と重複する。
ＳＢ456	３×２間	7.3×4.15	29.7	N-81°-E	ＳＢ455を切る。ＳＢ454と重複
ＳＢ457	３×１間	6.5×3.4	22.1	N-86°-E	ＳＢ458と重複する。
ＳＢ458	２×１間	4.1×2.75	11.0	N-85°-E	ＳＢ457と重複する。
ＳＢ459	——	——	——	——	ＳＫ405を切る。

Tab. 2　ピット番号及び掘立柱建物柱穴番号対照表

P4234－SB443 P 1	P4249－SB444 P11	P4243－SB450 P 4
P4230－SB443 P 2	P4228－SB444 P12	P4224－SB452 P 7
P4227－SB443 P 3	P4263－SB444 P14	P4222－SB452 P 8
P4266－SB443 P 4	P4215－SB445 P 5	P4219－SB452 P 1
P4268－SB443 P 6	P4251－SB445 P 6	P4065－SB452 P 1
P4270－SB443 P 9	P4242－SB445 P 7	P4279－SB453 P 2
P4272－SB443 P10	P4250－SB445 P 8	P4221－SB453 P 5
P4259－SB443 P11	P4244－SB446 P 1	P4220－SB453 P 6
P4258－SB443 P12	P4240－SB446 P 2	P4223－SB453 P 7
P4256－SB443 P13	P4235－SB446 P 6	P4209－SB454 P 2
P4233－SB444 P 1	P4214－SB447 P 2	P4211－SB454 P 6
P4277－SB444 P 3	P4213－SB447 P 4	P4208－SB455 P 1
P4276－SB444 P 4	P4280－SB447 P 5	P4207－SB456 P 2
P4275－SB444 P 5	P4212－SB447 P 6	P4206－SB456 P 6
P4260－SB444 P 6	P4216－SB447 P 7	P4205－SB456 P 7
P4252－SB444 P 7	P4211－SB447 P 8	P4201－SB457 P 1
P4217－SB444 P 8	P4248－SB447 P 9	P4202－SB457 P 2
P4254－SB444 P 9	P4237－SB449 P 2	P4202－SB457 P 4
P4255－SB444 P10	P4236－SB449 P 3	P4239－SB457 P 8

X．中世容器類の定量分析

千布二本黒木遺跡4区で出土した中世容器類について定量化[1)]を行い、ほぼ同様な全破片分類集計法による佐賀市久保泉町本村遺跡［徳永・宮武1991］・同北川副町観音遺跡［前田・角1993］の分析結果との比較を試みた。

1．資料[2)]

千布二本黒木遺跡4区の出土遺物のうち、中世容器類破片と認識できたすべてを対象とする 。出土遺物にはやや目立つ量の縄文時代・弥生時代・古墳時代遺物が含まれていて、中世容器類破片と確実に認識できないものは除外した。同一遺構内での破片どうしの接合作業は行っているが完全ではなく、各遺構間における接合関係は考慮していない。口縁部破片数によって、ある程度の個体数の最低限度量は示されると考える。

2．方法

中世容器類破片を各遺構ごとに分類し集計した。分類は先ず種別（土師器・瓦器・須恵器・陶器・常滑焼・青磁・白磁）で行い、次いで器種（皿・杯・椀・鉢・鍋・瓶）で分類し、総破片数と口縁部破片数を集計した。さらに器種単位によって構成される形態類別（供膳具：皿・杯・椀、調理具：鉢、煮炊具：鍋・滑石製石鍋、貯蔵具：瓶）で集計した。種別分類のうち、青磁は龍泉窯系青磁と同安窯系青磁に細別した。器種のうち、土師器皿・杯は（破片の判別が困難なため）ひとつの単位とした。鉢は擂目が入っている破片を擂鉢とし、それ以外は捏鉢とした。土師器鍋は徳永分類［1990］を用いた。

なお、標準型コンテナバット2箱ほどの破片の分類集計に要した時間は、整理作業員1名の支援を受けて、3時間程度であった。

3．結果

Tab. 1～6は千布二本黒木遺跡4区で出土した中世容器類総破片数809点（口縁部破片数157点）の分類集計の結果をまとめたものである。補足しておくと、須恵器捏鉢は、ごく少数のハケ目がある在地系と思われるものを除き、すべて東播系である。須恵器瓶は内面ハケ目・ナデで外面格子タタキ目のある産地不明のものである。龍泉窯系青磁椀はⅠ－1～4類、白磁椀はⅤ類［森田・横田1978］の破片と思われる

Fig.87に総破片数による器種・種別・形態分類の組成量を百分率で示している。％は全体で100となるように少数点第1位で調整した。

4．考察

比較を行うにあたって、千布二本黒木遺跡4区と本村遺跡1区・観音遺跡1区の遺跡の内容を明確にし、ある程度資料の条件付けをなす必要がある。

Tab. 3　千布二本黒木遺跡 4 区出土中世容器類分類計表(1)　〔破片数（口縁部破片数）〕

分類単位	SD401	SD402	SD403	SD404	SK405	SK406	SK408	SK409	SK410	SK411	SK412
土師器	21(4)	18(1)	11(5)	4	1(1)	2	2	2	13(2)	2	4(2)
皿・杯	21(4)	15(1)	11(5)	4	1(1)	2	2	2	13(2)	2	4(2)
捏鉢	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
擂鉢	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
鍋II類	×	3	×	×	×	×	×	×	×	×	×
鍋III類	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
瓦器	×	1	×	×	×	×	×	×	×	×	1
椀	×	1	×	×	×	×	×	×	×	×	1
捏鉢	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
須恵器	×	×	×	×	1(1)	×	×	×	×	×	×
捏鉢	×	×	×	×	1(1)	×	×	×	×	×	×
瓶	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
陶器鉢	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
常滑焼瓶	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
龍泉窯系青磁椀	1	×	×	1	×	×	×	×	×	×	×
同安窯系青磁椀	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
白磁椀	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
滑石製石鍋	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
合計	22(4)	19(1)	11(5)	5	2(2)	2	2	2	13(2)	2	5(2)
供膳具	22(4)	16(1)	11(5)	5	1(1)	2	2	2	13(2)	2	5(2)
土師器	22(4)	15(1)	11(5)	4	1(1)	2	2	2	13(2)	2	4(2)
瓦器	×	1	×	×	×	×	×	×	×	×	1
青磁	1	×	×	1	×	×	×	×	×	×	×
白磁	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
煮炊具	×	3	×	×	×	×	×	×	×	×	×
土師器	×	3	×	×	×	×	×	×	×	×	×
滑石製石鍋	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
調理具	×	×	×	×	1(1)	×	×	×	×	×	×
須恵器	×	×	×	×	1(1)	×	×	×	×	×	×
瓦器	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
陶器	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
土師器	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
貯蔵具	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
須恵器	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
常滑焼	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
合計	22(4)	19(1)	11(5)	5	2(2)	2	2	2	13(2)	2	5(2)

Tab. 4　千布二本黒木遺跡 4 区出土中世容器類分類計表(2)　〔破片数（口縁部破片数）〕

分類単位	SE413	SD414	SE415	SK416	SK417	SK418	SK419	SK420	SK421	SK422	SK424
土師器	7(2)	2	4(1)	5(2)	×	2	1	6	5(3)	3	3(1)
皿・杯	5(1)	2	4(1)	5(2)	×	2	1	6	5(3)	3	3(1)
捏鉢	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
擂鉢	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
鍋II類	1	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
鍋III類	1(1)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
瓦器	2(2)	×	×	×	×	×	×	1(1)	×	×	×
椀	1(1)	×	×	×	×	×	×	1(1)	×	×	×
捏鉢	1(1)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
須恵器	2(1)	×	×	×	1	×	×	×	×	×	1
捏鉢	1(1)	×	×	×	1	×	×	×	×	×	1
瓶	1	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
陶器鉢	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
常滑焼瓶	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
龍泉窯系青磁椀	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
同安窯系青磁椀	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
白磁椀	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
滑石製石鍋	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
合計	11(5)	2	4(1)	5(2)	1	2	1	7(1)	5(3)	3	4(1)
供膳具	6(2)	2	4(1)	5(2)	×	2	1	7(1)	5(3)	3	3(1)
土師器	5(1)	2	4(1)	5(2)	×	2	1	6	5(3)	3	3(1)
瓦器	1(1)	×	×	×	×	×	×	1(1)	×	×	×
青磁	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
白磁	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
煮炊具	2(1)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
土師器	2(1)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
滑石製石鍋	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
調理具	2(2)	×	×	×	1	×	×	×	×	×	1
須恵器	1(1)	×	×	×	1	×	×	×	×	×	1
瓦器	1(1)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
陶器	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
土師器	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
貯蔵具	1	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
須恵器	1	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
常滑焼	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
合計	11(5)	2	4(1)	5(2)	1	2	1	7(1)	5(3)	3	4(1)

Tab. 5　千布二本黒木遺跡 4 区出土中世容器類分類計表(3)　〔破片数（口縁部破片数）〕

分類単位	SD425	SD426	SE427	SK428	SK431	SK432	SD433	小穴小計	表採	合　計
土師器	2	1	2(2)	1	1	2	6	622(122)	7(4)	762(142)
皿・杯	2	1	2(2)	1	1	2	5	500(91)	6(3)	633(119)
捏鉢	×	×	×	×	×	×	×	1	×	1
擂鉢	×	×	×	×	×	×	×	1	×	1
鍋II類	×	×	×	×	×	×	1	36	×	41
鍋III類	×	×	×	×	×	×	×	84(21)	1(1)	86(29)
瓦器	1(1)	×	×	×	×	×	×	14(6)	×	20(10)
椀	×	×	×	×	×	×	×	13(5)	×	17(7)
捏鉢	1(1)	×	×	×	×	×	×	1(1)	×	3(3)
須恵器	×	×	×	1	×	×	×	9	×	15(2)
捏鉢	×	×	×	1	×	×	×	7	×	12(2)
瓶	×	×	×	×	×	×	×	2	×	3
陶器鉢	×	×	×	×	×	×	×	3	×	3
常滑焼瓶	×	×	×	×	×	×	×	1	×	1
龍泉窯系青磁椀	×	×	×	×	×	×	1(1)	×	1	4(1)
同安窯系青磁椀	×	×	1	×	×	×	×	×	×	1
白磁椀	×	×	×	×	×	×	×	1	2(2)	3(2)
滑石製石鍋	×	×	×	×	×	×	×	2(1)	×	2(1)
合計	3(1)	1	3(2)	2	1	2	7(1)	652(119)	10(6)	811(158)
供膳具	2	1	3(2)	1	1	2	6(1)	514(96)	9(5)	658(129)
土師器	2	1	2(2)	1	1	2	5	500(91)	6(3)	633(119)
瓦器	×	×	×	×	×	×	×	13(5)	×	17(7)
青磁	×	×	1	×	×	×	1(1)	×	1	5(1)
白磁	×	×	×	×	×	×	×	1	2(2)	3(2)
煮炊具	×	×	×	×	×	×	1	122(22)	1(1)	129(24)
土師器	×	×	×	×	×	×	1	120(21)	1(1)	127(23)
滑石製石鍋	×	×	×	×	×	×	×	2(1)	×	2(1)
調理具	1(1)	×	×	1	×	×	×	13(1)	×	20(5)
須恵器	×	×	×	1	×	×	×	7	×	12(2)
瓦器	1(1)	×	×	×	×	×	×	1(1)	×	3(3)
陶器	×	×	×	×	×	×	×	3	×	3
土師器	×	×	×	×	×	×	×	2	×	2
貯蔵具	×	×	×	×	×	×	×	3	×	4
須恵器	×	×	×	×	×	×	×	2	×	3
常滑焼	×	×	×	×	×	×	×	1	×	1
合計	3(1)	1	3(2)	2	1	2	7(1)	652(119)	10(6)	811(158)

千布二本黒木遺跡４区　調査面積：約1,600㎡（建物が集中する屋敷地の中心部にあたる）
遺構：溝・井戸・掘立柱建物・土壙・小穴（区画溝らしいものを含む）
年代：13世紀前葉～13世紀後葉（主体は13世紀後葉）
破片数：811（158）点

本村遺跡１区　調査面積：約5,000㎡（ほぼ屋敷地の全域にあたる）
遺構：溝・井戸・掘立柱建物・柵列・土壙・土壙墓・小穴（明確な区画溝・埋納土壙、埋納小穴を含む）
年代：11世紀中葉～14世紀中葉（12世紀後葉～13世紀後葉が主体）
破片数：5,440（1,648）点

観音遺跡１区　調査面積：約500㎡（屋敷地の縁辺の一部にあたる）
遺構：溝・井戸・小穴（区画溝らしいものを含み、掘立柱建物はない）
年代：13世紀前葉～15世紀代（主体は13世紀中葉）
破片数：1,547（275）点

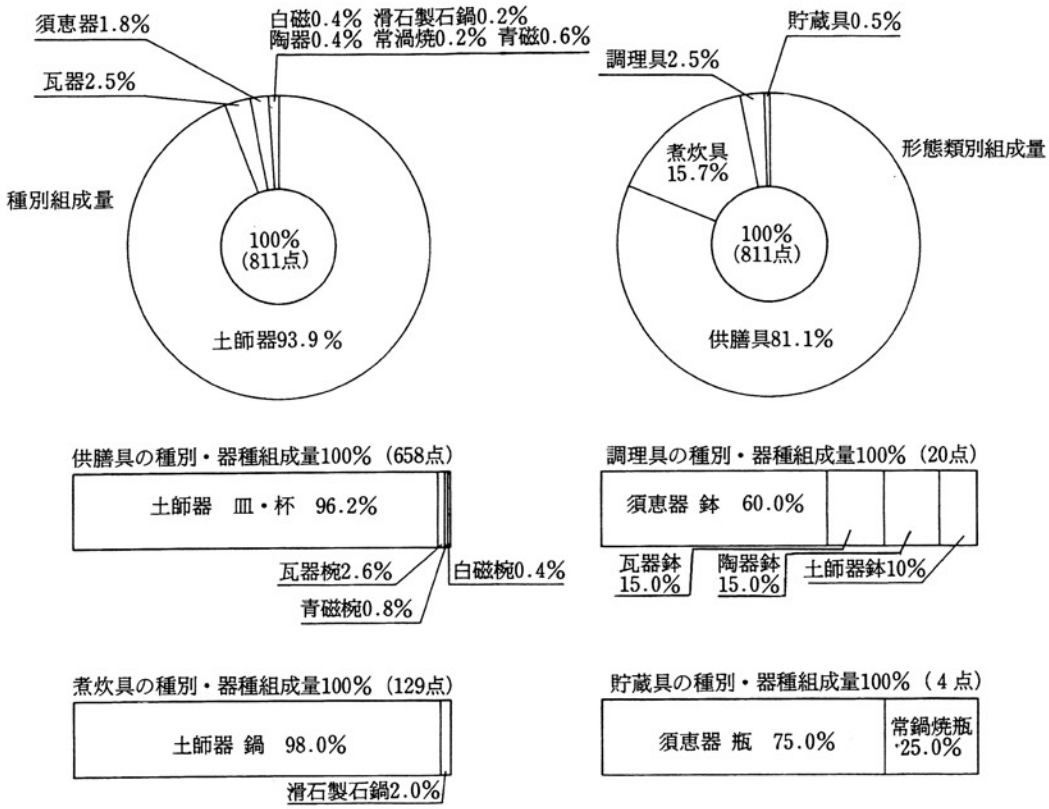


Fig.87　千布二本黒木遺跡４区出土中世容器類の組成量

以上のように列記した条件に検討を加え、限定された調査区による要因、年代的な要因によるバイアスを排除すれば、その屋敷地が本来もっている遺物の出土傾向が示されると考える[3]。その時点で、屋敷地がおかれた背景が浮かんでこよう[4]。

破片数　約1,000m²当りの破片数は、千布二本黒木遺跡４区：506点、本村遺跡１区：1,088点、観音遺跡１区：3,094点で、千布二本黒木遺跡４区は調査区面積の割に破片数が少ない。これは掘立柱建物が集中する部分に調査区が限定されたためと考える[5]。破片の大部分が溝から出土した観音遺跡１区に対し、屋敷地のほぼ全域にあたる遺構組成をもつ本村遺跡１区が千布二本黒木遺跡４区との中間的な値をとることは、この論理を補強するものと考える[6]。したがって、千布二本黒木遺跡４区の分析結果は屋敷地の全般的な出土傾向を表すものではなく、本村遺跡１区・観音遺跡１区との差異は、年代的要因の他に、この限定された調査区による要因が大きいと考える。

組成　三者に共通して出現しない分類単位をTab．６に示した。年代的な要因で黒色土器椀・瓦器皿は本村遺跡でしか出現しない。土師器湯釜・火鉢・瓦器火鉢・湯釜は、その出現と変遷が現段階では明確でないが年代的には後出するものとされ[徳永1990]、千布二本黒木遺跡４区には年代的な要因で出現しないと考える。土師器の支脚については鍋II類に伴うとの指摘があるが［徳永1990]、千布二本黒木遺跡４区・観音遺跡１区では出現していない。白磁皿・青磁皿が千布二本黒木遺跡４区で出現しないのは、出土破片数量のアプリオリな確率によるものだろう。備前焼擂鉢・常滑焼瓶・捏鉢・褐釉陶器壺の出現の有無は、確率上の問題でなければ、その屋敷地の背景の問題となろうか。

Tab．6　容器類組成対照表

分類単位	CNK	HMR	KAN	分類単位	CNK	HMR	KAN
土師器支脚	×	○	×	瓦器瓶	×	○	○
土師器湯釜	×	○	○	備前焼擂鉢	×	○	×
土師器火鉢	×	×	○	常滑焼瓶	○	○	×
黒色土器椀	×	○	×	常滑焼捏鉢	×	○	×
瓦器皿	×	○	×	白磁皿	×	○	○
瓦器擂鉢	×	○	×	青磁皿	×	○	×
瓦器火鉢	×	○	×	褐釉陶器壺	×	○	○
瓦器湯釜	×	○	○				

※　CNK：千布二本黒木遺跡４区、HMR：本村遺跡１区、KAN：観音遺跡１区。

種別組成量　千布二本黒木遺跡４区・本村遺跡１区・観音遺跡１区の種別組成量は、

土師器（94.2%：67.0%：86.9%）　瓦器（2.5%：21.2%：4.1%）
須恵器（1.9%：2.1%：3.5%）　青磁（0.6%：3.1%：3.5%）
白磁（0.3%：1.4%：1.0%）　陶器（0.3%：1.1%：0.3%）
滑石製石鍋（0.2%：0.8%：0.6%）

となる。土師器は千布二本黒木遺跡４区・観音遺跡１区で圧倒的に高率であるが、瓦器は両者で極端に低い。須恵器・滑石製石鍋の比率は相対的に安定している。青磁・白磁・陶器は千布二本黒木遺跡４区では減少傾向にある。瓦器の比率の偏差は、明らかに千布二本黒木遺跡４区・観音遺跡１区が、瓦器椀が盛行する13世紀前後を主体的な年代としていないからである。微量ながらも中国産磁器が出土する傾向は、指摘されるように［徳永・宮武1991］北部九州の集落遺跡に通有するものである。

形態類別組成量　千布二本黒木遺跡４区・本村遺跡１区・観音遺跡１区で、

供膳具（81.1%：75.2%：83.7%）　煮炊具（15.7%：19.8%：10.4%）
調理具（2.5%：2.7%：4.6%）　貯蔵具（0.5%：2.0%：1.3%）

となる。年代的要因以外にバイアスがかかってないとすれば、瓦器椀が消滅した時期を含んでも供膳具が占める割合はさほど変化しない可能性がある。柏原K遺跡で行われたような一定の平面区画ごとの分類集計を試みれば、各形態類別における廃棄時の分布の粗密から屋敷地内の機能的区分が現出すると思われる。

供膳具組成量　千布二本黒木遺跡４区・本村遺跡１区・観音遺跡１区で、

土師器（96.2%：49.5%：90.6%）　瓦器（2.6%：32.1%：3.5%）
青磁（0.8%：4.9%：4.7%）　白磁（0.4%：2.0%：1.2%）

となる。土師器・瓦器の比率の偏差は、明らかに瓦器椀が消失した年代を主体とするかどうかの差異である。千布二本黒木遺跡の青磁・白磁の比率の低さは、限定された調査区による確率的なバイアスがかかっていなければ、屋敷地の背景によるものだろう。

煮炊具組成量　千布二本黒木遺跡４区・本村遺跡１区・観音遺跡１区で、

土師器（98.0%：91.4%：90.3%）　滑石製石鍋（2.0%：5.0%：6.9%）
瓦器（0.0%：0.0%：2.8%）

となる。破片数の比率でみれば多少の年代差を無視しても、大多数を土師器鍋が占め一部を滑石製石鍋が補完するという状況［徳永・宮武1991］は変わらない。土師器・瓦器の湯釜は比率的にごくわずかである。

調理具組成量　千布二本黒木遺跡４区・本村遺跡１区・観音遺跡１区で、

須恵器（60.0%：54.4%：59.4%）　瓦器（15.0%：25.6%：28.1%）
土師器（10.0%：13.6%：9.4%）　陶器（15.0%：6.4%：3.1%）

となる。須恵器の鉢が安定的に50％以上を占め、その大部分が東播系捏鉢である点は中世における物流を考える上で重要である。当初の予想に反し、瓦器鉢の出現率は比較的安定したものと思われる。千布二本黒木遺跡４区で陶器の比率が高いのは確率的なバイアスによるものか。

貯蔵具組成量　千布二本黒木遺跡４区・本村遺跡１区・観音遺跡１区で、

須恵器（75.0％：50.0％：88.8％）　瓦器（0.0％：1.1％：5.6％）

常滑焼（25.0％：27.7％：0.0％）　褐釉陶器（0.0％：20.2％：5.6％）

となる。貯蔵具の破片数はどの遺跡でも絶対数が少なく、確率的なバイアスがかかりやすいと思うが、ここではその点を無視することにする。千布二本黒木遺跡４区・本村遺跡１区では、須恵器瓶が高い比率を占め、常滑焼瓶がそれを補完する状況を示す。瓦器瓶はきわめて少量出現している。観音遺跡１区で常滑焼瓶が、千布二本黒木遺跡４区で褐釉陶器壺が出現しない点は、屋敷地の背景によるものか。

４．まとめ

以上、千布二本黒木遺跡４区の中世容器類の定量分析を行い、本村遺跡１区・観音遺跡１区の分析結果との比較を試みた。その結果、以下の点が明らかになった。

1.千布二本黒木遺跡４区での相対的な破片数の少なさは、掘立柱建物が集中する部分に調査区が限定されたためであり、破片数量と屋敷地内の機能的な区分は相関する確率が大きい。機能的な区分ごとの出土傾向については今後の検討を要する。

2.瓦器椀が盛行する年代を主体としない場合、種別組成量において瓦器の比率は極端に減少する。

3.瓦器椀が消滅した年代を含んでも、全体に占める供膳具の比率はさほど変化しない。

4.瓦器椀が消失した年代を含んだ場合でも、青磁•白磁椀の比率は増大しない。したがって、器種としての椀の比率は極端に減少し、供膳具の大部分は土師器皿・杯となる。

5.本村遺跡１区との供膳具組成量の偏差を考慮すると、瓦器椀は量的に減少しながら消失する可能性が存在する。

6.煮炊具の組成量は、大多数を土師器鍋が占め、その一部を滑石製石鍋が補完するという状況が共通する。

7.調理具の組成量は、須恵器の鉢が安定的に50％以上を占め、その大部分が東播系捏鉢であるいう状況が共通する。

今回の分析では、年代的な要因を考慮すれば、千布二本黒木遺跡４区と本村遺跡１区・観音遺跡１区との偏差は説明できる部分が多い。屋敷地の背景の差異につながる可能性がある点については指摘はしているが、今後、限定された調査区による確率的なバイアスと、全般に統計的な手法を取り入れていない場合のバイアスを排除すれば、そこに残った偏差からその屋敷地の背景につながる差異を導くことが可能であり、屋敷地の容器類出土傾向の類型化に対する見

通しが生まれるだろう。

以上、千布二本黒木遺跡４区の中世容器類の分析結果を記述してきた。心がけてきたのは、一次資料を確実に明示しその文章の中で追試を可能にすることと、この全破片分類集計法の基本的なフォーマットを整備して今後の標準化に向けての準備を行うこと、であった。中園[1991]が正しく説くように、結果の正否に関わらず、論証はすべて資料・方法ともに明示的である必要がある。定量化とは他との比較を可能にするための手法であって、同一の方法による多くの分析資料をもって目標を追求する必要がある。今回の方法に拘らずとも、標準化された普遍的な方法で、一次資料を明示した多くの仕事が必要となろう。

謝辞　本稿をなすにあたって、基本的な方法はすべて本村遺跡報告書の徳永貞紹氏の論考から引き継いだ。徳永氏の仕事は、本格的な中世容器類の定量分析としては佐賀県唯一のものであるが、県内での反応はにぶい。同僚である西田巌氏には資料の利用の面でご配慮をいただいた。ここに記して感謝いたします。

註

1):自然科学系分野の用語であり耳慣れないかも知れないので、ここで一応の説明をしておく 。<定量>とは<定性>と対になった概念であり、ある対象がどのような要素によって構成されているかを知るために分類を行うことが<定性化>であり、設定された分類に従い構成要素を数量的に表現することが<定量化>である。たとえばある試薬を対象とする場合，どのような物質で構成されているかを調べる手法が<定性分析>であり、含まれていた物質の数量的な割合を調べる手法が<定量分析>である。したがって定性化が行われていなければ定量化は行えない。考古遺物の<組成>を明らかにする分類単位を設定することが定性分析であり、<組成量>を明らかにすることが定量分析である。「定量的である」とか「定量化する」という場合、一定の条件・方法であれば(その分野で一定のトレーニングを受けた)誰がやろうと同じ結果が出る(期待できる)手法というニュアンスを明確に含んでいる。自然科学系分野から人文科学系分野への批判には、「定量的でない」という表現が用いられることが多い。

2):観音遺跡では資料的条件が明示している。本村遺跡では条件の明示がないが、今回の作業とほぼ同様であると考える。

3):他に統計的誤差による要因がある。我々のフォーマットにはまだ統計学的な検討方法がない。一般に考古学での<数字>の取り扱いは、統計学を多用する分野からみるといい加減な取り扱いをしていることが多いようだ。

4):輸入中国陶磁器の優品の有無をもって、屋敷地の主体者が武家層であることの傍証にする例が目につく。優品についての<計量的>な分析はあるが、その出土傾向についての<定量的>な分析はないようである。そうした手続きや、同様な遺構の分析を経て、はじめて論じられる問題と考える。

5):この点については13世紀中葉から14世紀中葉の屋敷地である柏原K遺跡［山崎・内野・角1987］で出土遺物量の分布状況の分析が行われている。方法・資料の条件付けの明示がなく、我々とは基本的なフォーマットが異なるようで直接的な比較はできないが、掘立柱建物が集中する部分での遺物出土量は全般的に少ないようである。

6):この方面での検討を推し進めていけば、逆に出土遺物の傾向をもってその調査区が屋敷地内でどのような部分にあたるかという推定が可能になるかも知れない。

文献一覧

中園聡［1991］：「甕棺型式の再検討―“属性分析”と数量分類法による型式分類―」(『九州考古学第66号』；九

州考古学会）
徳永貞紹［1990］：「肥前における中世後期の在地土器」（『中近世土器の基礎研究VI』；日本中世研究会）
徳永貞紹・宮武正登［1991］：『本村遺跡』（佐賀県文化財調査報告書第102集；佐賀県教育委員会）
前田達男・角信一郎［1993］：『観音遺跡』（佐賀市文化財調査報告書第46集；佐賀市教育委員会）
森田勉・横田賢次郎［1978］：「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」（『九州歴史資料館研究論集4』；九州歴史資料館）
山崎純男・内野正・角浩行［1987］：『柏原遺跡群III』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集；福岡市教育委員会）

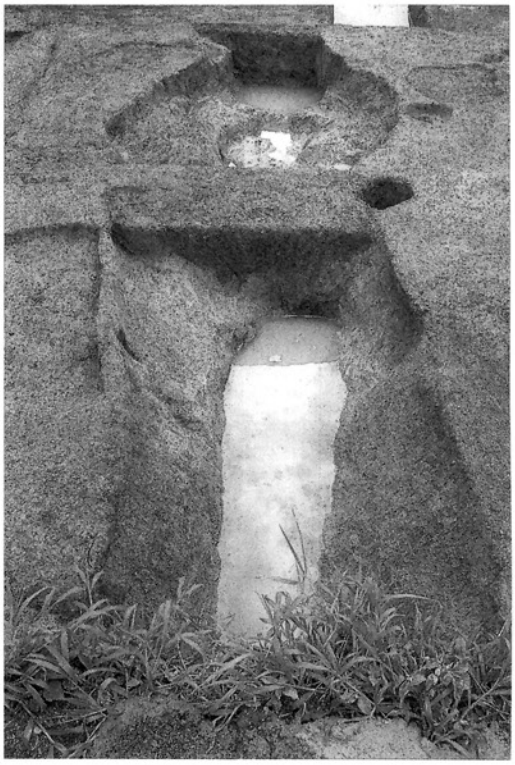
図　　版

千布二本黒木遺跡周辺の景観

遺物写真は挿図と対照できるように
挿図番号を表記した。

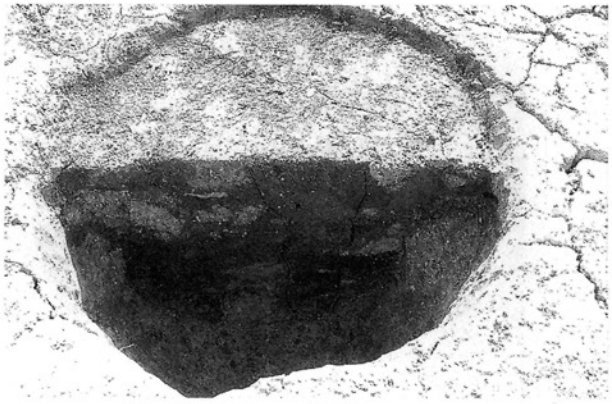
5.	SK204	(113-10)
図版番号	遺構番号	挿図番号

千布二本黒木遺跡（１・２区）



(1)　SD102 溝　（西から）

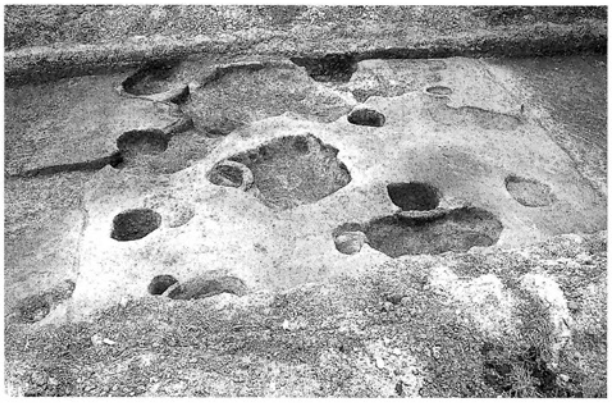
(2)　１区調査区全景（南から）



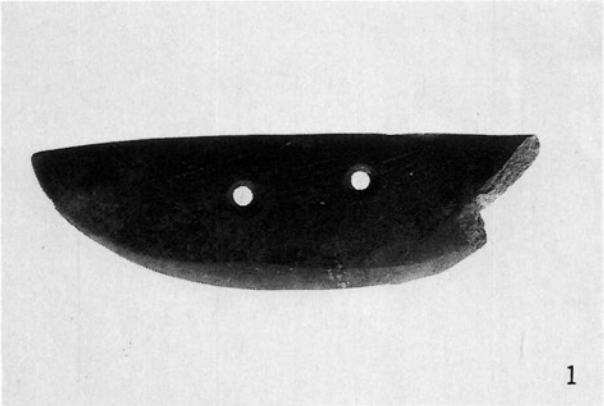
(4)　SB205 Ｐ３　土層断面　（東から）

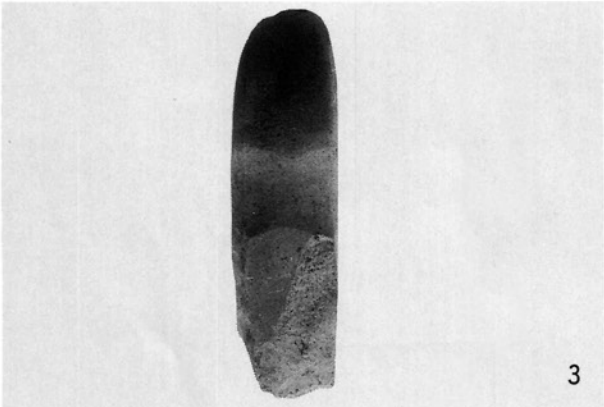
(3)　２区調査区全景（東から）

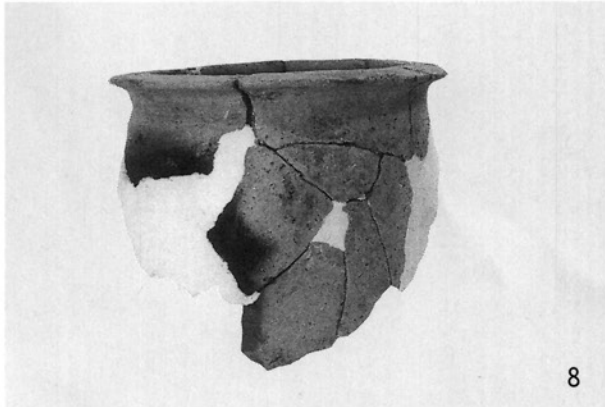
(5)　SD201 溝　（北から）



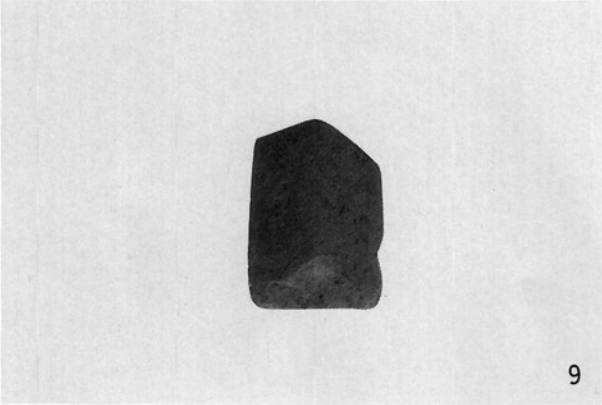
(6)　SX204不明遺構周辺（北から）

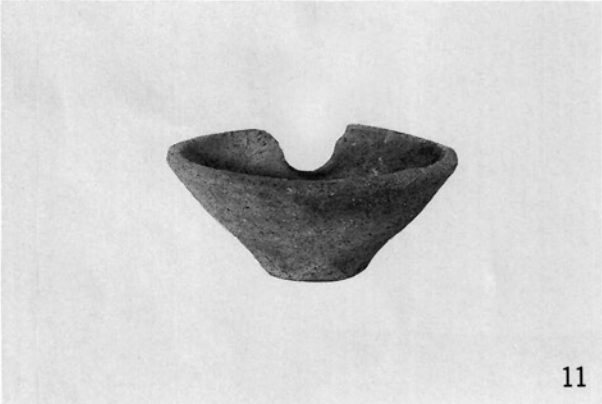


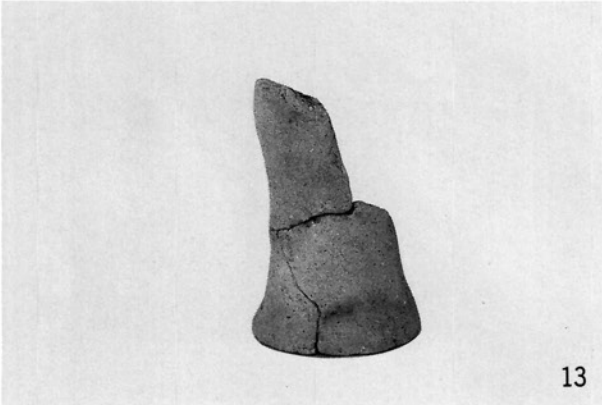


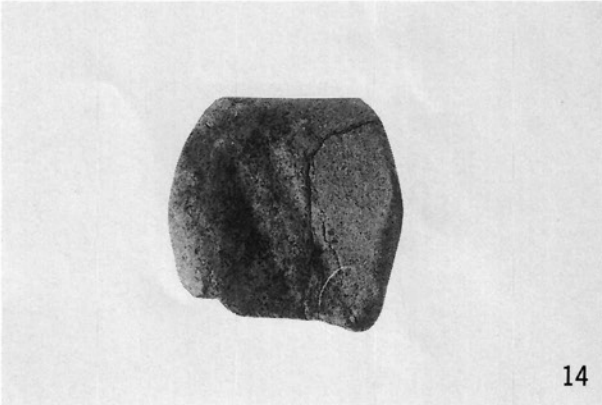


1．SB206（12－１）　3．SD201（17－31）　5．SD201（17－32）　7．SD203（17－11）
2．SD201（16－26）　4．SD201（17－30）　6．SD201（17－33）　8．SD203（19－６）

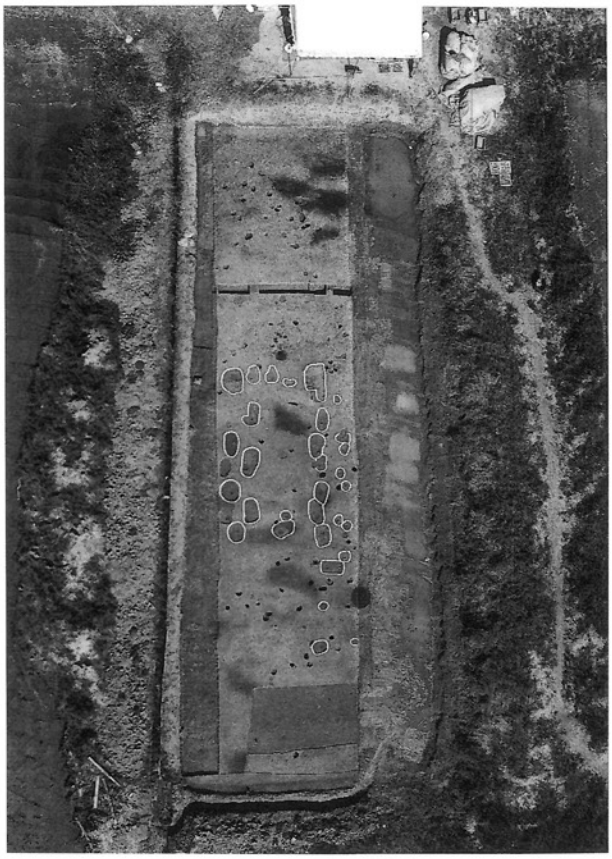




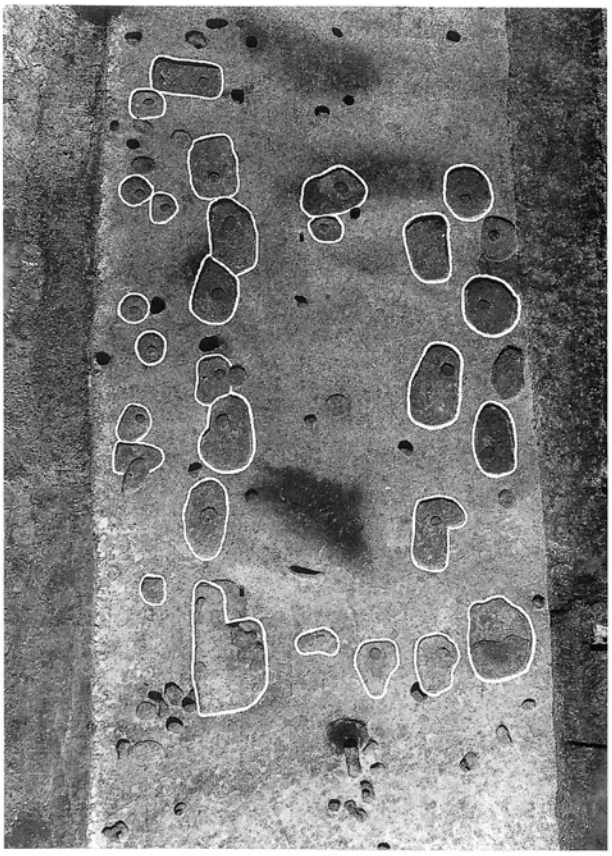




9．SD203（21—35）
10．SX204（25—18）
11．SX204（25—25）
12．SX204（26—29）
13．SX204（26—30）
14．SX204（26—34）

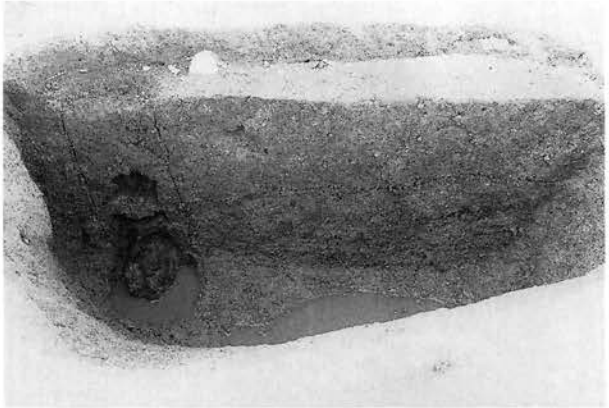


(1)　３区調査区全景



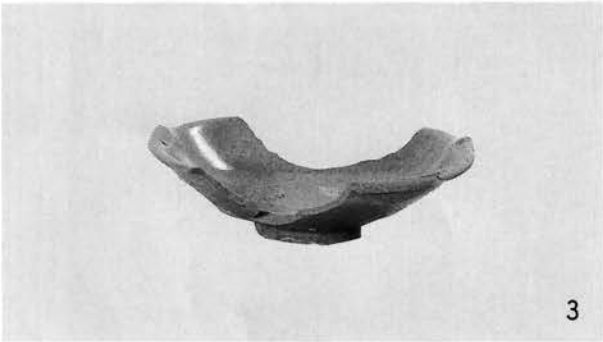
(2)　３区掘立柱建物群

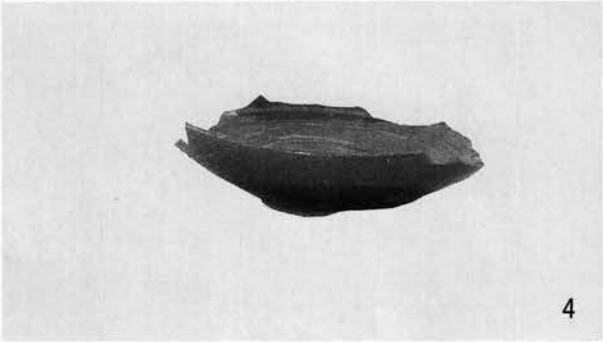
(3)　３区調査区全景（北から）

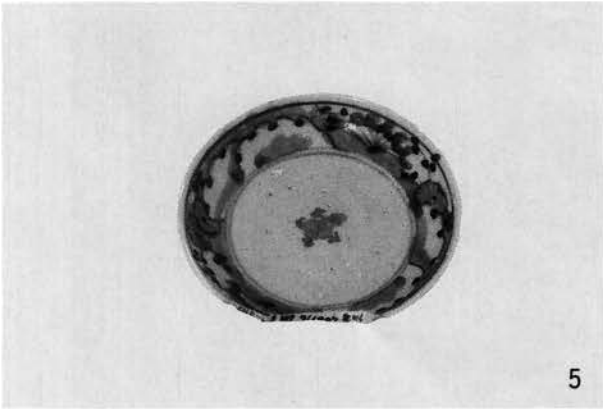


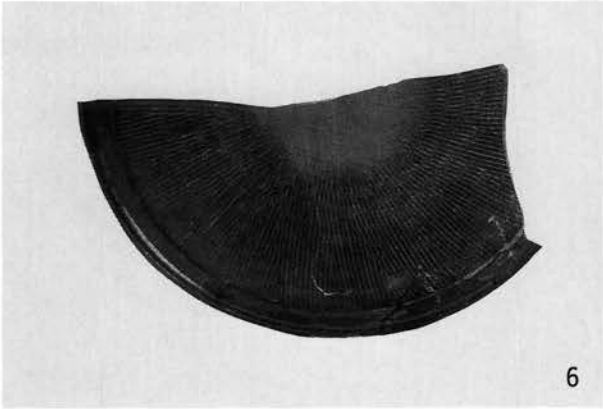
(1)　SB302 P　6土層断面（東から）

(2)　SD308・310 溝　（東から）

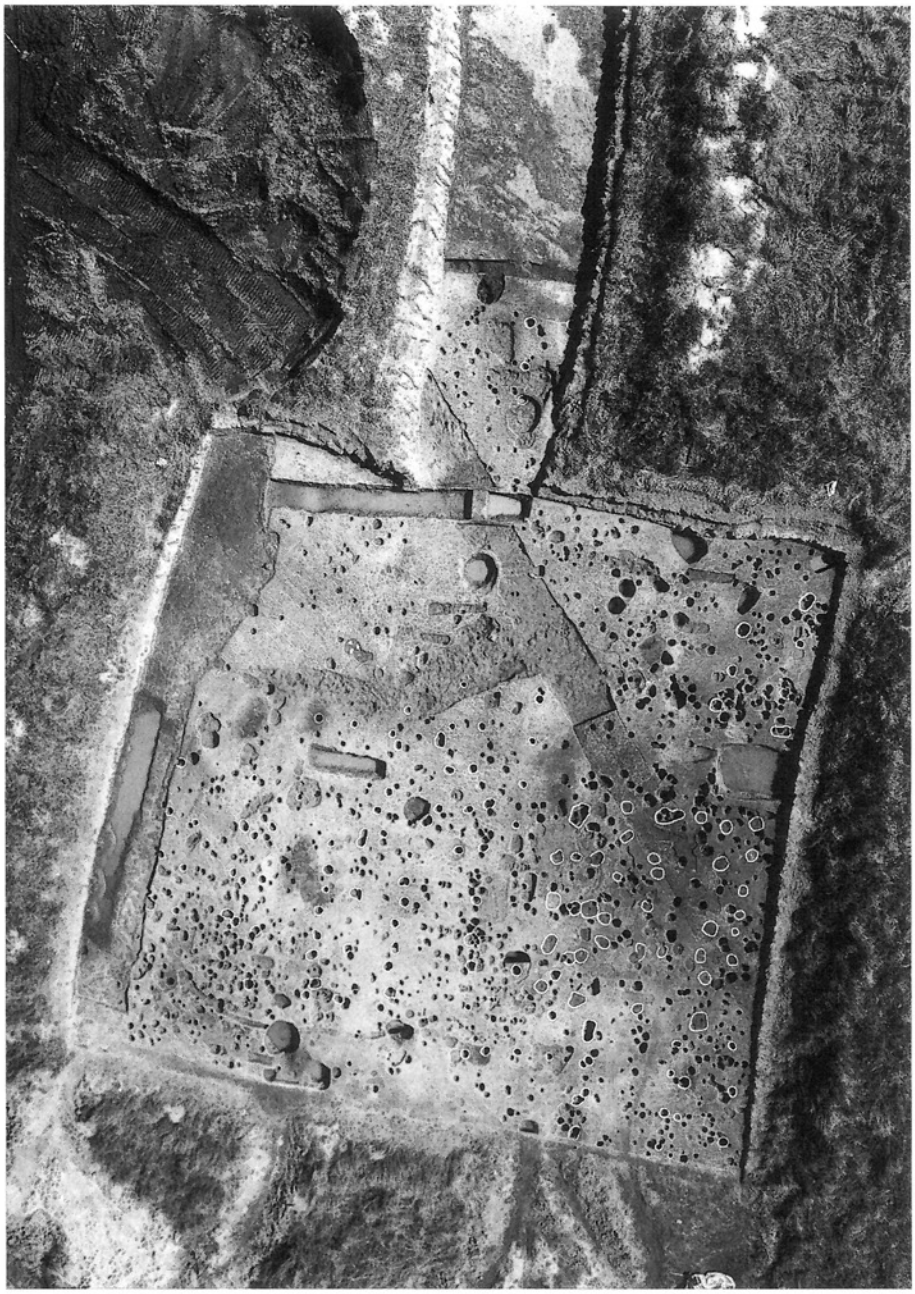




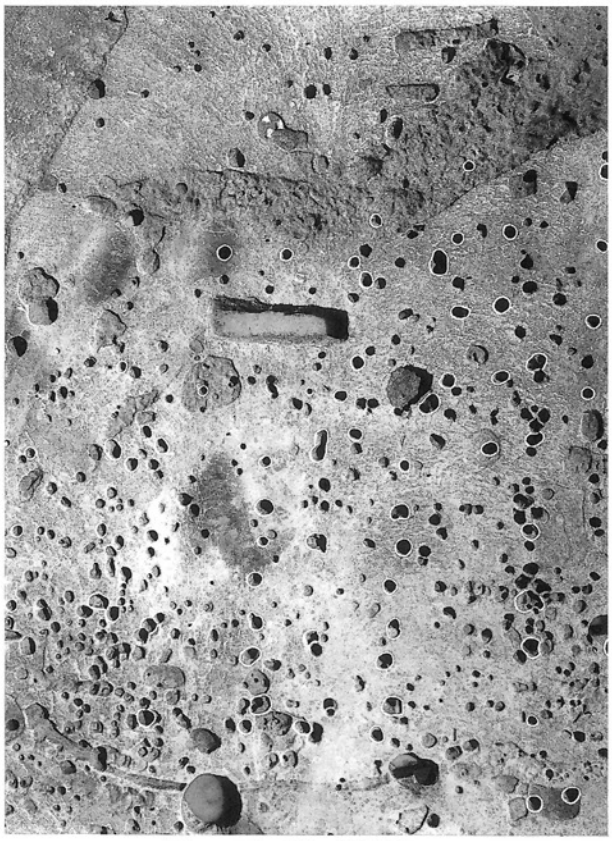




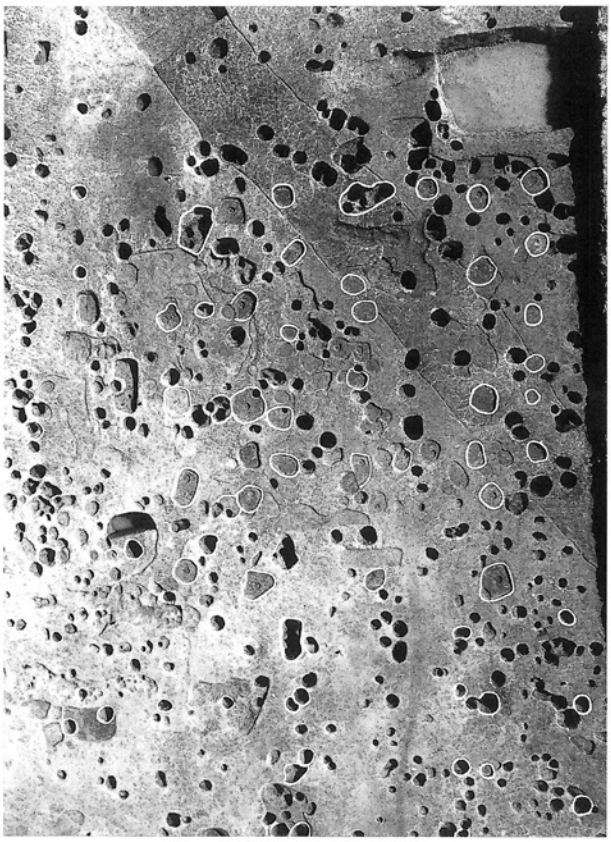
1．SB305（33－1）
2．SD306（36－1）
3．SB301（30－5）
4．SX309（38－5）
5．SX309（38－2）
6．SX309（38－7）



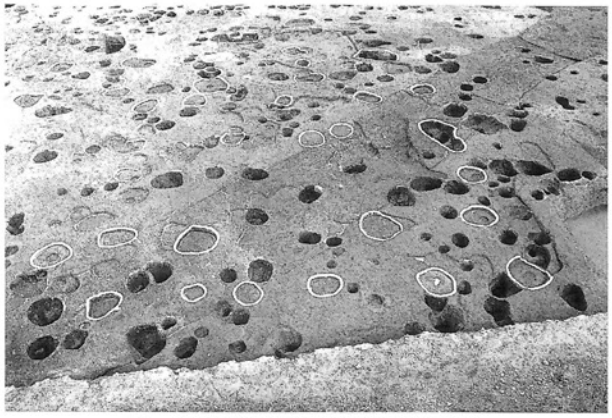
(1)　４区調査区全景



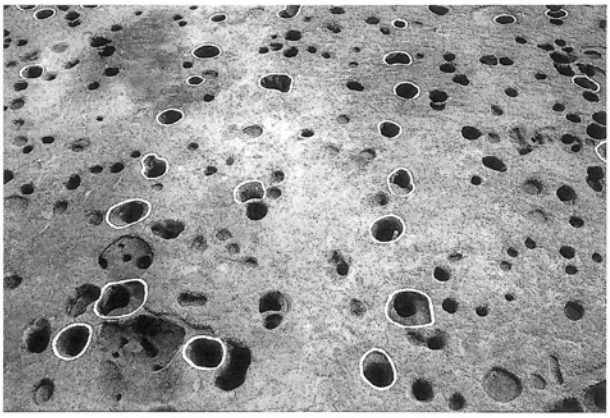
(1)　４区掘立柱建物群①



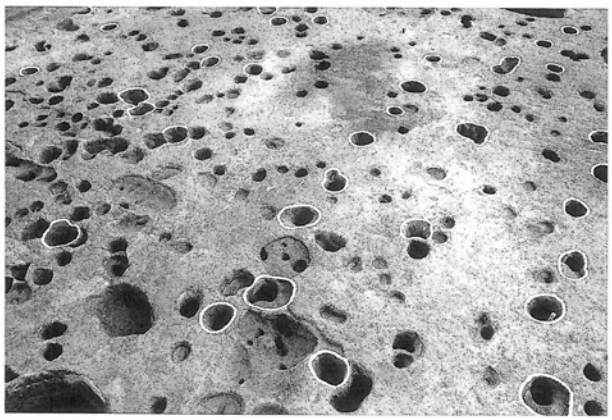
(2)　４区掘立柱建物群②



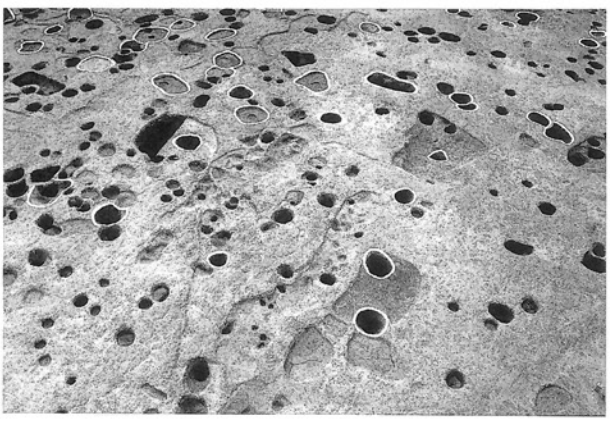
(3)　SB444掘立柱建物周辺（南から）



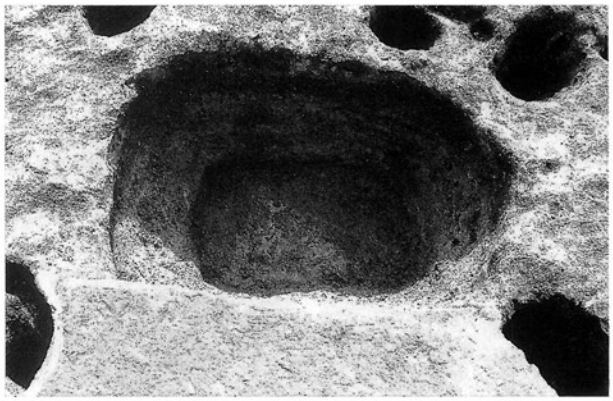
(4)　SB445掘立柱建物周辺（西から）



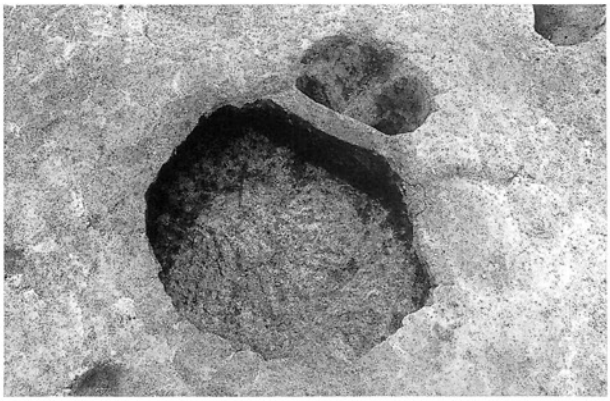
(5)　SB455掘立柱建物周辺（南西から）



(6)　SB447掘立柱建物周辺（北西から）

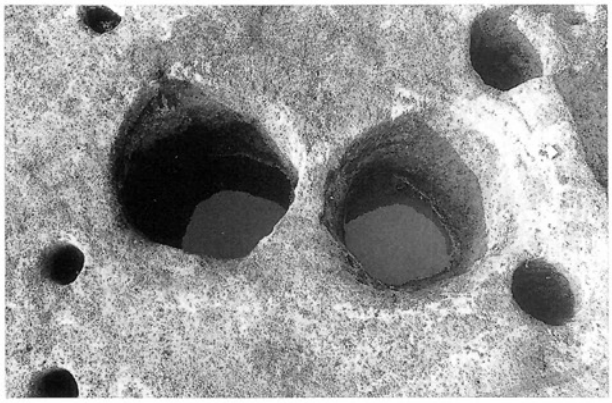


(1)　SK460土壙（北西から）

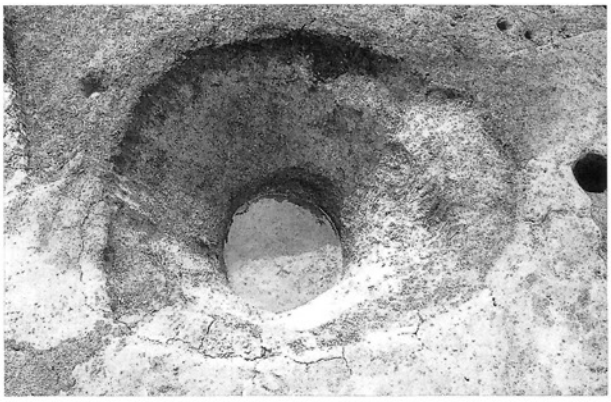


(2)　SK411土壙（北から）

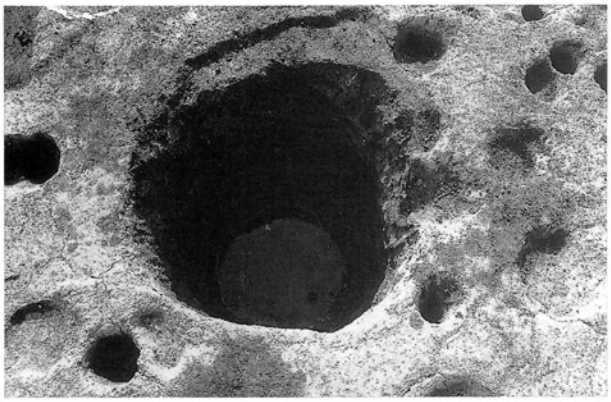
(3)　SK401溝（北東から）



(4)　SE406・407井戸（南から）



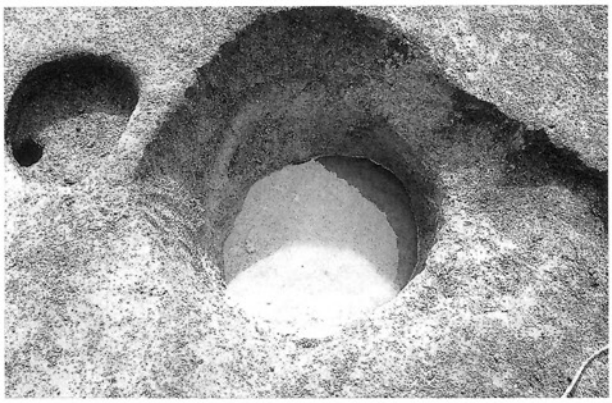
(5)　SK404井戸（北から）



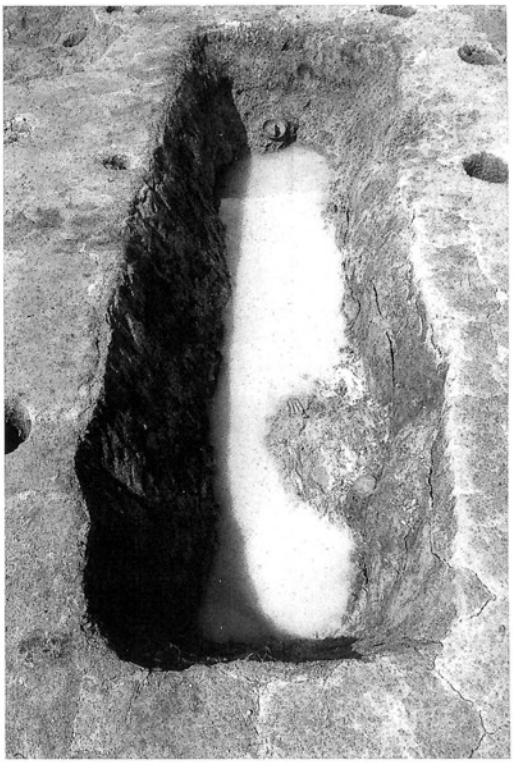
(6)　SE412井戸（東から）

(7)　SE413土層断面（北から）

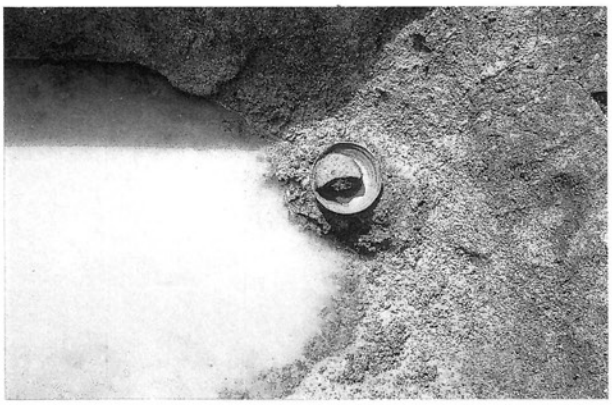
(8)　SE413井戸（北西から）



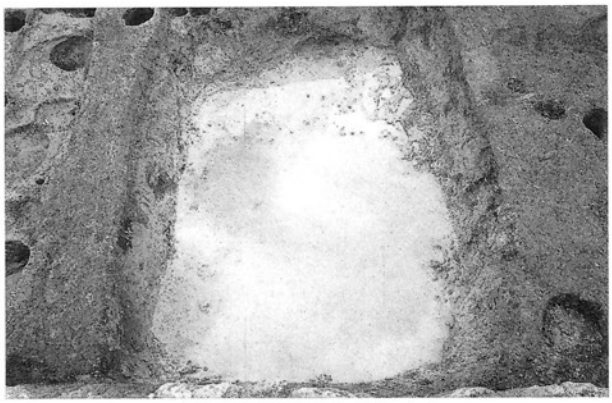
(1)　SE427井戸（東から）



(2)　SK403土壙（南から）



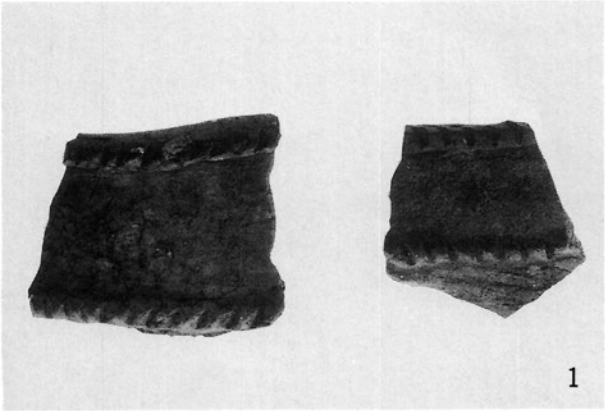
(3)　SK403遺物出土状況（東から）

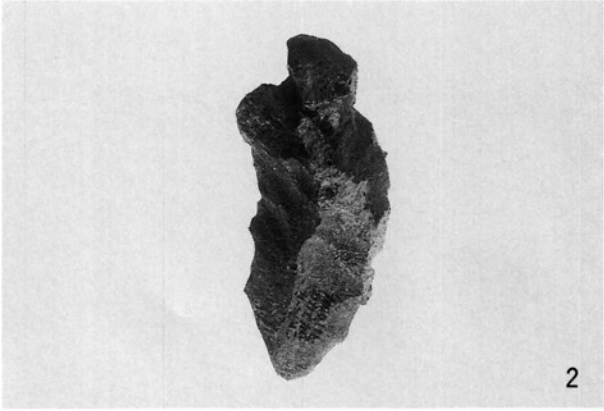


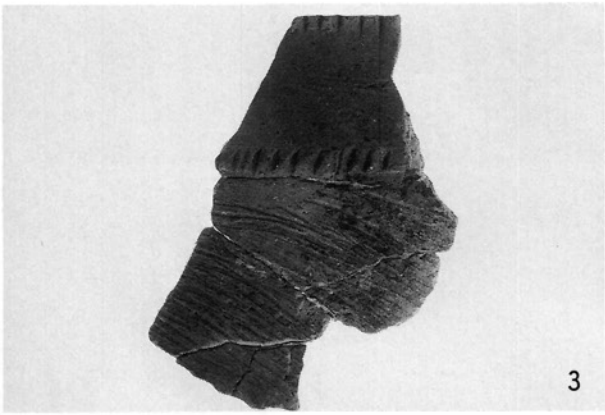
(4)　SK422土壙（南から）

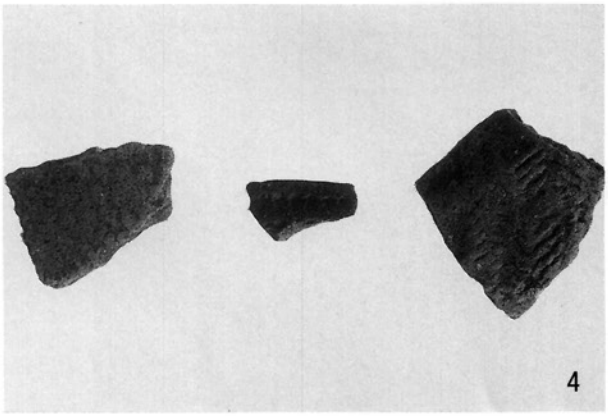
(5)　SD414溝（北から）

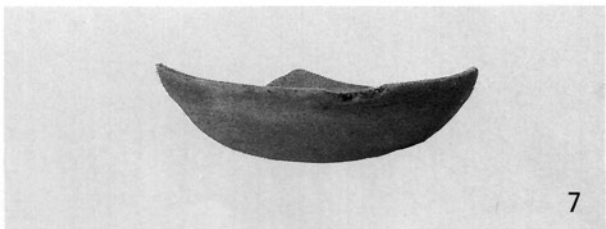
(6)　SX438不明遺構（西から）

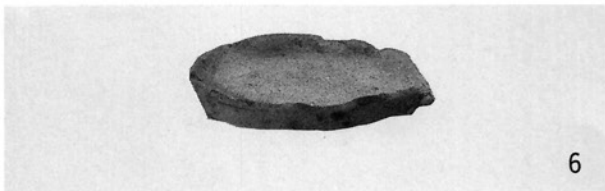


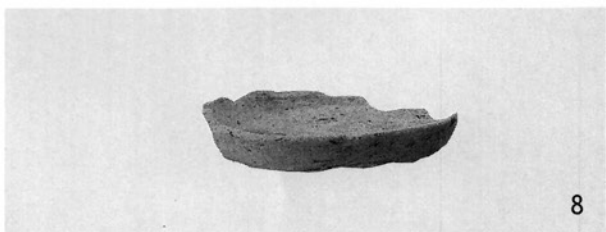


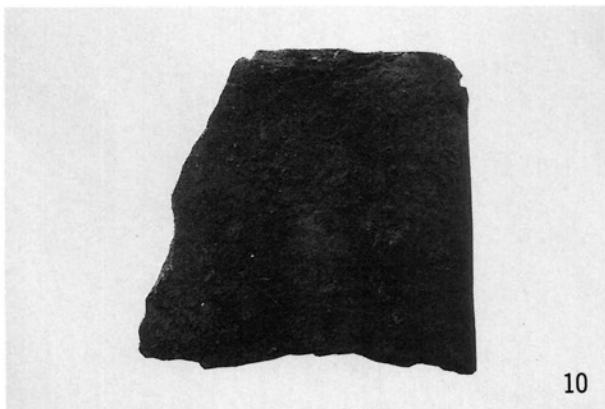








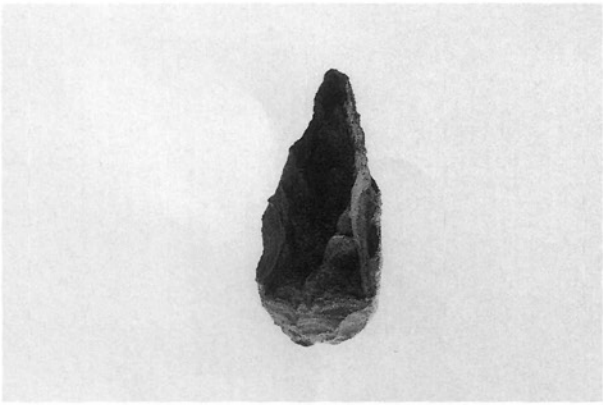




1．SK411（42—1・2）
2．P4244（45—５）
3．P4028（45—４）
4．P4003・4071・4286（45—1～3）
5．SK403（72—2）
6．SK403（72—１）
7．P4106（81—14）
8．SB444（55—４）
9．P4106（81—２）
10．表土下層（82—9）

(1)　５区調査区全景（南から）

(2)　SD501溝（東から）



1．SD501（86―６）

千布二本黒木遺跡
収　蔵　品　目　録

千布二本黒木遺跡１～５区（CNK-1～5）　Ｉ種　　収蔵品目録

番　号	名　称	種　別	計測値　( )内は復元値・残存値	遺構	実測図	挿図	収納
CNK-1-001	把　手	土 師 器	口径 —— 底径 —— 器高 ——	SD102	001	8 -1	1
CNK-1-002	甕	弥生土器	口径(26.2)底径 —— 器高(8.6)	SK103	002	6 -2	1
CNK-1-003	甕	弥生土器	口径(24.8)底径 —— 器高(6.9)	SK103	003	——	1
CNK-1-004	甕	弥生土器	口径 —— 底径(7.9)器高(14.8)	SK103	004	6 -4	1
CNK-1-005	甕	弥生土器	口径 —— 底径(6.8)器高(14.7)	SK103	005	6 -3	1
CNK-1-006	器　台	弥生土器	口径(10.4)底径(12.9)器高 15.8	SK103	006	6 -5	1
CNK-2-001	甕	弥生土器	口径 —— 底径 —— 器高 ——	SD201	001	15-6	2
CNK-2-002	甕	弥生土器	口径(23.4)底径 —— 器高(5.6)	SD201	002	15-1	2
CNK-2-003	甕	弥生土器	口径(23.2)底径 —— 器高(9.8)	SD201	003	15-5	2
CNK-2-004	甕	弥生土器	口径(25.8)底径 —— 器高(9.6)	SD201	004	15-2	2
CNK-2-005	壺	弥生土器	口径(14.2)底径 —— 器高(4.0)	SD201	005	16-15	2
CNK-2-006	甕	弥生土器	口径(20.0)底径 —— 器高(16.1)	SD201	006	15-4	2
CNK-2-007	甕	弥生土器	口径(21.0)底径 —— 器高(12.6)	SD201	007	15-3	2
CNK-2-008	甕	弥生土器	口径 —— 底径 6.2 器高(5.1)	SD201	008	15-11	2
CNK-2-009	甕	弥生土器	口径 —— 底径 6.8 器高(6.5)	SD201	009	15-10	2
CNK-2-010	甕	弥生土器	口径 —— 底径(9.4)器高(6.3)	SD201	010	15-13	2
CNK-2-011	甕	弥生土器	口径 —— 底径(7.4)器高(2.0)	SD201	011	15-7	2
CNK-2-012	甕	弥生土器	口径 —— 底径 6.2 器高(2.2)	SD201	012	15-8	2
CNK-2-013	甕	弥生土器	口径 —— 底径 6.8 器高(5.8)	SD201	013	15-9	2
CNK-2-014	甕	弥生土器	口径 —— 底径 7.2 器高(4.4)	SD201	014	15-12	2
CNK-2-015	壺	弥生土器	口径 24.5 底径 —— 器高(9.7)	SD201	015	16-18	2
CNK-2-016	壺	弥生土器	口径(17.2)底径 —— 器高(6.0)	SD201	016	16-17	2
CNK-2-017	壺	弥生土器	口径(16.8)底径 —— 器高(5.8)	SD201	017	16-16	2
CNK-2-018	壺	弥生土器	口径(19.2)底径 —— 器高(7.9)	SD201	018	16-14	2
CNK-2-019	壺	弥生土器	口径 —— 底径 —— 器高(8.3)	SD201	019	16-19	2
CNK-2-020	壺	弥生土器	口径 —— 底径 5.6 器高(3.4)	SD201	020	16-20	2
CNK-2-021	壺	弥生土器	口径 —— 底径 5.0 器高(4.6)	SD201	021	16-21	2
CNK-2-022	壺	弥生土器	口径 —— 底径(7.9)器高(7.9)	SD201	022	16-22	2
CNK-2-023	高　杯	弥生土器	口径 —— 底径 13.0 器高(7.5)	SD201	023	16-23	2
CNK-2-024	器　台	弥生土器	口径(10.4)底径 —— 器高(12.9)	SD201	024	16-25	2
CNK-2-025	器　台	弥生土器	口径(10.0)底径(9.6)器高 14.7	SD201	025	16-24	2
CNK-2-026	支　脚	弥生土器	口径 4.7 底径 6.2 器高 11.4	SD201	026	16-26	2
CNK-2-027	支　脚	弥生土器	口径 —— 底径 9.4 器高 5.3	SD201	027	16-27	2
CNK-2-028	投　弾	土 製 品	長 3.9　厚 2.0　幅 2.0	SD201	028	17-29	2
CNK-2-029	投　弾	土 製 品	長 4.6　厚 2.3　幅 2.3	SD201	029	17-28	2
CNK-2-030	石包丁	石　器	長(10.7)　厚 0.7　幅 6.6	SD201	030	17-33	2
CNK-2-031	石包丁	石　器	長(7.2)　厚 0.6　幅 6.5	SD201	031	17-32	2
CNK-2-032	石　斧	石　器	長(10.6)　厚 4.0　幅 4.2	SD201	032	17-31	2
CNK-2-033	石　斧	石　器	長(12.7)　厚 4.7　幅 7.2	SD201	033	17-30	2
CNK-2-034	蓋	弥生土器	口径 —— 頭径 6.3 器高 10.2	SD203	034	19-5	3

千布二本黒木遺跡１～５区（CNK-1～5）　Ⅰ種　　収蔵品目録

番　号	名　称	種　別	計測値　( )内は復元値・残存値	遺構	実測図	挿図	収納
CNK-2-035	蓋	弥生土器	口径 —— 頭径 5.5 器高(5.3)	SD203	035	19-4	3
CNK-2-036	蓋	弥生土器	口径 —— 頭径 5.7 器高(6.2)	SD203	036	19-3	3
CNK-2-037	蓋	弥生土器	口径 —— 頭径 5.0 器高(5.4)	SD203	037	19-1	3
CNK-2-038	蓋	弥生土器	口径 —— 頭径 5.0 器高(7.6)	SD203	038	17-2	3
CNK-2-039	甕	弥生土器	口径 14.2 頭径 8.5 器高 18.0	SD203	039	19-6	3
CNK-2-040	甕	弥生土器	口径(27.6)底径 —— 器高(7.1)	SD203	040	20-16	3
CNK-2-041	甕	弥生土器	口径(59.4)底径 —— 器高(8.8)	SD203	041	——	3
CNK-2-042	甕	弥生土器	口径(22.5)底径 —— 器高(3.4)	SD203	042	20-18	3
CNK-2-043	甕	弥生土器	口径(24.6)底径 —— 器高(6.2)	SD203	043	19-11	3
CNK-2-044	甕	弥生土器	口径(26.2)底径 —— 器高(11.1)	SD203	044	19-13	3
CNK-2-045	甕	弥生土器	口径(26.4)底径 —— 器高(6.9)	SD203	045	20-15	3
CNK-2-046	甕	弥生土器	口径(26.5)底径 —— 器高(6.9)	SD203	046	20-14	3
CNK-2-047	甕	弥生土器	口径(23.1)底径 —— 器高(6.8)	SD203	047	19-9	3
CNK-2-048	甕	弥生土器	口径(26.1)底径 —— 器高(7.8)	SD203	048	19-12	3
CNK-2-049	甕	弥生土器	口径(25.2)底径 —— 器高 11.2	SD203	049	——	3
CNK-2-050	甕	弥生土器	口径(22.3)底径 —— 器高(9.4)	SD203	050	19-8	3
CNK-2-051	甕	弥生土器	口径(19.0)底径 —— 器高(5.5)	SD203	051	19-7	3
CNK-2-052	甕	弥生土器	口径(28.4)底径 —— 器高(6.3)	SD203	052	20-17	3
CNK-2-053	甕	弥生土器	口径(25.0)底径 —— 器高(8.2)	SD203	053	20-19	3
CNK-2-054	甕	弥生土器	口径 —— 底径 6.5 器高(5.1)	SD203	054	20-20	3
CNK-2-055	甕	弥生土器	口径 —— 底径(8.2)器高(9.0)	SD203	055	20-25	3
CNK-2-056	甕	弥生土器	口径 —— 底径 8.2 器高(5.0)	SD203	056	20-24	3
CNK-2-057	甕	弥生土器	口径 —— 底径 7.7 器高(7.0)	SD203	057	20-22	3
CNK-2-058	甕	弥生土器	口径 —— 底径 7.7 器高(7.3)	SD203	058	20-23	3
CNK-2-059	甕	弥生土器	口径 —— 底径 6.8 器高(6.2)	SD203	059	20-21	3
CNK-2-060	甕	弥生土器	口径 —— 底径(11.0)器高(8.0)	SD203	060	20-26	3
CNK-2-061	壺	弥生土器	口径 —— 底径 6.3 器高(7.5)	SD203	061	20-29	3
CNK-2-062	壺	弥生土器	口径 —— 底径 —— 器高(9.0)	SD203	062	20-27	3
CNK-2-063	壺	弥生土器	口径 —— 底径 5.1 器高(3.0)	SD203	063	20-28	3
CNK-2-064	高　坏	弥生土器	口径 —— 底径 —— 器高(14.0)	SD203	064	21-30	3
CNK-2-065	器　台	弥生土器	口径 9.3 底径 —— 器高(13.0)	SD203	065	21-31	3
CNK-2-066	器　台	弥生土器	口径 —— 底径 10.4 器高(6.3)	SD203	066	21-32	3
CNK-2-067	器　台	弥生土器	口径 —— 底径 12.2 器高(7.0)	SD203	067	21-33	3
CNK-2-068	支　脚	弥生土器	口径 —— 底径 —— 器高(6.9)	SD203	068	21-34	3
CNK-2-069	石　剣	石　器	口径(5.3)　厚 1.1　幅 3.7	SD203	069	21-35	3
CNK-2-070	不明石器	石　器	口径(5.7)　厚 1.1　幅 3.3	SD203	070	——	3
CNK-2-071	甕	弥生土器	口径(24.3)底径 —— 器高(11.6)	SX204	071	23-3	4
CNK-2-072	甕	弥生土器	口径(25.9)底径 —— 器高(10.4)	SX204	072	23-4	4
CNK-2-073	甕	弥生土器	口径(24.3)底径 —— 器高(15.5)	SX204	073	23-2	4
CNK-2-074	甕	弥生土器	口径(28.0)底径 —— 器高(10.0)	SX204	074	24-6	4

千布二本黒木遺跡１～５区（CNK-1～5）　Ｉ種　　収蔵品目録

番　号	名　称	種　別	計測値　（ ）内は復元値・残存値	遺構	実測図	挿図	収納
CNK-2-075	鉢	弥生土器	口径(31.2)底径 —— 器高(8.8)	SX204	075	25-26	4
CNK-2-076	甕	弥生土器	口径(28.8)底径 —— 器高(7.3)	SX204	076	24-8	4
CNK-2-077	甕	弥生土器	口径(21.1)底径 —— 器高(5.9)	SX204	077	24-7	4
CNK-2-078	甕	弥生土器	口径(28.4)底径 —— 器高(15.5)	SX204	078	23-5	4
CNK-2-079	甕	弥生土器	口径(27.4)底径 —— 器高(2.3)	SX204	079	24-9	4
CNK-2-080	甕	弥生土器	口径(16.8)底径 —— 器高(12.5)	SX204	080	24-10	4
CNK-2-081	甕	弥生土器	口径 —— 底径 —— 器高(15.8)	SX204	081	24-11	4
CNK-2-082	蓋	弥生土器	口径 —— 頭径 6.2 器高(10.7)	SX204	082	23-1	4
CNK-2-083	甕	弥生土器	口径 —— 底径 5.8 器高(8.8)	SX204	083	24-13	4
CNK-2-084	甕	弥生土器	口径 —— 底径 5.9 器高(6.8)	SX204	084	24-15	4
CNK-2-085	甕	弥生土器	口径 —— 底径(7.8)器高(6.0)	SX204	085	24-16	4
CNK-2-086	甕	弥生土器	口径 —— 底径 6.5 器高(5.2)	SX204	086	24-12	4
CNK-2-087	甕	弥生土器	口径 —— 底径 6.5 器高(6.7)	SX204	087	24-14	4
CNK-2-088	壺	弥生土器	口径(18.8)底径 —— 器高(7.2)	SX204	088	25-19	5
CNK-2-089	壺	弥生土器	口径(23.1)底径 —— 器高(9.4)	SX204	089	25-21	5
CNK-2-090	壺	弥生土器	口径(18.4)底径 —— 器高(6.0)	SX204	090	25-18	5
CNK-2-091	壺	弥生土器	口径(21.8)底径 —— 器高(7.2)	SD203	091	25-20	5
CNK-2-092	鉢	弥生土器	口径(43.2)底径 —— 器高(7.4)	SD203	092	25-27	5
CNK-2-093	壺	弥生土器	口径(24.0)底径 —— 器高(9.2)	SD203	093	25-22	5
CNK-2-094	壺	弥生土器	口径(13.6)底径 —— 器高(9.2)	SD203	094	25-17	5
CNK-2-095	壺	弥生土器	口径 —— 底径 —— 器高(23.4)	SD203	095	25-23	5
CNK-2-096	壺	弥生土器	口径 —— 底径 4.8 器高(3.3)	SD203	096	25-24	5
CNK-2-097	鉢	弥生土器	口径 11.3 底径 4.2 器高 5.2	SD203	097	25-25	5
CNK-2-098	器　台	弥生土器	口径 5.8 底径 8.4 器高 14.9	SD203	098	26-29	5
CNK-2-099	支　脚	弥生土器	口径 6.4 底径 —— 器高(9.8)	SD203	099	26-28	5
CNK-2-100	支　脚	弥生土器	口径 8.4 底径 8.7 器高 13.2	SD203	100	26-30	5
CNK-2-101	支　脚	弥生土器	口径 4.2 底径 —— 器高(8.5)	SD203	101	26-32	5
CNK-2-102	支　脚	弥生土器	口径 5.0 底径 —— 器高(7.2)	SD203	102	26-31	5
CNK-2-103	投　弾	土製品	長 4.2 厚 2.4 幅 2.4	SD203	103	26-33	5
CNK-2-104	砥　石	石　器	長 9.9 厚 7.6 幅 9.7	SD203	104	26-34	5
CNK-2-105	石包丁	石　器	長(13.7) 厚 0.7 幅 4.3	SB206	105	12-1	5
CNK-3-001	坏	土師器	口径(9.0)底径 5.7 器高 2.9	SB301	001	30-2	6
CNK-3-002	皿	陶　器	口径 12.3 底径 4.1 器高 3.9	SB301	002	30-5	6
CNK-3-003	擂　鉢	瓦　器	口径 —— 底径(16.4)器高(6.3)	SB301	003	30-4	6
CNK-3-004	鍋	土師器	口径 —— 底径 —— 器高 4.0	SB301	004	30-3	6
CNK-3-005	碗	陶　器	口径(8.6)底径 —— 器高(5.8)	SB301	005	30-6	6
CNK-3-006	石　斧	石　器	長(7.8) 厚 4.2 幅 5.9	SB301	006	30-7	6
CNK-3-007	鉢	瓦　器	口径(28.7)底径(23.3)器高(24.5)	SB305	007	33-1	6
CNK-3-008	坏	土師器	口径 —— 底径(4.4)器高(1.4)	SB301	008	30-1	6
CNK-3-009	石　鏃	石　器	長 1.9 厚 0.2 幅 1.4	SB301	009	30-8	6

千布二本黒木遺跡１～５区（CNK-1～5）　Ｉ種　　収蔵品目録

番　号	名　称	種　別	計測値　( )内は復元値・残存値	遺構	実測図	挿図	収納
CNK-3-010	鉢	瓦　器	口径 25.4 底径 19.4 器高 19.5	SD306	010	36-1	6
CNK-3-011	碗	青　磁	口径(13.8)底径(7.6)器高 4.8	SX309	011	38-1	6
CNK-3-012	碗	陶　器	口径 —— 底径 4.2 器高(3.7)	SX309	012	38-6	6
CNK-3-013	碗	磁　器	口径(9.7)底径(4.0)器高 5.4	SX309	013	38-3	6
CNK-3-014	皿	磁　器	口径 13.0 底径 7.5 器高 3.1	SX309	014	38-2	6
CNK-3-015	皿	陶　器	口径(18.2)底径 —— 器高(4.9)	SX309	015	38-5	6
CNK-3-016	合子蓋	磁　器	口径 6.6 底径 —— 器高(1.9)	SX309	016	38-4	6
CNK-3-017	擂　鉢	陶　器	口径(33.5)頭径(11.4)器高 12.0	SX309	017	30-7	6
CNK-3-018	擂　鉢	陶　器	口径 —— 底径 10.6 器高(10.5)	SX309	018	38-8	6
CNK-4-001	甕	弥生土器	口径 —— 底径 6.3 器高(6.9)	SD401	001	47-1	7
CNK-4-002	高　坏	土 師 器	口径 —— 底径(13.7)器高(9.0)	SD401	002	47-2	7
CNK-4-003	小　皿	土 師 器	口径 8.0 底径 6.9 器高 1.5	SK403	003	72-1	7
CNK-4-004	坏	土 師 器	口径 13.0 底径 9.8 器高 3.2	SK403	004	72-2	7
CNK-4-006	小　皿	土 師 器	口径 —— 底径 7.0 器高(1.2)	SE404	006	67-1	7
CNK-4-007	小　皿	土 師 器	口径 —— 底径 8.2 器高(1.5)	SE404	007	67-2	7
CNK-4-008	碗	青　磁	口径 —— 底径 —— 器高 ——	SE404	008	67-3	7
CNK-4-009	石　斧	石　器	長(8.1) 厚 4.6 幅 8.1	SE404	009	67-4	7
CNK-4-011	坏	土 師 器	口径 —— 底径(11.0)器高(2.8)	SK410	011	75-1	7
CNK-4-012	甕	縄文土器	口径 —— 底径 —— 器高(6.0)	SK411	012	42-1	7
CNK-4-013	甕	縄文土器	口径 —— 底径 —— 器高(7.2)	SK411	013	42-2	7
CNK-4-014	甕	縄文土器	口径 —— 底径 —— 器高(4.7)	SK411	014	42-3	7
CNK-4-015	甕	縄文土器	口径 —— 底径 3.1 器高(3.1)	SK411	015	42-4	7
CNK-4-016	削　器	石　器	長 7.2 厚 1.5 幅 2.3	SK411	016	42-5	7
CNK-4-017	小　皿	土 師 器	口径 8.4 底径 7.0 器高 1.4	SE412	017	67-6	7
CNK-4-018	小　皿	土 師 器	口径 7.7 底径 7.2 器高 1.3	SE412	018	67-5	7
CNK-4-021	砥　石	石　器	長 7.9 厚 —— 幅 3.2	SE413	021	69-1	7
CNK-4-022	坏	土 師 器	口径 —— 底径 8.0 器高 1.1	SE415	022	51-1	7
CNK-4-023	椀	土 師 器	口径 —— 底径 8.6 器高 2.7	SE416	023	51-2	7
CNK-4-024	石　鏃	石　器	長 2.1 厚 0.5 幅 1.9	SK420	024	——	7
CNK-4-025	甕	土 師 器	口径(17.7)底径 —— 器高(17.1)	P4008	025	48-1	7
CNK-4-026	石　鏃	石　器	長 3.0 厚 0.3 幅 2.2	P4013	026	45-6	7
CNK-4-027	甕	縄文土器	口径 —— 底径 —— 器高(4.0)	P4028	027	45-4	7
CNK-4-028	椀	瓦　器	口径(16.6)底径 7.6 器高 7.0	P4037	028	81-19	7
CNK-4-030	坏	土 師 器	口径(13.0)底径(10.5)器高 3.3	P4064	030	81-13	7
CNK-4-032	坏	土 師 器	口径(15.0)底径 10.4 器高 3.3	P4091	032	81-15	7
CNK-4-034	瓦	瓦	長(9.6) 厚 2.0 幅 8.7	P4094	034	82-9	7
CNK-4-035	坏	土 師 器	口径(9.0)底径(6.5)器高 1.8	P4101	035	——	7
CNK-4-036	小　皿	土 師 器	口径 7.8 底径 6.0 器高 1.5	P4106	036	81-2	7
CNK-4-037	小　皿	土 師 器	口径(8.4)底径(7.5)器高 1.7	P4106	037	81-4	7
CNK-4-038	坏	土 師 器	口径(14.5)底径(10.6)器高 2.4	P4106	038	81-14	7

千布二本黒木遺跡１～５区（CNK-1～5）　Ｉ種　　収蔵品目録

番　号	名　称	種　別	計測値　（ ）内は復元値・残存値	遺構	実測図	挿図	収納
CNK-4-039	坏	土師器	口径 —— 底径(9.4)器高(1.4)	P4106	039	81-8	7
CNK-4-040	小皿	土師器	口径(9.8)底径(8.0)器高 1.5	P4108	040	81-6	7
CNK-4-041	坏	土師器	口径 —— 底径(8.2)器高(3.2)	P4116	041	81-9	7
CNK-4-042	小皿	土師器	口径(9.3)底径(7.5)器高 1.4	P4124	042	81-5	7
CNK-4-043	坏	土師器	口径 12.0 底径 7.1 器高 2.7	P4126	043	52-1	7
CNK-4-044	坏	土師器	口径(11.6)底径 7.2 器高 3.3	P4126	044	52-2	7
CNK-4-045	椀	土師器	口径 —— 底径(7.8)器高(3.3)	P4126	045	52-3	7
CNK-4-046	小皿	土師器	口径(9.8)底径(8.0)器高 1.6	P4130	046	81-7	7
CNK-4-047	碗	白磁	口径 —— 底径 —— 器高	P4131	047	81-21	7
CNK-4-048	坏	土師器	口径 —— 底径(9.8)器高(1.8)	P4134	048	81-10	7
CNK-4-049	鍋	土師器	口径 —— 底径 —— 器高(6.2)	P4134	049	81-18	7
CNK-4-050	碗	青磁	口径 —— 底径 —— 器高 ——	P4136	050	81-20	7
CNK-4-051	鍋	土師器	口径(38.1)底径 —— 器高(2.7)	P4142	051	81-17	7
CNK-4-052	擂鉢	瓦器	口径(28.2)底径(12.3)器高 10.5	P4201	052	64-2	7
CNK-4-053	小皿	土師器	口径(9.1)底径(7.8)器高 1.9	P4211	053	58-2	7
CNK-4-054	坏	土師器	口径 12.6 底径 8.0 器高 3.4	P4214	054	58-1	7
CNK-4-055	小皿	土師器	口径(8.8)底径(6.8)器高 1.6	P4217	055	55-2	7
CNK-4-056	石鍋	石製品	口径 —— 底径 —— 器高 ——	P4217	——	——	7
CNK-4-057	小皿	土師器	口径(9.0)底径(7.0)器高 1.6	P4220	057	61-3	7
CNK-4-058	小皿	土師器	口径(8.6)底径(6.8)器高 1.4	P4223	058	61-2	7
CNK-4-059	小皿	土師器	口径(6.9)底径(4.2)器高 1.8	P4224	059	61-1	7
CNK-4-060	小皿	土師器	口径 —— 底径(4.8)器高 1.2	P4225	060	81-1	7
CNK-4-061	小皿	土師器	口径(8.6)底径(6.0)器高 1.4	P4227	061	54-3	7
CNK-4-062	小皿	土師器	口径(7.9)底径(5.3)器高 2.0	P4228	062	54-1	7
CNK-4-063	鍋	土師器	口径 —— 底径 —— 器高(2.5)	P4228	063	54-7	7
CNK-4-065	坏	土師器	口径(10.0)底径(6.3)器高 1.9	P4233	065	55-5	7
CNK-4-066	小皿	土師器	口径(8.7)底径(6.0)器高 1.7	P4233	066	55-1	7
CNK-4-067	小皿	土師器	口径(9.0)底径(6.6)器高 1.6	P4233	067	55-4	7
CNK-4-068	鍋	土師器	口径 —— 底径 —— 器高(2.5)	P4234	068	54-6	7
CNK-4-069	坏	土師器	口径(12.6)底径(7.7)器高 2.6	P4236	069	59-1	7
CNK-4-070	碗	白磁	口径 —— 底径(4.6)器高(1.3)	P4239	070	64-1	7
CNK-4-072	坏	土師器	口径(14.8)底径(13.0)器高 3.1	P4243	072	60-1	7
CNK-4-073	石匙	石器	長 10.1 厚 1.8 幅 4.0	P4244	073	45-5	7
CNK-4-075	石鍋	石製品	口径 —— 底径 9.0 器高(2.1)	P4250	075	56-5	7
CNK-4-076	坏	土師器	口径 —— 底径 9.5 器高 2.4	P4250	076	56-3	7
CNK-4-077	小皿	土師器	口径(8.2)底径(6.4)器高 1.8	P4250	077	56-1	7
CNK-4-078	坏	土師器	口径 —— 底径(8.6)器高(3.2)	P4250	078	56-4	7
CNK-4-079	坏	土師器	口径 —— 底径(7.0)器高 2.0	P4253	079	56-2	7
CNK-4-080	坏	土師器	口径(14.4)底径(8.7)器高 3.4	P4255	080	55-7	7
CNK-4-081	小皿	土師器	口径(8.2)底径(6.0)器高 1.8	P4256	081	54-2	7

千布二本黒木遺跡１～５区（CNK-1～5）　Ｉ種　　収蔵品目録

番　号	名　称	種　別	計測値　( )内は復元値・残存値	遺構	実測図	挿図	収納
CNK-4-082	坏	土師器	口径 —— 底径(10.0)器高(1.9)	P4259	082	54-4	7
CNK-4-083	坏	土師器	口径(7.9)底径(6.8)器高 1.1	P4262	083	81-3	7
CNK-4-084	坏	土師器	口径 —— 底径 —— 器高(3.4)	P4264	084	81-16	7
CNK-4-085	坏	土師器	口径 —— 底径(10.0)器高 2.7	P4266	085	81-11	7
CNK-4-086	坏	土師器	口径 —— 底径(10.7)器高 2.3	P4266	086	54-5	7
CNK-4-087	擂鉢	須恵器	口径 —— 底径(13.4)器高 4.2	P4267	087	54-8	7
CNK-4-088	坏	土師器	口径(13.8)底径(10.0)器高(3.2)	P4269	088	81-12	7
CNK-4-089	小皿	土師器	口径 —— 底径(8.0)器高 1.8	P4276	089	55-6	7
CNK-4-090	小皿	土師器	口径(9.0)底径(7.0)器高 1.7	P4277	090	55-3	7
CNK-4-091	坏	土師器	口径 5.8 底径 3.3 器高 1.9	表土下層	091	82-3	7
CNK-4-092	坏	土師器	口径 —— 底径 4.7 器高(2.7)	表土下層	092	82-6	7
CNK-4-093	坏	土師器	口径 6.8 底径 3.6 器高 2.2	表土下層	093	82-4	7
CNK-4-094	坏	土師器	口径 7.1 底径 3.7 器高 2.3	表土下層	094	82-5	7
CNK-4-095	鍋	土師器	口径(23.8)底径 —— 器高(8.5)	表土下層	095	82-7	7
CNK-4-096	擂鉢	須恵器	口径(25.9)底径 —— 器高(6.7)	表土下層	096	82-8	7
CNK-4-097	皿	磁器	口径(9.8)底径 —— 器高(1.8)	表土下層	097	82-11	7
CNK-4-098	碗	青磁	口径(16.3)底径 —— 器高(4.4)	表土下層	098	82-12	7
CNK-4-099	碗	青磁	口径 —— 底径(7.4)器高(1.9)	表土下層	099	82-10	7
CNK-4-100	小皿	土師器	口径 —— 底径(5.2)器高(0.9)	表土下層	100	82-1	7
CNK-4-101	小皿	土師器	口径 8.0 底径 6.2 器高 1.8	表土下層	101	82-2	7
CNK-4-102	ガラス小玉	ガラス製品	長 0.4 径(0.5)孔径 0.1	表土下層	102	82-13	7
CNK-4-103	?	縄文土器	――――――――――	P4071	103	45-1	7
CNK-4-104	?	縄文土器	――――――――――	P4003	104	45-2	7
CNK-4-105	?	縄文土器	――――――――――	P4236	105	45-3	7
CNK-5-001	碗	磁器	口径 —— 底径 3.6 器高(2.7)	SD501	001	86-3	8
CNK-5-002	碗	磁器	口径 —— 底径(3.6)器高(2.0)	SD501	002	86-2	8
CNK-5-003	碗	磁器	口径 —— 底径(4.8)器高(2.1)	SD501	003	86-4	8
CNK-5-004	碗	磁器	口径 —— 底径(3.4)器高(2.6)	SD501	004	86-1	8
CNK-5-005	擂鉢	陶器	口径(24.0)底径 —— 器高(5.0)	SD501	005	86-5	8
CNK-5-009	尖頭器	石器	長 7.9 厚 1.9 幅 3.8	SD501	009	86-6	8
CNK-5-010	尖頭器	石器	長 4.9 厚 1.1 幅 3.3	SD501	010	86-7	8
CNK-5-012	甕	弥生土器	口径(14.0)底径 —— 器高 4.0	SX503	012	84-1	8
CNK-5-013	甕	弥生土器	口径(24.2)底径 —— 器高(4.5)	SX503	013	84-2	8
CNK-5-014	甕	弥生土器	口径(26.4)底径 —— 器高(3.4)	SX503	014	84-3	8
CNK-5-015	甕	弥生土器	口径 —— 底径 5.8 器高(4.3)	SX503	015	84-4	8
CNK-5-016	甕	弥生土器	口径 —— 底径 7.2 器高(3.2)	SX503	016	84-6	8
CNK-5-017	甕	弥生土器	口径 —— 底径(6.4)器高(2.5)	SX503	013	84-5	8
CNK-5-018	壺	弥生土器	口径 —— 底径(9.6)器高(7.1)	SX503	014	84-7	8
CNK-5-019	鉢	弥生土器	口径(19.4)底径 —— 器高(7.9)	SX503	015	84-8	8
CNK-5-020	尖頭器	石器	長 4.2 厚 0.5 幅 0.9	SX503	016	84-9	8

千布二本黒木遺跡１～５区（CNK-1～5）　II種　　収蔵品目録

調査区	種別	遺構図	袋数	収納
CNK-1	弥生土器・土師器	SK101・SD102・SK103・P1001～1020	25	9
CNK-2	弥生土器	SD201	8	10
CNK-2	弥生土器	SD201	6	11
CNK-2	弥生土器	SD201	6	12
CNK-2	弥生土器	SD201	7	13
CNK-2	弥生土器	SD203・SX204	6	14
CNK-2	弥生土器	SD203	6	15
CNK-2	弥生土器	SD203	6	16
CNK-2	弥生土器	SD203	6	17
CNK-2	弥生土器	SX204	6	18
CNK-2	弥生土器	SX204	6	19
CNK-2	弥生土器	SX204・SK208・SK209・SK210・SB206・SK207	13	20
CNK-2	弥生土器	P2001～2016・表土下層	22	21
CNK-3	土師器、瓦器、磁器、陶器	SB301・SB302・SB303・SB305・SD306・SD308・SX309・SD310・SX311・P3003・P3046	30	22
CNK-4	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、磁器	SD401・SD402・SK403・SK405・SE406・SK408～411・SE412・SE413・SD414・SE415～417・SK418～424・SD425・SD426・SE427・SK428・SK429～432・SD433・SX438	44	23
CNK-4	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、磁器	P4001～4280	331	24
CNK-4	弥生土器、土師器、、須恵器、瓦器、磁器	表土下層	5	25
CNK-5	弥生土器、磁器、陶器	SD501・SD502・SX503	9	26

佐賀市文化財調査報告書第47集

千布二本黒木遺跡

平成５年３月31日

発行　佐賀市教育委員会
佐賀市栄町１番１号

印刷　㈱佐賀印刷社
佐賀市高木瀬西六丁目11-7